

279号



富山
グループ(女網)

支

援

の

現

場

か

ら

バイオレンス

特集DVⅡ

籠の鳥 空へ

◆現場から◆

〈女網〉の活動と課題

インターネットにおけるDV当事者への支援

とやま女性相談センター

富山県における支援弁護士制度

市議会議員として

DVと家事調停

◆支援最前線◆

DVの早期発見と予防 一産婦人科医の立場から

男性〈加害者〉へのサポート

自立と福祉の活用

ヨロガチ〈女のよろず〉電話相談

全国一斉DV電話相談を実施して

◆千葉に学ぶ◆

「DV施策先進県へ」千葉の取り組み

野田市「公設民営のシェルター」と「のだフレンドシップ青い鳥」

千葉県初の民間シェルター「かしわ ふくろうの家」

◆お役立ち情報◆

各地の施設／電話相談など

◆映像メディアとDV問題 深津まゆみ

◆行動する山下清子さん

◆北朝鮮拉致事件に思う 李 英伊

自分が悪いと思っていないですか

自分を責めないでください
がまんして耐えているうちに
ドメスティック・バイオレンスは
エスカレートします。



© 2000 MAYU工房

全国各地にDV支援センターや民間サポートグループがあります。

みんなであなたといっしょに考えます。

74頁からのお役立ち情報にリストがあります。

グループ女網(なづな)～ストップDVとやま～

TEL:076-491-1081 Eメール: naduna2000@yahoo.co.jp

HP: <http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Suzuran/3062/>

DV特集Ⅱ 支援の現場から

籠の鳥 空へ 2

〈女網〉の活動と課題 登石知子 8
 インターネットにおけるDV当事者への支援 遊道直美 13
 富山県女性相談センターの現状から 酒井トミイ 20
 富山県における「支援弁護士制度」の誕生 斉藤寿雄 23
 “市議会議員として”のDVへの取り組み 志麻愛子 25
 DVと家事調停 小橋洋美／登石知子 28

支援最前線
 DV事例の早期発見とその対策―産婦人科医の立場から 加藤治子 33
 男性（加害者）へのサポートの現状 原 健一 40
 自立と福祉 野口真理子 44
 女によろず（ヨロガチ）電話相談 皇甫康子 48
 全国一斉DV電話相談を実施して 広島・虹 51

千葉に学ぶ
 「DV施策先進県へ」千葉の取り組み 堀江節子 56
 野田市「公設民営のシェルターと「のだフレンドシップ青い鳥」 登石知子 62
 千葉県初の民間シェルター「かしわ ふくろうの家」 細谷久子 65

めじやーなりすとのめ 映像メディアとDV問題 深津麻弓 68
 資料・全国女性シェルターネットワーク要望書 70
 お役立ち情報 配偶者暴力相談支援センター 74 精神保健福祉センター 76 婦人保護施設 77
 民間電話相談窓口 78 ブックリスト 81

あごら読書室 「モラル・ハラスメント 人を傷つけずにはいられない」ほか 82
 あごらメイト 「政策決定に女性を！」山下清子さん 84

語りかけたあなたへ48 鹿角市制三〇周年 大里知子 86
 意見・異見 北朝鮮拉致事件に思う 李 英伊
 TOPICS 芝信、最高裁で画期的勝利確定／「配偶者特別控除」中止へほか 91
 集会から（あごら九州）二五周年記念の集いほか 94
 あごらのあごら 96
 目次で振り返る『あごら』三〇年⑥（1985年1月～1986年11月） 99

籠の鳥、空へ

DV当事者を〈籠の鳥〉にたとえるなら……。

閉じ込められ、見えない鎖で繋がれ、

自由に飛ぶこともさえすることさえもできなくなっていく……。

すべては飼い主の意のままに。

夫は、他の誰からも「いい人」と評され、仕事ぶりも真面目で後輩からも慕われていた。夫の実家を訪れた際、夫の父親が母親を「馬鹿！ 役立たず！」と罵っていたことを今さらのように思い出す。夫は私が妊娠した頃から暴力をふるうようになった。

「暴力さえなければ、いい人」「お酒のせい」「職場のストレスのせい」「子どもが生まれたら、変わってくれるに違いない」そう信じ続けた。何よりも私自身、中学生の時に父親が急死し、「母子家庭」というだけで差別や偏見の目で見られた。母子家庭にはしたくない。そんな想いがあつたのだと思う。母親は再婚しており、逃げ帰れる家もなかった。余計な心配もかけたくなかった。

*

家族で外出する時、私は幸せな妻に見えていただろう。子どもが生まれてからも、何も変わら

なかった。身体中、青アザだらけでうつむいて歩く。夫の機嫌を伺い、びくびくしながら暮らす。そんな毎日。何が機嫌を損ねるきっかけになるかわからない。どんなに気を遣っても努力しても「いたらぬ妻のしつけ」と称する暴力のきっかけは無限にあった。何をしても、そして何もしなくても。子どもに対しても、「しつけ」と称した暴力は及んだ。夫の帰宅時間が近づく、幼い子どもさえも「ねえ、僕今日いい子にしていたって言つて」とおびえるようになった。

*

DVの暴力の一つに「性的暴力」がある。逃げ場のない部屋の隅まで追い詰められて。殴られ、壁に頭を打ちつけられても……。夫婦間のレイプは成立しなかった。「相手をするのは妻の仕事のうちだ」と。

夫に「私も悪いところがあつたら直すように努力するから。貴方も暴力はやめて」と話し合った。その時は「わかった。俺が悪かった」と言うものの、また同じ日々の繰り返し。殴られて、抵抗すれば暴力が何十倍にもなるだけ。ただ……。嵐が通り過ぎるのを待つだけの時間。そして私の心は、どんどん麻痺していった。『何も感じない、何も考えない、ここにいる私は私ではない』……。殴られながら、自分の存在も、人間としての尊厳もなくなっていくのを感じていた。

*

「子どものために離婚しない」というのも、選択肢の一つかもしれない。全てのの人に、離婚を勧めているつもりはない。私が「離婚」を決意したのは、このままでは、子どもと私のどちらかがいつか取り返しのつかない怪我・死になると思ったから。自分が自分でなくなっていくことに、耐えられなくなったから。そして『子どもと自分自身のために、強くなりたい』と思った。

長い時間と、お金と、精神的戦いの末、私と子どもはへ自由を手にした。だから、親子という

よりは、共に戦った「同志」という感覚を抱いている。

*

離婚調停の場で、夫は「あれは暴力ではない。愛情・しつけだった」「ストレスがたまっていた」と言った。残念ながら、元夫は今でも「暴力だった」という自覚がない。数年前、子どもと口論になり、元夫は子どもを殴ろうとした。高校生になった子どもは立ち向かった。「いつまでも、殴ればいいと思うな！ 負けるかもしれないけど、殴られつばなしにはならないぞ！」と。その勢いに驚き、元夫は捨て台詞を残して立ち去った。暴力に暴力で対抗するのは、いけないことなのかもしれない。でもそれは、子どもが今まで言えなかった「心の叫び」でもあったと思う。暴力は、子どもの心にも深い傷を残す。子どもは、幼かった当時のことを覚えている。そして、「所詮殴った奴には、殴られた者の身体と心の痛みはわからない」と言っている。

子どものこと、経済的な面など、いろいろと大変なことはあるけれど、今は「あの頃の私がいたから、今の私がいる」そう思えるようになった。

*

昨今、DVの問題がクローズアップされているとはいえ、事件においても、それらは「DV」と報道されるケースが少ないことを残念に思っている。「傷害」「ストーカー」「児童虐待」「監禁」と報じられた中にも、DVが背景にあるケースが多い。「DV」と報道されることで、他の当事者が恐怖感を抱く場合もある。でも、「DV」と報道されることで「暴力は犯罪」という認識が広まる、と私は考える。「セクハラ」「ストーカー」がそうであったように。

*

長い間、暴力という「支配」の中にと、助けを求めたり、逃げ出すことができない精神

状態に追い込まれる。「私が夫を怒らせるのが悪い」と自分を責め、我慢するケースも多い。また、「今度こそ彼は変わってくれると信じた」という「希望」や「愛情」もある。

「殴られるあなたも悪いんじゃないの?」「妻の役目は、仕事で疲れた旦那さんを温かく迎えることでしょ」「子どもを片親にして平気なの?」そんな言葉の数々。傷ついた心と身体を抱えた当事者が、すべてを捨てて逃げるしかなく、その上、社会や行政からもさらに傷つけられるというのでは、あまりにも哀しい。六十代の女性から、次のように言われた時、私は言葉を失った。「この歳では今さらどうしようもない。私なんか生きている価値も生きる望みもない。死ぬのを待ただけよ」

理想を言えば〈当事者が中心〉で、その周りを社会・行政が支えあうという姿勢が望ましい。一か所ですべての支援が受けられる場が欲しい。傷ついた当事者が、行政の各機関を回り、手続きをするのは、とても辛い作業であることを私は知っている。

*

先日、知人の男性から「DVなんて本当にあるの?」と言われた。家庭という密室での暴力であり、当事者の「声」は、表にはなかなか出てこない。「表に出てこない」||「そんなケースは、ほとんどない」では決してない。「声を出せない社会」なだけ。

「殴られる方にも、何か原因があるんじゃないの?」という言葉も、よく耳にする。それは「原因・理由があれば、暴力は許される」という考えを持つことに、自分自身が気づいていないということだ。DV加害者は、当事者の言動すべてを暴力の「原因・理由」にする。〈暴力をふるうこと自体が悪い〉という認識を持つことが、すべての始まりである。

*

妹の結婚式に出席した時のこと。挙式の際、アナウンスが流れた。「一番不幸なことは、誰からも認められないこと。存在自体を否定されること」と。そして二人は、暫いの言葉を述べた。「お互いを想い合い、大切な存在として認め合うことを誓います」と。結婚した時の想いを忘れてしまう人がいるのは、なぜだろう。男性と女性は、いがみ合ったり、支配する関係ではないのに。

*

「怒り」は、誰もが持つ感情。それ自体が悪いわけではない。「怒り」の結果の第一選択は「暴力」なのだろうか？ 私たちは、お互いの気持ちを伝え合う「言葉」という手段を持っている。

「言葉」は……決して、相手を罵ったり、卑下するためのものではない。

また、私たちの身体の「手」には、字を書いたり、道具を使ったり、いろいろな役目がある。

「手を繋ぐ」「拍手をする」など、「手」は温かさを伝えるものでもある。

「手」は……決して、人を殴るための道具ではない。

*

DVに限らず、「事件・事故・病氣」など、そういう体験するのは「特殊な人」ではない。また、当事者は「同情や哀れみの対象」でもない。自分はDVとは無縁だと思っている方がたは、たまたま、そういう目にあっていないだけ。もしかしたら気づいていないかもしれない。知らず知らずのうちに当事者を傷つけたり、暴力に鈍感になっていないかと振り返り、そして、自分でできることは何なのかを考えて頂く機会になればうれしいと思っている。

行政の方がたにおいても、「縦割り行政」ではなく、今ある制度をいかに活用し、他部門と連携していくかは、一人一人の「枠組みにとらわれない、柔らかな頭と心」や「人としての姿勢」

が問われると思う。今、この瞬間にもDVで苦しんでいる当事者がいることを、決して忘れないで欲しい。

そして……DV当事者の方には――

「あなたは何も悪くない。一人で苦しまないで」と伝えたい。

*

今、私はDV当事者支援活動に参加している。これから私に何ができるのかは正直わからな
い。ただ、今の自分にできることをやり、やるべきことは何かを考え続けていきたいと思ってい
る。

日本は、米国のDV対策に遅れること二十年とも言われている。先達があるとはいえ、性別
分業が根強く残り、夫が家の主人とされる日本社会において、DVに関する認識が変わるには、
やはり二十年かかるのかもしれない。でも、二十年後、私はまだ生きている。変わりゆく日本を
見つめ、見届けたいと思っている。

子どもにこの話をして、『でも二十年後死んでいるかも』と笑いながら言ったら、彼は言った。
「お前が死んだら、俺が代わりに見届けてやるよ」と。

◇

DV当事者を「籠の鳥」にたとえたとしても……貴方の翼をもぎ取ることには誰にもできない。
飛べないと思い込まされているだけ。翼を持っていることを思い出して欲しい。籠の外の世界に
は、幾多の苦難が待ちうけているのかもしれない。でも、籠から一步外に出れば、見える景色も
変わらと思う。「一步」がまた次の「一步」に繋がる。『籠の鳥、空へ……』たくさんの同志が
貴方を見守っている。

(N)

〈女網〉の活動と課題

グループ女網ーストップDVとやまー

講座を開催し、DVに関する共通理解を持つことからスタートした富山におけるDVサポートグループ〈女網〉は、「女網ホットライン」の開設、「女網ホームページ掲示板」での相談、出前講座プログラムの開発、報道機関との協働での番組作成など、「被害当事者と痛みを共有し、ともに歩む」支援を行なっている。

1 〈グループ女網〉発足まで

一九九九(平成十二)年秋、富山で初めてのドメスティック・バイオレンス(以下DV)の講座「ストップDV女性・子どもへの暴力」が開かれました。この講座に参加した女性たちが中心となって二〇〇〇(平成十二)年六月十七日、〈グループ女網ーストップDVとやまー〉が誕生しました。

次第に女性たちの輪が広がり、会員には、DV被害当事者、DV被害から回復し立ち上がった女性(サバイバー)、DV被害当事者を支援したことがある人、DV防止・支援がこれからの社会には是非必要と思う人たちが集まりました。

会員の職業は、女性相談センター相談員、教師、看護師、家事調停に関わっている人、精神科・産婦人科医師、保護司など様々です。また、社会活動の面でも、女性や子ども、老人の人権に関わるNGOの活動をしている様ざまな分野の女性たちがいます。そして、富山市や県などの行政・福祉機関や司法機関の職員の皆さん、石川県や新潟県をはじめ日本国内のDV防止・支援活動先進地の皆さんに支えられて活動を続けています。

2 「女綱ホットライン」開設に向けて

最初の講座に続く毎月の例会や学習活動が、市民に少しずつ知られるようになっていきました。また、公的機関で催されるイベントに参加したり、集会や研修に講師として出向くなどして、地域社会にDV防止と被害当事者の支援を訴えてきました。そうしたささやかな活動から、少しずつ相談の声が届くようになりました。

しかし、DV被害に遭っている女性たちは、周囲の理解が不足していることもあり、我慢していたり声を上げることができないままのようでした。〈女綱〉では「何かできないだろうか」「声を上げてほしい」という思いから、電話相談を始めることになりました。

00(平成十二)年九月～十月「女性の悩み電話相談サポートー養成講座」全五回を行い、講座終了後、さらに七回の電話相談学習会を行なって準備し、01年四月二日、電話相談「女綱ホットライン」ストップDVー心とからだへの暴力」を開始しました。同年四月十五日、フォーラム「女性への暴力のない社会をめざして」サポートと連携、地域は何ができるのか

」を開催し、電話相談の開始と啓発を行いました。

3 支援活動

「女綱ホットライン」(電話相談)は、毎週月曜日に行なっていて、01(平成十三年)四月～02(平成十四)年九月末までに一一二人近く、延べ約一五〇人ぐらいの相談がありました。相談者の県別内訳としては、富山県内からが約六〇%、他県から約四〇%となっています。

他県からの相談が意外に多い理由として、DVの相談を近いうところにする、個人が特定されたり、親族・知人には知られたくないという言葉も聞かれました。また、携帯電話からは全国どこからかけても同一料金ということも理由の一つと考えます。

電話相談の結果、直接の支援活動として、個別に話を聞き、ともに解決策を考え、被害の経過などの整理を手伝い、女性相談センターなど相談機関への同行などのサポートをしています。しかし、面談を希望されても、日程の調整がつかないまま連絡がとれなくなったり、他の相談窓口を紹介せざるを

得ない場合にどうするのか、今後の課題です。また、女網ホームページには、県内はじめ北海道く九州く四国く全国各地から、掲示板に月約六十人、メールに月約十二く十三人の深刻な相談がきています（インターネット関係については別項をお読みください）。

相談を受けているメンバーの感想をまとめてみます。言葉の暴力など精神的暴力を伴わない身体的暴力は考えられず、相談者のほとんどが精神的暴力を受けていると思われます。そして、DV防止法ができたことで、身体的暴力からの保護

は考えられるようになりましたが、それを知った加害者は暴力は振るわないけれど、身体的暴力をちらつかせて（精神的な暴力）支配を続けているケースもあります。精神的暴力は深刻なのですが、世間の多くの人は深刻とは受け止めておらず「身体的暴力さえなくなればよい」とみています。とても大変な状況や辛い立場にいるにもかかわらず、精神的暴力に関しては、相談者自身も「これが暴力なのか？」と確信を持っていない場合もあります。精神的暴力の深刻さを、どうしたら世の中にもっとわかってもらえるのか、考えていく必要を痛感しています。

4 研修や啓発活動

01年く02年にかけて、ワークショップ、生活講座、講義、意見発表など、様々な場所で啓発活動を行いました。日本女性社会教育会主催のヌエックでのフォーラムや富山調停協会主催の研修会に関わり、富山県や富山市主催のフォーラムやイベントに参加したほか、富山大学の社会学ゼミで講師を務め、男女共同参画推進員富山連絡会の集まりなどではワークショップを行いました。

01年十一月十日から五回にわたって女性交流センター主催・女網企画運営の生活講座「ドメスティック・バイオレンスく法律と福祉の視点からく」を開きました。角田由紀子弁護士「ドメスティック・バイオレンスく法律の限界と可能性」、大学教員杉本貴代栄さん「社会福祉制度とDVく女性の自立を支援するソーシャルワークとは」の講義を聴いたほか、〈女網〉の活動についてワークショップや報告を行いました。

一方、月刊『自治フォーラム』平成十三年九月号に論文「DV支援グループと社会資源」を書いたほか、月刊『看護学雑誌』十一月号、月刊『女性教養』十二月号にも〈女網〉

の活動を報告しました。このことは、全国の自治体職員や医療・教育機関の方がたに広くDVについて知ってもらう機会となっていました。

メンバーはフルタイムやパートタイムの仕事の傍ら、必要に迫られたり、また「知りたい」という強い気持ちから、ガイドブックをはじめ専門書を読み、東京や大阪で開催されるカウンセリング研修やワークショップに参加してきました。これらの中から生まれたプログラムが「DV出前講座プログラム」となりました。

5 報道機関からの取材・マスメディアを通して

01～02年、富山テレビのスーパーニュース「DV特集」の取材を受けたほか、地元の放送局数社の番組にも出演しました。

《女綱》では、取材・出演に先立って必ず制作者と話し合っており、いくつかのお願いをしています。それは、被害者にかかわることだからです。取材担当者自身が、DVに理解があること、もしくは事前学習として、最低限女綱のHPを読むこと、

でいただくことが前提です。つぎに、取材の過程において制作者側と対等な関係にあることで、①事前の記事・VTRの視聴、②間違いがあった場合、訂正が可能である、③具体的内容に関して双方が協議できること、などです。

ところで、いつも制作者と考え方が違うのは、被害当事者の出演についてです。マスメディアとして「絵になる映像」が欲しいことは理解します。求めるものは「被害者が涙ながらに（あるいは怒りに肩を震わせながら）語る、モザイク入りの姿」です。それは「被害者像」という誤った固定観念だと、私たちは考えます。また、DV被害の渦中にいる当事者にインタビューすること自体、二次被害です。

DVが単なる流行り言葉として知られるようになって、その実態は世間一般には認識されていません。それは皆が激しい身体的な暴力だけがDVだと思っていて、「特殊な話」「身近には起こっていない」と思っているからです。DVはどこでも起こっている、ただ気づかないだけで、皆がごく当たり前のことと思っていること、つまり「男性優位社会」「男性支配」がベースにあることも理解されてはいません。「お涙ちょうだい」的な映像ではなく、「精神的暴力」、「性的

暴力」そして、「DV家庭で育つ子どもが受ける心の傷」を伝えて頂きたいと思っています。

6 これから

最初の講座から約三年経ち、ささやかながら実績を積み重ねて、女綱を応援してくださる方がたからの期待も寄せられています。しかし、毎年開かれるシエルターシンポジウムに参加する都度感じる力不足。寄せられる期待の中には「女綱」でもシエルターを持ってほしい」という声もあります。しかし、「女綱」では、民間DVサポート活動において、シエルターを持たなくても、現在の活動を充実させる方向で活動を進めることを考えています。

その理由は、富山の地域特性として、持ち家率が高いため、自宅や近隣への愛着が深く、「被害者の私なぜ家を出なければならぬのか」と思っている人も少なからずいることや、また、親族ネットワークが充実していて、助け合うことが多い（反面、DVがあったことを隠す）ことから、公的シエルターにおいても満室状態のことは少ないという状況もあるか

らです。地域によって、官と民、シエルターの有無など、役割はそれぞれにあるのではないかと考えています。

（女綱）ができること、それは、電話相談やHPの充実をはじめ、ワークショップや講座の開催を積極的呼びかけていくことです。その活動を支えるエネルギーの源は、電話や面談・ホームページ上で出会う被害当事者の女性たち、サポーターの皆さんとの触れあいにあります。

そして、私たちは「あらゆる暴力は犯罪である」という立場に立ち、最も親しい間柄にある男女間の暴力DVをなくすことが、地球上のあちこちで起こっている戦争という暴力的解決をなくすことにも繋がると考えています。なぜなら、暴力による支配は、人間のみならず地球上に住む生命の総体にとって、自然・環境・精神や身体の荒廃、あらゆるものの「死」しかもたらさないからです。

「DVのない社会をめざして」「私の生（いのち）はわたしのもの」「あなたの痛みは私の痛み」男性も女性も、共にお互いを大切に思い、心穏やかな日々を過ごせることを願っています。

（登石 知子）

インターネットにおける DV当事者への支援

——女網ホームページから——

遊道 直美

「今まで誰にもわかってもらえなかったのに、ここには気持ちをわかってくれる人がたくさんいる」

「返事を読み、涙が止まりませんでした」

「私が悪いのではない。苦しんでいるのは私だけではないと知った」

「DVについて検索していて、ここにたどり着きました」

女網ホームページ（以下、HPと略）には、当事者の声が数多く寄せられています。

【我が国のインターネットの現状】

総務省の『情報通信白書』によれば、平成十三年末における我が国のインターネット利用者数は五、五九三万人（人口普及率44%）と推計されており、世帯普及率は約60%、企業

普及率は約98%になっています。通信速度においても『ブロードバンド時代の到来』（broad 広い + band 帯域）速度が速く、たくさんデータの送受信できるという意味）といわれるように、光ファイバーへの整備と移行が進みつつあります。また、『ユビキタス』（ラテン語で、いたるところに存在するという意味）社会』という言葉がキーワードに、『誰でも、いつでも・どこからでも』インターネットなどの情報ネットワークを手軽に利用できる社会が二〇一〇年には到来し、私たちのライフスタイルは大きく変化することになるだろうといわれています。

【女網】ホームページ】

女網HPは、二〇〇〇年八月に開設しました。一九九九年に講座が行われることを偶然知り参加した私は、「過去の自分と同じ想いで、今この瞬間にも苦しんでいる当事者がいること」を知り愕然としました。と同時に「今、自分に何ができるか？」という想いから個人のHPを作成し、それが（女網）のHPの母体になりました。先駆的なDV関連のHPから学ぶことも多くありました。

検索エンジンであるYahooに掲載されたこと、DVという言葉が知られるようになったことから、アクセス数（訪問数）

も増え、現在は一日に一五〇〜二〇〇アクセスと、多くの方がたに見て頂いています。当初「DVを多くの人に知ってもらいたい」という想いで開設したHPでしたが、HP内の『掲示板』というコーナーは、誰でも書き込むこと・読むことができるため、多くの書き込みや相談が寄せられるようになりました。昨年度一年間で、約七二〇件の相談が全国各地から（海外からも数件あり）寄せられています。

また、それ以外にメールでの相談も寄せられています。掲示板には書き込みしにくい場合や、より個別的・具体的な返事を望む方、五〇〜六〇代の当事者の娘さんなどからのケースがあり、パソコンだけでなく、携帯電話からのメールも増えています。

【問題点と利点】

『問題点』

インターネットができる環境・パソコンが必要、高齢者の方がたには利用しにくい、履歴の危険性（HPを見た形跡が加害者に知られる可能性）などがあります。（加害者側もHPを見ることができると、逃げ出す際に持ち出す物に関しては、あえて記載していません）

インターネット上の支援においては、現場に駆けつけるこ

とはできません。相談に対する返事をした後の経過がわからず気がかりなケースもあります。また、書かれた文章だけで、状況や緊急性を判断するのが難しい場合や、気持ち安定している時にだけ書き込むなど、当事者の状態の一部分しか伝わらないケースも考えられます。

『利点』

『あごろ』262号『DV—沈黙から行動へ』の「インターネットにおけるDV被害者への支援」において佐藤氏が述べたように、『少ない経費で今までにない形の支援ができること』『相談しやすさ』があげられます。

「これはDVでしょうか？」「私が悪いのでしょうか？」という書き込みも多く、相談機関へ足を運ぶ以前の第一歩となるケースや、家庭という名の牢獄の中で監禁されている場合は、唯一の外界との繋がり場になっているケースもあります。相談機関に電話をかけることが困難な場合や、やつとの思いで電話をかけても話し中で繋がらない場合もあります。掲示板においては、対応に傷つけられることなく『自由に自分の想いを書くこと』で、当事者が自らの現状を見つめ、気持ちを整理し、自分自身と向き合うことができた、という声も聞かれます。

HP開設当初は、女網メンバーが返事を書くことが多かったのですが、最近は当事者同士がお互いに返事をし合うこと

も増え、自助グループにも似た効果も生み出しています。

今まで誰かに相談してもわかってもらえなかったり、「貴方にも悪いところがある」と言われたりした体験を持つ人の書き込みに、「私も同じだよ」「貴方は悪くない。一人じゃない」という言葉が返ってくる。周りから責められ、自分自身も自分を責めていた当事者が、「私が悪いのではない」と知り、「同じ想いをしている仲間がいる」と気づく。HP掲示板は、当事者にとつて、辛い気持ちや落ち込んでいる気持ち、怒りの気持ちなど「素直な想いを安心して書ける場所」になっているように感じます。

また、掲示板管理上の留意点としては、当事者を傷つけた個人を特定させる書き込みへの対処だけでなく、行動を起こす人・前向きな人だけを肯定するような雰囲気になっていないか、当事者の無力感・絶望感・危険を増すような書き込みになっていないか、などへの配慮があげられます。

『インターネット（HP・掲示板）でできること』

① 「貴方は悪くない」「一人ではない」というメッセージを伝える

② ささまざまな情報を伝える

③ 精神的サポート

④ 「書くこと」自体の効果

- ⑤ 「気軽に相談できる」（匿名性）「二十四時間いつでも都合のよい時間に書き込める」「自由に自分の想いを書ける」「自分に合った雰囲気のあるHPを選んで書き込むことができる」など
- ⑥ きっかけ・最初の一步の場としての役割
- ⑦ 「心の居場所」の一つになりうる

『インターネットにおける支援の可能性』

インターネットを通じて、当事者が希望された近隣の支援機関への紹介を行なった事例や、当事者の保護を依頼・連携した事例、また、他の支援機関からの確かなアドバイスを受けた事例もあります。個人情報保護や守秘義務など留意すべき点がありますが、連携の一つの方法としてインターネットの活用があげられます。「住民基本台帳ネットワーク」においては、DV当事者に及ぼす影響や、年間二〇〇億円ともいわれるコストに値する効果がみえない、プライバシーとセキュリティの保護など、さまざまな問題点があります。しかし、『インターネットによる行政サービスの実現』自体は、心も身体も傷ついた当事者が自ら各機関に足を運ばなければならぬ現状が改善される可能性も秘めています。また、TV会議・遠隔医療のように、画像・音声を用いたインターネット上での面接相談や、関連機関職員に対しての双方向性講座な

ども考えられます。

【終わりに】

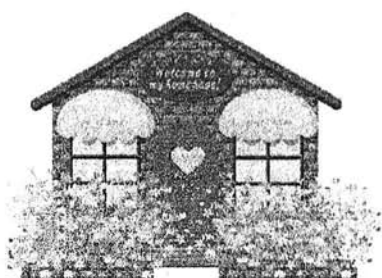
「DV」という言葉は知られるようになってきましたが、その内容はまだまだ正しく理解されてはいない現状です。とくに、「精神的暴力」「性的暴力」については、「傷」として外見上は見えないため、余計に周囲から理解されにくく、つらい想いをしている。そんな書き込みが数多く寄せられています。今、この瞬間にも苦しんでいる当事者の声・心の叫び……HP掲示板への書き込みは、どれも読んでいて心が痛むものばかりです。しかし、返事のやりとりの中から見える歩みに加え、相談後の経過報告の書き込みを頂くこともあります。書き込みを最初の一步として一歩ずつ着実に歩む姿から、当事者の持つ力が読み取れ、他の当事者の方がただでなく私たちも勇気づけられることが多いと感じています。

掲示板に書き込みして下さる人、(書き込みはしなくてもいいけれど)見て下さっている人、一歩を踏み出した人、一歩を踏み出せないから苦しんでいる人、さまざまな方がいると思います。でも、HPに来て下さる方がたは、みんな対等な仲間であり、ここに来ると元気が出る。一人じゃないと思える。そう感じて頂ければうれしいな、と私は思っています。

五年・十年前には考えられなかったインターネットという支援の場。新たな手段・方法が増えるということは、当事者にとつて『選択肢が増えること』だと考えます。HPを通じてより多くの方々にDVを理解して頂き、『他人事ではない問題』『暴力自体が犯罪』と認識し、社会全体でDV問題に取り組む一助になればと願っています。^(ハニ)

(グループ女網) HP管理人

【引用・参考文献】『あごろ』262号「DV——沈黙から行動へ」三二—三三ページ「インターネットにおけるDV被害者への支援」佐藤真行



【「グループ女網(なづな)」～ストップDV とやま～】
メール: naduna2000@yahoo.co.jp
HPアドレス
<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Suzuran/3062/>

【DV当事者支援】

◆Cherry blossoms

<http://www02.so-net.ne.jp/cherry-b/>
私は私らしく、誰と比べることもなく咲けるように。あなたと共に育ち、あなたと共に悩み、そしてあなた自身を彩る応援をしたいと思っています。(掲示板あり)



021754

桜梅桃李という言葉があります。

桜は桜の咲く時期があり、梅は梅の咲く時期を持っていて、それぞれがみな美しく咲けるようになっている、という言葉です。

私は私らしく、誰と比べる事もなく咲けるように、

◆TFNET JAPAN(社会問題全般)

<http://www.tfnetjapan.org/>

私たちの社会をひとりひとりみんながもっと住みやすいものにするためには、ごく一般の私たちでもなにかできるはず、というメッセージを送ります。

DV当事者支援及び 関連ホームページ の紹介



◆First Step

<http://first-step.cside.com/>

一人一人で動くのは大変でも、皆で集まればできることはたくさんあります。ぜひ、手をつないで「はじめのいっぽ」を踏み出しましょう。

◆尼僧 紅蓮(こうれん)の DVかけこみ寺

<http://www1.big.or.jp/delfynum/DV/>

辛さを遠慮なく語ることができるように、そして次へのステップを自分の足で踏むことができるように。それぞれが同じ目線で語り合えたらと願っています。(掲示板あり)



尼僧紅蓮の
DV(ドメスティックバイオレンス)
かけ込み寺

暴力を受けている人が悪いわけではありません。
暴力のない生活を望むのは私達の正当な権利です。
お話ししましょう、一緒に。
自分の痛みや辛さを言葉にすることで、心の整理ができます。
少しでも自分を取り戻し、
言葉にすることで一歩でも前に進みましょう。
この世には殴られて良い人など一人もいないのですから。
どんなことがあっても暴力はいけないうこと、
この点ではサバイバー、サポーター、
そして加害者の方も同じ立場です。
サバイバーの方は是非これからの方の為に
あなたの貴重な体験と知恵を分けて下さい。
受け入れてくれる心、共感の言葉は
苦しんでいる方には何よりの癒しになります。
どうぞご遠慮なく書き込みをして下さい。

サイト全体はお寺のイメージですが、
宗教色を出したり皆さんを仏教に勧誘することを目的にはしておりません。

ガラスの心

DV・幼児虐待・いじめ

DV(ドメスティック・バイオレンス)、家庭内暴力、いじめ、幼児虐待、恋愛依存症、心が疲れてるあなた...

ひとりでも多くの人に「DV」を知って欲しい。
自分もそうではないかと気付いて欲しい。
暴力を受けている人が、もし、いたら...
手を差し伸べて欲しい。

...どうかひとりで悩まないで下さい。
一緒に考えましょう。

たった、一度しかない人生...どう生きるかは、自分次第です。

傷だらけのこころ

- プロフィール
- 訪問してくださったみなさんへ
- 1. はじめに
- 2. PTSDについて
- 3. 性暴力被害について
- 4. PTSDの症状
- 5. 犯罪被害の場合によって起こる症状・心理状態など
- 6. かおりさん
- 7. 陽子さん
- 8. DV
- 9. 子どもの性的虐待・近親者からの性的虐待



Welcome to Natural Heart

◆ガラスの心
〜DV・幼児虐待 いじめ〜 (個人HP)
<http://www6.ocn.ne.jp/heiner/>
ひとりでも多くのの人に「DV」を知って欲しい。自分もそうではないかと気付いて欲しい。...どうかひとりで悩まないで下さい。一緒に考えましょう。(掲示板あり)

◆傷だらけのこころ (個人HP)
<http://www8.ocn.ne.jp/chir0824/index.html>
いろいろな形で被害者の方は再度傷つけられてしまっています。どれだけこころに深い傷を負っているのか、みなさんに知って頂きたいと思っています。(掲示板あり)

◆いなばのしろうさぎ (個人HP)
<http://www.geocities.co.jp/Heartland-Renge/2887/>
DV被害者は「いなばのしろうさぎ」のように、皮をはがれた状態。少しでも多くの人が、大国主命のように手を差し伸べられることを祈っています。(掲示板あり)

【加害者プログラム関連】

◆メンズリフ東京

<http://member.nifty.ne.jp/yeshome/Menslib/>

男性についてのさまざまな状況や問題を考えていくための情報を収集しています。

◆メンタルサービスセンター (東京)

<http://www2.neweb.ne.jp/wd/jims-ehime/dv.htm>
カウンセラーの立場から、加害者プログラムに取り組んでいます。

◆アウェア(AWRE)センター(東京)
(旧ベター・パートナーシップ・センター)
<http://www.geocities.co.jp>

/Heartland-Asago/5738/
「加害者プログラム」「電話・メー

ル相談」を行なっています。

◆メンズセンター(大阪)

<http://member.nifty.ne.jp>
/yeswhome/MensCenter/

メンズリブ、メンズムーブメントを
社会に根づかせる社会活動に取り組
んでいます。

【カウんセリング関連】

◆ウイメンズカウんセリング京都

<http://webkyoto-net.jp/org/w-c-k/>
「あなたの問題は私たち女性みんな
の問題です」個人カウんセリングの
他に、サポートグループ・子どもに
とってのDVグループあり。

◆TOSOI(日本トラウマ・サバイバース・

ユニオン)

<http://www.just.or.jp/>
さまざまな心の傷(トラウマ)か
ら生き延びてきた人たち自身によ

る、ボランティアの非営利団体。
講座・ワークショップ・自助グル
ープもあり。

【法律関係・その他】

◆離婚の法律・税金

<http://www.rikon.to/>
自分一人で悩むのではなく、法律知
識にアクセスして下さい。具体的に
わかりやすく説明しています。

◆子どもの虐待防止センター

<http://www.ccap.or.jp/>
子育てや虐待の問題で悩んでおられ
る方・援助者の方、お気軽にご相談
下さい。

◆母子家庭共和国

<http://www.singlemother.co.jp/>

シングルママたちのコミュニテイサ
イト。女性問題に特化した情報を掲
載。

◆女性の安全と健康のための支援
教育センター

http://www.jca.apc.org/~shien_w/
女性・子どもへの暴力と取り組む支
援者のための非営利団体。研修や公
開講座により支援者を養成し、ネッ
トワークづくりを目指しています。

◆RONの六法全書 ONLINE

<http://www.ron.gr.jp/law/>
法律関連のさまざまな情報を掲載。
閉塞された情報に多くの人がアクセ
スできるよう整備しています。

◆配偶者からの暴力被害者支援情報

<http://www.gender.go.jp/e-vaw/index.html>
内閣府男女共同参画局HP内のDV
情報。各相談機関一覧あり。

支 援 現 場 か ら ①

富山県女性相談センターの 現状から

富山県女性相談センター所長 酒井トミイ

DV防止法が平成十三年十月に施行され、平成十四年四月一日から、いよいよ富山県女性相談センターも「配偶者暴力相談支援センター」の機能を果たすことになりました。当相談センターでは、従来の売春防止法の業務の中でも、夫等からの暴力で顔にアザがあったり、肋骨にひびが入った女性が着の身着のまま子どもを連れて駆け込んでくるなど、その時どきの状況に応じて保護をし、被害女性の自立支援に一生懸命でした。現在、DV被害者への支援活動は、ますます増加しています。

当相談センターは、配偶者暴力相談支援センターの機能を果たすことに伴い、二つの新しい事業を開始しました。その一つは平日は夜間十時まで、土・日・祝日は午前九時三十分から午後五時まで、暴力に対する電話相談を行なっています。また、夜間十時までならば緊急な場合は、警察官と一緒に来所の場合は一時保護をしています。二つ目は毎週金曜日に精神科医が、心の相談を行なっています。この相談は身体的な暴力だけでなく、精神的、経済的、性的等、すべての暴力についての相談です。予約はいりません。次に、サポートの現状について、事例を通して紹介します。（なお、事例は相談者が特定されないように変更を加えています）。

暴力を「アルコール依存症のため」と誤認

六十歳代の女性A子から夜間の電話相談。「夫は酒を飲んで暴れる。殺してやると言ってポットの熱湯をかけたたりする。恐ろしくて熟睡できない。夫は同居のA子の実母にも暴力を振るいポットの熱湯をかける。実母は八十歳代で身体が不自由のため、車椅子で移動をしている。実母を残して自分だけ逃げることはできない。アルコール依存症の夫を入院させてほしい」とのこと。

夜間の電話相談員は身の安全を確認し、「もし危険と思えばすぐに警察を呼ぶように」とアドバイスをした。このことが日中勤務の女性相談員に引き継がれ、M市の社会福祉課、高齢福祉課から情報を収集して、どのような援助ができるか相互に連携することになった。M市の社会福祉課担当者は、「A子は夫のアルコール依存症をどうしたら治せるかとの相談に時々来ていた。その都度、病院や保健所で相談するようにと言ひ、夫からの暴力にあっているとは全く知らなかった。暴力のことは一言も話さなかった」と驚いていた。

おそらく、A子は、酒が夫をだめにするので、この暴力も酒のせいだろうと思っていたのであろう。そして、M市の社会福祉課で夫が暴力を振るうことを話すと近所に知れ家の恥であると思つて黙っていたのであろう。そのため、治療する気持ちのない夫を抱えて、A子だけが最寄りの保健所や病院等の相談機関をさまよっていたと考えられる。

女性相談センターで気力を取り戻す

ある日、M市の警察署から、「A子と車椅子の実母の二人を女性相談センターへ行くように電車に乗せたので、保護をしてほしい」との連絡が入る。このケースについては、

すでにM市の社会福祉課、高齢福祉課とは連携をとつたので、A子が一時保護を希望するか否かの意思のみであった。A子は実母と離れることはできないと言ひ、また、実母も不安な表情でうろたえる。A子を説得し、実母の特別養護老人施設のショートステイの緊急入所の手続きをし、A子を一時保護する。（この一連の作業は、A子の夫や同居の子どもにもA子の姉妹にも秘密に行わなければならない）。A子は睡眠不足が続いていたためか、顔の表情も体全体がダラリとした気力の抜けた状態で、二日間の静養が必要だった。この様子からも、夫の暴力で毎日がどんなに大変だったかが伺えた。A子には「今、まだゆっくりしていいよ。退屈になったらこの本を読んでね」と言つて、DV被害者の体験やそれについてのアドバイスなどが書いてある本を渡し、本人が気力を取り戻すよう仕向けてみた。

だんだん落ち着いてきたA子に暴力は犯罪であることを話し、「DV防止法」という法律ができたことをわかりやすく説明した。その上で自分はどうしたいのか、自立のためにはどのような援助が必要かを考えてほしい、そして、当相談センターができる限りの支援をすると伝えた。A子は夫と離婚をし、保護命令（退去・接近禁止）を申し立てたいと希望する。しかし、一か月前に清掃のパート勤務を辞めているので離婚後の生活費と住居をどうするか不安

がある。それ以上の気がかりは、実母をどのようにすればよいのか、若い先短い実母に万が一のことが生じた場合、どうなるのであろうということまで頭の中はいっぱいなのである。

市役所、保健所と処遇会議

A子の希望をかなえるために、同居の息子、A子の三姉妹、M市役所の関係課と保健所に呼びかけ、処遇会議を開催した。

関係者は暴力に関係する新しい法律「DV防止法」が施行されたことは知っていたが、その内容についてはわかっていなかったため、「配偶者からの暴力は犯罪となる行為である」という法律の定義などを話し、A子は夫から暴力を受けている被害者であることを説明した。その上で、A子自らが関係者に語りかけ、悩みと自立支援の協力を求めた。保護命令（退去・接近禁止）を申し立てるについて、家はA子が生まれ育った自分の家である。そこへ夫が婿養子にきた。その自分の家を捨てて出て行かなければならないという不合理なことがA子には納得いかない。次に、離婚した場合、実母は夫と養子縁組をしているために、戸籍上自分は夫とは義兄弟になり、何だか割り切れない気持ちである。しかし、自分は夫と離婚したい。

A子は当相談センターで生活していて、自分と同じ境遇の仲間を見、アルコール依存症と暴力がイコールではないということがわかったようである。だが、A子は夫と離婚して自立したいと思っても、彼女を取り巻く環境は、そこまで理解していかないのが現状である。ここに、それぞれの言い分を紹介する。

周囲の環境にも大きな問題

同居の息子は「自分は家から離れたくない。また、両親の離婚も反対」とのこと。そして、「自分は父親に暴力をさせないから、母親にはこのまま我慢して家に帰って欲しい」と言う。A子の妹たちは、「母親をどうするのか。誰が中心になって母親を介護するのか」と言う。妹たちには自分たちに母親を押し付けられるのは嫌であるという気持ちがありありと伺えた。

保健所は「夫、本人がアルコール依存症を治したいという気持ちがいちばん大事であるが、妻の協力が必要であった」と、A子の努力が足りなかったことを責めた。しかし、今後、夫には直接関わってくれるとのことになった。

M市役所の関係課では、A子がこれから一人になったとき市役所として取れる対応について説明し、少しでも不安

を取り除こうとする様子が伺えた。

A子は自分の意思で、保護命令（退去・接近禁止）の申し立てをし、退去・接近禁止の決定が出て家に帰った。夫が退去した二週間のあいだに母親を施設から一時帰宅させ、お盆を過ごしたとのこと。その後、借家の準備をして移り、離婚調停を申し立てたと聞いている。一番頼りにしたい親族が、時には一番の敵になる。しかし、関係機関との密接な連携とA子への適切な情報提供が彼女の自立を促したものだと思われる。

「DV防止法」は、いま動き始めたばかりである。A子を取り巻く環境が物語るように、被害者である女性が夫の暴力に声を上げ、離婚を考え自立していく行為はまだまだ社会的には理解されたいのが現状である。

これからも、啓発活動を通して「配偶者からの暴力は犯罪となる行為である」ことを訴えていきたい。



支援現場から の②

富山における「支援弁護士制度」の誕生

弁護士 斉藤寿雄

富山県でDV被害に対する「支援弁護士制度」の構想が持ち上がったのは、平成十三年の二月頃でした。（グループ女網）より富山県弁護士会に対し、「DV被害事件で弁護士の必要が生じた場合に、対応してもらえる弁護士をあらかじめ紹介しておいてもらえないか」という申し出があったのです。このため、同年四月から富山県弁護士会の会長に就任予定でした私が対処することになりました。

当時の富山県弁護士会には、日弁連の両性の平等に関する委員会のように女性の権利擁護を目的とする委員会はありません

せんでした。そのため、会とは別に各会員に呼びかけましたところ、八名の会員から積極的な回答があり、「支援弁護士制度」が誕生したわけです。正直なところ、この人数は男性会員のみからなる当弁護士会の実情からして予想を上回るものでした。

弁護士個人だけでなく、 権利擁護委員会でも対応

この制度は、弁護士会に付属する委員会のように、会の組織として対応するものではなく、あくまで名簿に登録した各弁護士が個人的に受任するものであり、個々の依頼も直接になされるものであることから、具体的にどのような相談・依頼が、またどの程度の件数があるのか、私のほうでも弁護士会としても把握はしておりません。もしそれなりの成果をあげていれば幸いですし、仮に今のところ利用が少なくても、〈グループ女網〉の側で弁護士を紹介するセーフティネットとしての役割を果たすことができればと思います。

一方、登録弁護士の側も、その責任上、日頃から女性への暴力に対する問題意識を強く持つことになり、我われ弁護士会サイドにとっても意義は大きいと考えます。

前述のとおり、富山県弁護士会には女性の人権問題を扱う

委員会がありませんでしたので、平成十三年度に委員会機構を一部改革し、民事暴力問題、子供の権利擁護、消費者問題を扱う委員会を統合した権利擁護委員会を設置し、その目的の中に、新たに両性の平等に関する研究・対応の項目を追加しました。したがって、現時点では弁護士会の委員会としてもDV被害問題に対応できるようになっています。仮に個々の弁護士では手に負えないような事案は、委員会として対応することも可能です。場合によっては、こうした弁護士会の制度も活用していただければと思います。

被害の進行・拡大防止を最優先に

ご承知のように、犯罪被害者の支援ということが現在大きな社会問題とされています。弁護士会の大きな課題の一つにも、犯罪による被害者やその遺族の支援のために弁護士がどう取り組むかということがあり、全国各地で設立されつつある被害者支援センターに弁護士会も関わり合う必要が出てきています。このため、平成十四年十月十八日に富山市において、全国的に被害者支援に取り組んでおられる大久保恵美子氏を講師にむかえ、中部弁護士連合会主催のシンポジウムを開催しました。DV被害も当然その一端であり、これを機にDV被害に対する社会的理解も、より高まればと期待しています。

ただ、他の事案の被害者が「過去における被害」であることが多いのに対し、DV被害はまさに「現在進行形の被害」であることから、DV問題においては、まずは被害の進行および拡大を早急に食い止めることが最優先されなければなりません。この点で、DV問題においては、特に私ども弁護士の積極的な関わりと責任が求められるものと認識しています。

支援現場から の ③

議員としてのDVへの 取り組み

富山市議会議員

志麻愛子

富山で、ドメスティック・バイオレンスに苦しむ女性たちをサポートする市民グループ（女綱）を立ち上げた女性たちの数人と以前からの友人であり、会員として度たびの

研修にも参加しています。実際のサポート活動はなかなかできませんが、議員として、議会活動のなかで行政のDVサポート施策を促進してきました。

富山市は県庁所在地で人口三二万人の中核都市。議会は定数四〇人のうち、女性議員が公明党、共産党、無所属（私）各一名で計三人です。DVについて議会で触れるのは、今のところ女性議員だけです。他の府県のどのレベル議会でも大体同じだと思います。

富山市議会で議員として取り組んできたことを報告します。

☆DV支援を行うための学習機会の提供を 議会で提案する

二〇〇〇年六月議会では、DV被害者の支援に取り組んでいる人たちが、カウンセリング講習を受けられるように、知識と実地を学ぶ専門的な連続講座を市として設けるよう提案しました。答弁では、市の女性交流センターで市民が継続的に講座を開いているということ述べただけ。（グループ女綱）を発足させた人たちが、前年に富山市民企画講座に応募して「ストップ！女性・子どもへの暴力」の五回講座を開いたことを指しています。

以来、DV講座は、市当局が取り組むのではなく、市が助成金をつけた公募の講座なりに、（グループ女綱）が企

画・運営するという形で、第二弾、第三弾（今年度は第四弾）の連続講座を開催しています。市との協働で行なっているという点では評価することができますが、この場合も、市民が企画することで講師料が抑えられたり、女性が無償で働くことになったりと、いいことばかりではありません。

☆「女性への暴力防止法」早期制定に関する意見書採択を求める請願書の紹介議員になる

DV防止法の成立に向けて、全国から国会に声を届けようという動きがあった二〇〇〇年。九月議会で（グループ女網）から請願を出すことになりました。「女性への暴力防止法早期制定に関する意見書採択を求める請願」です。

富山市議会では自民党会派が過半数を占めているため、どのような議案も自民党の賛成なくしては通りません。（グループ女網）は、まず自民党に面会をし、理解を深めてもらうよう働きかけました。他の会派も次つぎと回ったのですが、自民党と民主党系会派の賛成は得られませんでした。「最近では、若い女から暴力を受けている男もいる」というのが、賛成できない理由と言う議員もいました。

国へ出す意見書は、毎回各党を通じてたくさん提案されますが、事前の打ち合わせで全会一致にならなかったものはほとんど本議会に出されません。しかし、否決されるの

はわかっていても、地方議会でもこのような声があるということを、住民に知ってもらうためにも、議員提案とか請願の紹介議員ということで議場の場で討論をすることがあります。

このDV防止法についても、私は請願の紹介議員の一人として賛成討論を行い、（グループ女網）に寄せられた被害者たちの悲痛な声も紹介し、他の議員の賛成を求めました。共産党の女性議員も国内外の動きを紹介して法整備の必要性を訴えました。結果は賛成起立した議員が少数のため否決されましたが、自民党議員から「討論を聞いて、必要性がわかり、お尻が半分ほど立ち上がりかけて困ったよ」との声。浜松など、全国の他議会で同種の請願が可決されたニュースを聞く度に、情けなく思いました。

☆DV防止法に対する市の取り組みを促進させるための議会質問

二〇〇一年四月に成立したDV防止法について、六月議会で公明党女性議員が市の取り組みについて質問しました。市の答弁は、五月から新たに女性への暴力を含む相談に対応するため「女性のための悩み相談窓口」を設置し、月二回精神保健福祉士と認定カウンセラーが交互に相談にあたっていること。その他は従来から行なってきた相談機関や

国、県の支援施策を紹介しただけでした。

私は九月議会で、DVと児童虐待が密接な関係にあることがわかってきたので、病院や教育関係者への指導、連携・協力をどのように行なっていくのかなどを尋ねました。

児童虐待は「児童虐待防止連絡協議会」で取り組まれていること、DVについても児童虐待と同様の取り組みを予定していることなどが答弁内容で、縦割り行政の対応が如実でした。市の母子生活支援施設での対応も尋ねたところ、県女性相談センターと連携を取って、子どもを同伴していないDV被害者も、すでに受け入れているとの報告がありました。

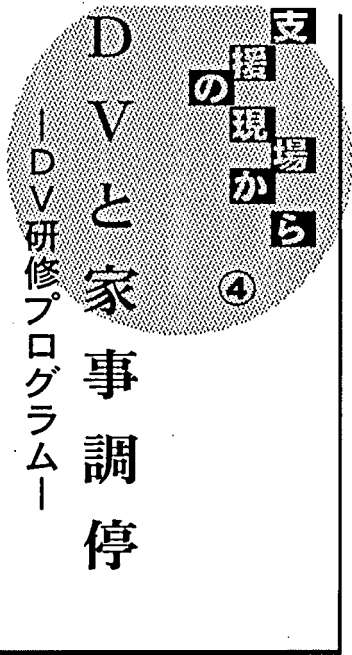
☆市民の支援グループと議員との協働

富山市においては、「グループ女網」が積極的に行政や関連機関に働きかけており、市の広報に掲載される相談窓口に「グループ女網」の電話番号が紹介されましたし、啓発や支援のための講座の講師を依頼されたりしています。とはいえ、民間支援グループの運営費用についての補助はありません。

また、県の女性相談センターが富山市にあり、施設的には余裕がありますが、DV被害者和其他の被保護者をいっしょに一時保護することはむずかしく、DV専用の長期にわたり滞在できる自立支援センターを必要だとする声が年々高まっています。被害女性が自立して生活していくための

サポートという点では、まだまだ整備がされていません。

このように課題は多いのですが、議員と支援グループとの協働で活動していきたいと思っています。



支援の現場から
④
DVと家事調停
— DV研修プログラム —

I DV防止法施行前後の家庭裁判所の動き

一九九三年末、国連総会において、全会一致で女性に対する暴力の撤廃宣言が採択されました。こうした国際社会の動きの中で、我が国でも国内法の整備が急がれ、家庭内の人権侵害を放置できないとの認識のもと、遅ればせながら「児童虐待防止法」（平成十二年五月二四日公布、同年十一月二四日施行）と「配偶者からの暴力の防止及び被害

者の保護に関する法律」(DV防止法、平成十三年四月十

三日公布、平成十三年十月十三日施行)が出来ました。この二つの新法が出来たことにより、裁判所でも、親子、夫婦関係事件の家事調停に携わる家事調停委員にはもちろん、裁判官、書記官、調査官等、裁判所職員にむけて、DV防止法に関する知識の習得とDVの理解を深めるための研修が強力に指導されてきております。

平成十三年度各高等裁判所管内での調停運営協議会における協議結果要旨を見ても、ほとんどの高裁判管内で問題になっているのが、特定調停問題(多重債務者救済の為の合意による再建型の手続)と夫婦間暴力問題を背景とする夫婦関係調整事件の取り扱いであり、裁判所当局も「DVに特化したより深い研修をお願いしたい」とコメントしています。

調停委員は、DVの特性について十分理解するための知識の習得に努めてほしい。そのためには、民間シエルトー等、民間団体に被害者保護に実際に携わった経験をもつ人の話を聞くことが有意義であるとも述べています。また、被害者と見られる当事者(調停)に対しては、DV法についての知識を教示して頂きたいので、調停委員はDV法につき十分な知識の習得に努めてほしいとし、その参考資料として、平成十三年七月に家庭局第一課長書簡、『判例タイムズ』1067号の「保護命令手続きのイメージについて」

等が紹介されています。

また、家事事件研究会発行の『ケース研究』等でも、東京都女性センターの職員による「配偶者から暴力を受けた被害者への援助について」が掲載されております。

保護命令が出ている当事者の離婚調停を取り扱う際の綿密なマニュアルも作成されており、その対応には温度差があるものの、徐々に改善されてくるものと考えます。

もちろん、現在でも、救済を求めて訪れた司法の場で、人権の最後の砦となるべき裁判官、裁判所職員、調停委員等により、性差を理由とした不当な非難、心ない言葉により、さらに傷つくという二次的被害の発生があることは否めません。

調停委員会の中には、離婚事件に潜む夫婦間暴力に気づき、被害者の救済と保護につとめ、できるだけ被害者にとって安全でかつ正当な離婚が実現できるためには、自分たちが何を学習しなければならないかを考え、DVに対する研修を熱心に進めているグループも数多く存在します。

平成十四年五月二十日には大阪で全国家事女性調停委員懇談会が開かれ、「配偶者からの暴力を考える」というテーマで、法律学者戒能民江教授の講演とDVが関わる四つの離婚調停事件の事例検討が行われました。また十月九日には、全国家事調停委員懇談会において「DVケースを通して

考える調停のあり方」がテーマとして取り上げられています。

II 富山調停協会におけるDV研修の試み

二〇〇〇年十二月、富山家庭裁判所家事実務研究会において、Y裁判官が「氏と名の変更」の講義とDV問題を話された。たまたまその会に出席していた調停委員の一人がDVに関心があり、早速、Y裁判官を講師に迎えてのDVの研修会を企画。すでに活動を開始していた〈女網〉とも交渉、二〇〇一年三月、〈女網〉サイドの講師とY裁判官による富山調停協会主催の公式研修会「ドメスティック・バイオレンスの概念と家事事件」が実施された。

さらに、二〇〇二年二月九日、ワークショップ形式の「妻の立場、夫の立場、あなたの立場、ドメスティック・バイオレンス」というタイトルの研修を行なった。

当日、現役の家事・民事調停委員四二人が富山県民共生センターに集まった。〈女網〉からは調停委員の会員を含めて四名参加した。以下にプログラムの概略を紹介したい。

1 研修の目標

離婚調停事件、特にDVが含まれる事案に関わる際に、

参加者がより適切な対応をできるようにすることである。具体的目的は、参加者がDV問題についての認識を深め、ジェンダーの問題について参加者が認識を深めること、参加者が共感的傾聴の重要性を学び、調停の場での調停委員と当事者との間のコミュニケーション、ペアを組む調停委員の間でのコミュニケーションのあり方について、参加者が認識を深めることである。

2 プログラムの概要

「参加者は何を学びたいか」

参加者はグループに分かれて、DV問題、調停でのコミュニケーションについてどんなことを学びたいか、意見を出し合い、それを黒板に箇条書きにする。

進行役は、これを尊重しながら進めることを伝える。

「ケースの第一印象」

ケースを進行役が朗読劇のスタイルで一人芝居。参加者はそれを聞いて、このケースの第一印象や調停委員の話の仕方が上手かどうかなどを短時間で考え、書き留める。

「DV問題を理解するために」

①DV態度チェック解説

②ロールプレイ（森田ゆり著『ドメスティック・バイオ

レンス』八五頁に出ている寸劇)をオブザーバー参加の協力メンバーに演じてもらい、これを見ての感想などを参加者は話し、進行役が解説して、DVの基本的な知識(男性優位社会が背景、力と支配、暴力のサイクルなど)を参加者が学ぶ。(女網)の二名が寸劇を演じた。

③「夫婦のルール」のワークシートを使って、ジェンダーの二重の基準、ジェンダー差別、暴力は男性優位の関係を強めることなどを参加者は学ぶ。

3 プログラムの特徴

プログラム作成者は、研修の特徴として、参加者が研修の場で、参加し、体験し、それに基づいて考えることを重視する「二一世紀の研修スタイル」であるとしている。

プログラムの構成も研修の進行の仕方、調停委員の研修としてはユニークであるが、オリジナルとも思われる内容は作成者の自作の「ケース」と「モノローグ」である。

二つとも架空であるが、それらをどう読み解くか。

ケースは、第一回調停期日で申立人(妻)と相手方(夫)の双方からざっと話を聞いた段階のやりとりが、調停委員と当事者との「シナリオ」として示されている。その後に、DV被害者の体験が「モノローグ」で語られる。

シナリオについて、研修員は、「まあ、大半はこんなものだ」と発言した人もいたし、「自分はこんな調停はしない」と思った人もいただろう。このシナリオでは、申立人がDV被害者かどうかは、全くわからない。だから、多くの研修員は、この妻が「モノローグ」の当人とは思わなかっただろう。「被害者だったかもしれないし、あるいは、そうでないかもしれない。それもわからない調停であった」と作成者は言いたいのだと思う。この研修を受けて痛感したことは、調停委員として(当たり前のことなのだが)DVを理解するかどうかの前に、「当事者の気持ちをわかる」ことが大切だということである。

「モノローグ」 (これは架空のDV被害者の体験談です)

実家に帰って、はじめは母も戻るように言っていました。だんだん私が本当にあの人と一緒にいるのが耐えられないということを知ってくれて、言わなくなりました。いろいろ悩んで、何人かの人に相談に乗ってもらって、思い切って家裁の窓口に行きました。裁判所だったと期待して、あたりをきよろきよろしていると、「何をしに来たんです

か？」って声をかけられて、何しにきたはひどい、来ちゃいけないのって、ちよつとカチンときました。用を言うとしばらくしてから係の女性が出てきて、やつと椅子を勧めてくれました。窓口では事務的で冷たいなって感じましたが、みなさん忙しそうだし仕方ないのになつて思いました。説明を受けて、調停をお願いすることになりました。

一か月後に第一回の調停が行われました。第一回るときしばらく待っていると、呼ばれて狭い部屋に通されました。年輩の男性と女性がいて、私の名前を確認して、ほとんど男性の方から私は話をきかれました。

優しそうな人でちよつと安心しましたけど、私が本当に言いたいことを一生懸命話し始めると、何度も「そうじゃなくて」とか、「それは向こうの話も聴いてからでない」と、何ともいえないね」とか言われ、あんまり話したいことは話せませんでした。私が話したいことを話していいところではないんだ、とわかりました。私は何も知らないし、話し方も下手だからいけないんだと思いました。

二〇分ほど話を聞いてもらって、「ご主人にも話を聞くから待っていてください」と言われて、待合室でひとりで待っていました。外面が良くて口がうまいあの人のことが思い出され、少し不安になりましたが、調停委員の先生は、しっかりと感じた感じの人だったので頼りにしていました。

二〇分ほどして、また呼ばれてゆくと、男性の方が、「あなたはどうしても一緒にやってゆけないなんて言うけど、いい人じゃないの。やつぱり、あなたの方がもう少し考え直した方がいいんじゃないかな」と言われました。

私は、どうせ向こうはいい加減なことをいうに決まっているから、反論が必要なら、しようと思っていたのです。それなのに、いつの間にか向こうの言い分を鵜呑みにして、私を責め始めるではありませんか。「あんまり期待しない方がいいよ。結局女は我慢するしかないんだから」と言っていた友人の言葉が思い出されました。

あまりひどく私が一方的に責められるので、つらくなり、女性の先生のほうを助け船でも出してくれるかと思つて見ました。女性の先生は黙っているだけ。そういえば、女性の先生は、ほとんど口を開かず、ときどき男性の先生に合意の手を入れるくらいです。裁判所だけは公平に私の言い分も良く聞いてくれると思ったのが、やつぱり間違いで、世の中はすべて「女は男の言うとおりにしろ」ということになつていくようです。そう思うと悔しくて恥ずかしくて頭の中が真っ白になつて、男性の先生の話をするわのそらで聞いていました。

「いいですか。わかりましたか。よく考えてくださいいね」という声に我に返り、反射的にうなずいていました。

次回のことを考えると気が重く、どうしようかと思っていると、数日後、あの人から電話がかかってきました。裁判所に行くのは体裁が悪いからやめにくれ、話があるなら直接聞くからというのです。

またにも私の話を聞いてくれたことはないし、聞くつもりもないことは分かっていた。今まで、私が話したいことを一生懸命話しかけると、無視するか、「うるさい」と言っただけだったり、ときには蹴ったり。蹴られて腕や脚が痛くて病院に行ったことも三回ありました。恥ずかしかったので、階段で転んだとウソを言いました。

私がダメだから殴られるのでしょうか。もうだいぶ前から殴られるのが怖くてまともに話をできなくなっていました。

実家に帰ったときのけんかは、子どものことでどうしても必要な話をしたら、けんかになったのです。普段子どもは私に任せきりでいるからでしょうか、あんまり方向はずれなことを言うのです。「お前は何もできないんだから、せめて子どもくらいは育てろ」があの人のお癖でした。「あなたは全然分かっていない」と私は言っていました。そうしたら激怒して、久しぶりに猛烈に殴る蹴るされました。それで、それ以来、実家に避難しました。

裁判所に行くのは、私も気が進まなくなり、やめにしました。やめるといふ言葉を家裁の窓口に出しました。当

分別居で実家の親を頼るしかありません。これから先、いったいどうしたらいいのでしょうか？ 子どもは自分が育てるつもりです。かわいい盛りなのに子どもの顔を見に来ようとしてもしい人には絶対任せられませんから。

(DV研修プログラムについては、『家庭裁判所家事調停委員向けDVとコミュニケーション研修プログラム』の紹介『福井家裁敦賀支部 柳本つとむさん作成』から抜粋・解説させていただきました。二〇〇二年二月九日富山調停協会で実施した研修がベースになっています。)

III 力を取り戻すために

平成十四年五月二十日の全国家事女性委員懇談会で、戒能民江さんが講演の最後に調停委員に向けて言われた言葉は、印象深く心に響いた。「DV被害当事者の多くは、夫の暴力によって人間として尊重されてこなかった。そのため、傷つき無気力になっていることが多い。調停にも最後の力を振り絞ってやってきた。でも、そんな状態になっているだけで、みんな、本来、苦境を乗り越えて自分で立ち上がっていく力を持っている。だから、調停委員は『大変だったね』と声をかけ、力を取り戻していくように調停を進めてほしい」。

(まとめ 小橋洋美・登石知子)

◆DV支援最前線 1

DV事例の早期発見とその対策

—産婦人科医師の立場から—

阪南中央病院 加藤 治子

ある程度、臨床経験のある産婦人科医師や助産婦であれば、DVの被害者と思える事例に一度は遭遇しているはずであるが、あまり立ち入ることはせず、必要な医療を提供するにとどまっているのではないだろうか。DV防止法が施行されたいま、医療に何ができるかを考える。

はじめに

二〇〇一年十月に施行されたDV防止法（配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律）の第六条には、「医師その他の医療関係者による被害者の発見と通報について」と「情報提供の努力義務」が明記された。

著者の病院での取り組みを紹介しつつ、DV（ドメスティック・バイオレンス）被害者の発見と対応について、医療に何ができるかを考えてみたい。

DVは健康問題・医療問題である

DVは身体的・精神的・社会的・経済的・性的暴力が複合した形で起こるといわれている。これらが診療の場では表1のような形で医療者の目にふれることがあるが、単一であれ、複合したものであれ、女性のところからだを傷つけるだけでなく、女性の人間としての尊厳を著しく損なうものである。心身が傷ついた女性は、表2のようなさまざまな身体症状や精神症状を呈し受診してくる可能性がある。DVは、救急医療や外科・整形外科から内科・精神科まですべての診療科にかかわる医療問題であると言っても

過言ではない。

妊産婦の中のDV被害者

当院は、大阪府松原市にある三二二床の地域の総合病院である。産婦人科外来では、助産婦による妊婦保健指導を行なっており、指導だけでなく妊婦の生活状況の把握や悩

みの相談などにも取り組んできた。近年、DVという視点をスタッフの側が持てるようになり、表3のように多くの事例を把握できるようになってきた。一九九五年から約七年の間に計五六例をDVと認識できており、その数は年々増え、二〇〇一年は八月まですでに十七例（中絶例も含む）を把握している。

DVと認識できたきっかけは、助産婦との面談の中でわ

表1 医療者の目にふれるDV被害の状況

DVの種類	医療の場で見られる被害の状況
身体的暴力	打撲傷・火傷・切創・煙草による火傷・骨折 不正出血・切迫流早産
精神的暴力	罵倒する・育児に非協力・子ども虐待
社会的暴力	待ち時間を持たない・受診中に電話をかけてきて催促する・行動監視・制限
経済的暴力	生活費（診療費）をわたさない・働かない・働かせない
性的暴力	避妊しない・セックスの強要・中絶強要

表2 DV被害者が受診する可能性のある診療科

(1) 外傷	打撲傷・火傷・熱傷・切創・骨折など	救急医療 外科
(2) 精神症状	過換気症候群・拒食症・不眠症 不安神経症・自殺企図・うつ状態 パニック障害・アルコール嗜癖	整形外科 精神神経科 内科 産婦人科
(3) 産婦人科疾患	PID・摂食障害・不正出血・月経異常 切迫流早産・妊娠中の精神症状 望まない妊娠・中絶	産婦人科

表3 DVと認識できたケースの出産数に占める割合
(1995～2001年8月31日まで)

年次	出産数	DVと認識できたケース	
1995	815	1	0.12%
1996	842	1	0.12%
1997	831	5	0.60%
1998	812	9	1.11%
1999	823	10	1.22%
2000	718	13	1.81%
2001	490	17	3.47%
計	5,331	56	1.05%

(阪南中央病院)

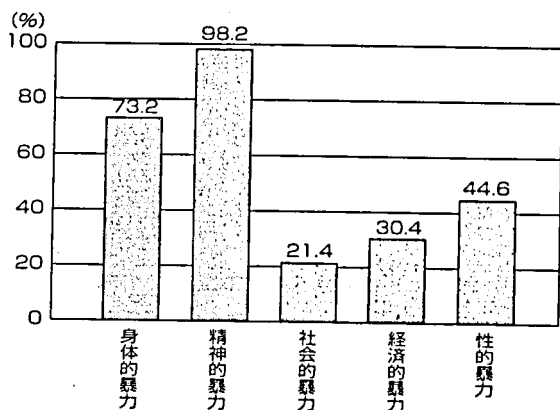


図1 DV56ケースの受けた暴力の種類と頻度（重複あり）
（阪南中央病院）

表4 DVと認識できたきっかけ	例
助産婦との面談の中で	30 (53.6%)
医師の診察時の問診や症状より	13 (23.2%)
(過呼吸症候群、拒食症、自殺企図など)	
臨床心理士またはMSWとの面談の中で	5 (8.9%)
院内保健婦との面談の中で	4 (7.1%)
子どもの虐待の発見から	2 (3.6%)
外傷のため救急外来を受診して	1 (1.8%)
警察からの連絡で	1 (1.8%)
計	56 (100%)

(阪南中央病院)

かったケースが過半数を占めているが、過呼吸症候群で救急搬送されてきたり、拒食症状や服薬自殺未遂で搬送されてきて、背景にDVがあるとわかった事例もある。(表4)

暴力の種類は、大半の事例で「のしる」「どなる」「物を壊す」などの精神的暴力を受けており、それに身体的暴力や性的暴力が加わっている事例が多い。(図1)

■事例1

ここでは、当院でのDV、五六例の中から三例を紹介する。

事例からみる妊産婦のDV被害

妊娠中期に初診、保健指導の場に夫も入ってきて、妻に

対し「アホ、ボケ」とどなる。妊婦本人は無表情でチックあり。助産婦はDVの可能性を考え、以後は一人だけの面談としたが、待ち時間の間に何度も携帯電話が鳴る。本人は、夫の暴力について否定し、いかに優しい人かを助産婦に説明していた。

妊娠後期になり、右眼窩外側、両側大腿内側に、多数の内出血斑と煙草による火傷の跡が確認できたが、自分だけがをしたと言いつづけた。左前腕に径5cmの切傷を認めたときは、入院を強く説得したが拒否。助産婦がさりげなく訪問した翌日、階段から落ちたと来院。ようやく入院するも、三日後に退

院。その翌日、破水にて入院となる。右上手腕と左眼窩外側に内出血斑あり。翌日分娩。夫はずっとつき添い世話をやき、分娩にも立ち会う。産褥三日目、本人と主治医が個室で面談。彼女は「夫は以前から暴力があつたが最近は少なくなった。暴力をふるうのは、自分が悪いとき」と語り、夫から離れる気持ちはない。主治医からは、今後、彼女や児に暴力をふるうようであれば、いつでも病院に逃げ込むことができるし相談にものれることを伝え、同意を得る。

退院後、児の低体重を理由に、保健所からの訪問と、病院から助産婦の訪問を不定期につづけているが、いまのところ明らかな暴力は認められていない。

■事例2

二人目の妊娠で来院。三歳になる第一子は前夫との子。外科のスタッフより、「三歳の子どもが火傷で受診しているが、母親の様子がおかしい」と連絡があり、小児科医師の診察を依頼したところ、子どもに虐待を疑う身体症状が数か所確認された。

妊婦本人も顔にあざをつくって来院することもあったが、暴力については断固として否定していた。その後、子どもが重症の頸椎骨折で入院した。切迫早産兆候もあったので安全を考え、出産まで本人も入院とした。入院後、産婦人

科・小児科スタッフをはじめ、臨床心理士やケースワーカーが面談をくり返す中でところを開いてくれ、頭をなぐられた話なども出てくるようになった。弁護士や子ども家庭センターなどがかわり、やっと告訴でき、夫は収監され、母子は遠方へ転居、転院した。

■事例3

第二子に障害があることがわかった頃より家庭関係が悪化し、夫の暴力に苦しみ、外来助産婦や臨床心理士、ケースワーカーの面談をくり返していた。第三子出産後、生活保護受給のうえでの離婚がようやく成立した。離婚訴訟の際、カルテに記載してあった「夫になぐられ内出血斑あり」という文言を、診断書として裁判所に提出したことが役に立ったようである。「子ども三人をかかえての生活はたいへんだが、もう叩かれることはないし、帰宅時間を気にしなくてもよい。子どもの（障害の）ことも責められないし、こんなに幸せなことはない」と笑顔で話しに来てくれている。

DV五六ケースの転帰

以上の事例からもわかるように、自らをDVの被害者と

認識している女性は少なく、医療の場で話をする中で初めて、①自分が悪いのではない、②ほかの生き方もあるんだ、ということを感じ出し、支援を求める契機となる 경우가少なくない。

その結果、表5のように、二〇〇一年八月末の時点で、DVケース五六例のうち二二例（約四〇％）が離婚または離別している。この離別率の高さは、対象が若い世代であり、入籍をしていなかったり、子どもが未就学であつたり、別れやすい状況もあると考えられる。

また、現状維持の三一例についても、本人が精神的にかなり自立（エンパワメント）して、相手との力関係が変わつてきている事例も少なくない。若い世代のDVに早期に対応することは、ひいては児の虐待防止にもつながり、非常に重要であると考

えられるが、そういったことができる診療科は産婦人科においてほかにはない。

産婦人科はDVの窓口になれる

DVケースを把握したとき、次ページの図2のように、医師・助産婦・ケースワーカーや保健婦・臨床心理士などがそれぞれの立場でかわり、必要に応じて院外の公的機関や弁護士につないでいる。図中の「ハイスクリ研究会」というのは、院内の関連スタッフの集まりで、月一回ケースカンファレンスをし、訪問の報告、今後の関わり方などを議論、情報交換をしている。

中でも助産婦が、事例の把握から相談、医師やワーカーへの連絡など、中心的役割を担っている。助産婦が相談室で、「何か悩んでいることはないですか」といった声かけをすることにより、涙とともに夫の暴言や性的暴力を打ち明ける妊婦さんが少なくないという現実、DVは決してごく一部の女性の問題ではなく、しかも妊娠世代から始まる重大な女性の健康問題であることを表している。DVの早期発見と対応に向け、産婦人科医療とくに助産婦の果たす役割は大きい。

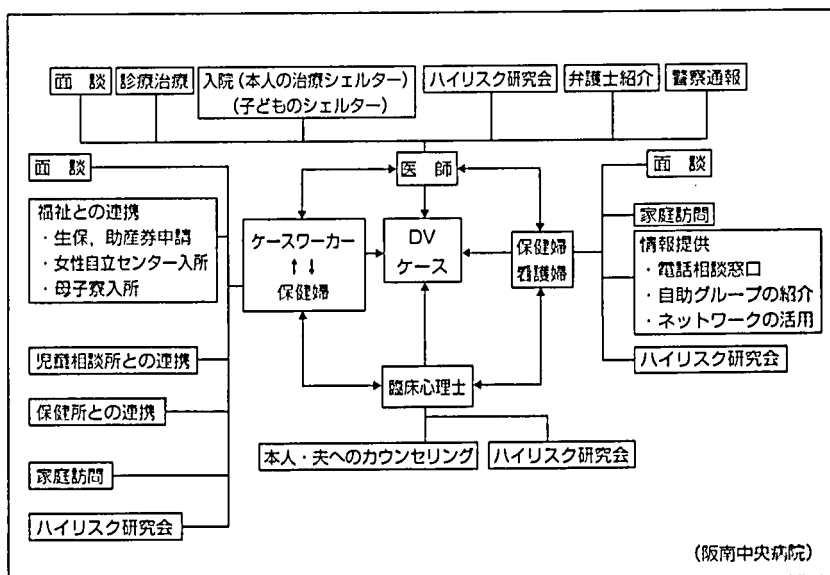


図2 産婦人科におけるDVケース支援のネットワーク

診療上の留意点と問題点

「DV事例の早期発見とその対策」より

DV事例を診療するうえでの留意点として、次の五点が考えられる。

(1) スクリーニング

すべての女性にDVがありうるという視点での問診と診療が必要である。

(2) 安全の確保

患者の安全の確保を優先しなければならない。症状により入院が必要な場合もある。治療上必要な心身の安静を保つため、主治医は本人の同意のもと、夫の面会を謝絶することもできる。患者のプライバシーを守るため、一切の問い合わせに応じないこともできる。もし、夫が院内に強引に入ってくる場合は『建造物侵入』で警察に通報することも可能である。例えば当院では、『特別面会謝絶措置書』なるものを作成して、院内関係部署への連絡の徹底に努めている。

(3) 治療・ケア・カウンセリング

必要な医療を提供し、ニーズに応じてカウンセリングやケースワークをすることで、本人がDVの被害者であることを認識し、今後の生活に選択肢があることを知る。

(4) 記録の保護

カルテの記載内容は、法的に重要な証拠になる。裁判の際、診断書としても提出できる。カルテの開示は本人に對してであり、夫が要求しても、守秘義務違反になるため見せてはいけない。

(5) 他機関への紹介

DV法に基づきDV支援センター（女性相談所）や警察への通報も可能である。ただし、本人の同意を得てからでないと、かえって窮地に陥らせてしまうこともある。福祉・児童相談所・弁護士などの情報提供と紹介も可能である。

しかしながら、医療機関の側が受け入れを躊躇する理由として、主に次のような問題点が考えられる。

(1) 安全の確保の問題

医療機関内で、夫から患者または医療者への暴言や暴力が起こりうる。他の患者への影響もあり、それを監視するスタッフの緊張感強い。

(2) 医療費の問題

保険証も持たずに（持てずに）来院する場合もある。所持金も少なく、医療費の支払いが困難なこともある。

(3) MSWがいない医療機関が多い問題

メデイカルソーシャルワーカー（MSW）がいないと、公的機関へつなぐなどのケースワークがうまくいかない可能性がある。

(4) 療養スタッフのトレーニングの問題

日本ではまだまだDVについての医療者側の認識は低く、対応できるスタッフが少ない。

以上のように、DV事例を診療するにあたって解決さねばならない点はあるが、DV被害は女性の生命と健康にかかわる問題であるという認識のもと、医療関係者の前向きな取り組みが待たれている。

*

注・この原稿は、執筆者と出版社の好意により、「DVの早期発見と予防―産婦人科医師の立場から―」（『ペイネیتالケア』2002 vol.39 no.7 2002-7 メディカ出版）、「DV事例の早期発見とその対策―妊産婦におけるDV事例の把握と支援―」（『Friedrich』vol.39 no.7 2002-7 医学書院）から転載させていただきました。紙上を借りて、お礼申し上げます。

男性（加害者）への サポートの現状

メンズサポートふくおか 原 健一



グループ設立

二〇〇一年十月『DV防止法』が施行され、我われ（メンズサポートふくおか）は、その翌月にグループを立ち上げました。「暴力は治らない」―これは今まで誰もが強く信じてきた事実です。そして、私自身も多くのDV男性と接しながらこの事実は変わらないと考えています。しかし、「中には心から暴力を克服したいと願っている男性がいる

かもしれない、そういう人たちの受け皿はこれから必要になつていくのではないか」と考え、グループ設立を決心しました。それは、以前から構想を持っていた『非暴力ワーク』を福岡でも展開したいという考えが中心であつたことは言うまでもありません。

グループを立ち上げて、十二月に入ると、週に二、三本の割合で電話相談が入るようになりました。それは「妻が逃げて行ったのですがどこに行つたのでしょうか？」とか「接近禁止命令が出たのですがどうすればいいのですか？」といったものでした。中には「死にたい」と訴えるものもありました。また印象的だったのは、加害者男性の親族からの相談が意外に多かったことです。息子に何が起きているのかわからず、途方にくれている親御さんの姿がありました。



非暴力ワークで自己改革を

福岡市女性センターアミカスと共催で、四か月の準備期間を経て、二〇〇二年三月から五月までの隔週開催で『男のための非暴力ワーク』全六回をスタートさせました。参

加者は六人でしたが、これが多いのか少ないのかはわかりません。妻から、「参加しないと離婚する」と言われ、しぶしぶやって来た人や自発的にやってきた人など、参加動機は様々でした。

六回分のワークをここで簡単に触れたいと思います。最初にこれは結果論ですが、参加者が少人数であったために一人一人が話す時間が十分にとれ、ワーク主体で行うよりは（語る）ことを主体に行うという選択をとれたことが良かったのではないかと思います。

これは参加者の（気づき）をより促すということには効果があったように感じます。

【一回目「鎧を脱げる安全な場所の提供」】では、導入でこのワークの趣旨説明を行い、『エゴグラム検査』や『私』を主語にして自分を語ってもらいました。硬さは残るものの正直に自分を語ることができたようです。

この日、最後に『タイムアウト』（暴力への衝動を感じたらその場を離れる）の取り方や、もし抑えられない衝動に駆られたらいつでも電話するようにと私の携帯の番号を伝えました。後で聞いたところによると、「妻との間にワ

ンクッション入ったようでとても気が楽になった」という感想がありました。後日、参加者の一人から実際に「電話を切ったら今から妻を殴ります。もう我慢できません」と電話がありました。私は強く制止して事なきを得ました。彼はたぶん、誰かに止めてほしかったのでしょう……。

【二回目「自分への気づき1」】では、自分が振るった暴力で一番記憶に残るものを語ってもらいました。想像していたとおりのすさまじいものでした。この回で気になったのは、暴力を振るったことへの理由としてパートナー批判が多くあったことです。つまり相手にも暴力を振るわれる原因があるというものでした。敢えてここでは批判せず、黙って傾聴しました。その中で希望を感じることができたのは、ある参加者が自分の暴力を口に出したことで「恐ろしいことをした」と自覚が生まれるような発言があったことです。

【三回目「自分への気づき2」】では、幼少期の体験を語ってもらいました。みんなそれぞれ辛い体験をもっており、虐待経験の話などは、私自身心乱れることなしに聴くこと

はできませんでした。参加者は幼少期の心の傷を共有することで、自分の暴力の根源がどこにあるのか気づきはじめてようでした。

【四回目「DVについて考える」】では、DVについて理論的に理解してもらうために〈ジェンダー〉の話から入りました。最近研究されている加害者像についても触れましたが、あまりにも自分に当てはまるので、みな自分の行動がスキャンされているような錯覚を覚えたようでした。そして他者と共通の行動のように振るっていた暴力に驚き、パートナーの責任ではないのかもしれないと思った人もいました（このあたりは難しいところですが）。そして後半の約束事として、今後このグループワークでパートナーの悪口を言わないようにしようということを確認しました。

【五回目「暴力に代わる自己表現」】では、特定の場面設定を想定して、相手の言動でどのように怒りが出てくるのかワークを使いながら確認しました。この中で気づいたことは、他人から言われても気にならない言葉が、妻や子供から言われると怒りがわくという感情がみんなに共通して

いたことです。彼らに何らかの〈特権意識と被害者意識の混在〉があるようで、それが暴力を振るうことに対して〈自分に許された権利〉だと錯覚させるものがあるのではないかと私は感じました。

【六回目「まとめと決断」】では、非暴力宣言をそれぞれで行いました。少なくとも、以前のような夫婦関係では両方がだめになってしまおうという自覚ができたようで「やりなおせるものなら……」という感想が大半でした。当たり前のことですが、今後一切暴力を振るわないという自信がある人はいませんでした。彼らはワークの継続を願っていました。今回の参加者と接して感じてしたのは、表面的にはみんなやさしくていい人たちだということでした。それが故にこの問題の根深さがあると思います。もしかして彼らは幼少期から〈怒り〉以外の感情表現を教えてもらっていなかったのではないか、という素朴な疑問がわきました。



加害者サポートの危険性

男性が自らの足でサポートの場にやって来ることは、と

ても意義のあることだと思えます。反面、このサポートを（過去の加害行為の免責）にしようとしたり（妻を繋ぎとめる手段）に利用しようとする男性が現れました。

これが悪意であれば、自分を振り返ることなしに相手をコントロールしようとしてみたり、逃げた妻にウソ、甘言を言って帰ってくるように説得してしまいかもしれません。はたまた、調停の場で自分は治ったと調停委員に言うかもしません。

当初は苦しさから解放されたくて我われを訪ねてくるため、本当に治そうという意思があるのか、利用しようとしているのかは、わかりませんでした。途中ではわかるようになりましたが、加害者サポートとは常にこの危険にあるわけです。



最後に……

加害者サポートには確かに危険性はあるものの、私が出会った男性たちは、今現在でも、自分を見つめ直す作業をしています。こういう男性の居場所は今後も必要だと考えています。

実際、このサポートを通じて、逃げた妻を追うことなしに何とか感情のコントロールをして、戻ってきた妻と話し合いを持てた人もいました。ただ、現実にはサポートが効果を発揮した事例はむしろレアケースで、サポートを受ける環境や意識さえも何も整っていません。日本でも加害者問題の啓発が行われ、サポートを受ける機会が増えることを期待したいです。

しかし、それは男性の辛い思いに気持ちを添わせると同時に、被害者の身の安全を一番に考えることのできる加害者サポートでなくては、ならないのでは、と考えています。

*

〈メンズサポート ふくおか〉

連絡先 電話 092-8833-6111

Eメール futaba@try-net.or.jp

- ・ 非暴力をめざす自助グループ 「クワイエット・ライフ」
- ・ 毎月第三金曜日 女性センターアミカスで開催
- ・ 「男のための非暴力ワーク」 開催
- ・ 他、電話 メール相談あり

自立と福祉

九州龍谷短期大学講師・女性と健康北九州ネットワーク会員

野口真理子

1 はじめに

この原稿を書き始めようとした八月二十二日朝、私の住む地域で、道路に止めてあった乗用車の中から、男女の死体が見つかった。事件は、DV夫から子どもを連れて逃れ、離婚調停中だった妻が、ストーカー行為を行う夫に待ち伏せされて、車の中で胸を刺されて死亡し、夫はその場で自殺したというものだった。事前に、警察に夫のストーカー行為の相談をしていたというが、最悪の事態が起こってしまった。

彼女の冥福を祈り、このような事態を二度と起こさない

ために、私の住む地域のDVサポートの様子を通して、「福祉ができること」を考えてみたい。

2 福祉を使った緊急サポートの現状

福岡県では、「売春防止法」(昭三十一年、以下売防法)の規定(第三十四条)によって設置された「福岡県女性相談所」が「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(平十三年、以下DV防止法)により、「配偶者暴力相談支援センター」(第三条)の役割を持ち、相談と一時保護(公的シェルター)の業務に当たっている。そして県内全域の県と市の福祉事務所三十か所に、七十七人の婦人相談員と婦人保護担当相談員(売防法 第三十五条)を配置して、日常生活を営む上での様々な女性たちの相談に応じ、また自立援助のためのアドバイスなども行なっている(ただし、その婦人相談員も母子相談員と兼務のために、専門性が低くなっている)。また、県下に二か所の婦人保護施設(売防法 第36条)が設置され、これらすべての施設が婦人保護事業に当たっている。

「婦人保護事業の実施に関する取扱いについて」の厚生省社会局生活課長通知(平四年)などにより、今のようにD

Vが多くの人たちに知られる以前から、婦人相談員たちはDVを受けた女性たちをサポートし、二週間の滞在がでる「県女性相談所」は、公的シェルターとしての機能を果たしていた。

私の住む北九州市では、七か所の保健福祉センターにいる婦人相談員二十一人を通して、県の公的シェルターへの紹介とともに、DVサポートを行なっている。（ただし現在、「婦人相談員」の名称が、「子ども家庭相談員」に変更され、人数も削減の方向である。また、婦人・母子・児童相談との兼務により、その専門性がなくなり、市は「DV相談は女性センターへ」と市民向け広報をおこなっており、婦人相談員の力が発揮されることが少なくなった）

過去における北九州の婦人相談員の運動によって、DVのための一時保護施設が、市内の福祉施設の中に二か所作られており、県の公的シェルターまで行かなくても、緊急の場合にはここが使われることが多い。

3 自立支援のための福祉サービスについて

ではシェルターを出た後の支援体制は、どのようなになっているだろうか。

女性たちがDVのためにパートナーから離れようとする時の大きな障害のいくつかに、生活をしていく場所や子どものこと、経済的問題があると思われる。北九州市発行の「母子・父子福祉のしおり」を使い、シェルターを出た後の自立支援が速やかにおこなわれている様子を以下に紹介してみたい。

住居については、十八歳までの子どもがいる母子家庭には、母子寮である母子生活支援施設への入居（児童福祉法昭二十二年 第三十八条）、市営住宅の優先入居（母子及び寡婦福祉法 昭三十九年 第十八条）がある。女性一般には、婦人保護施設への保護委託、また年齢や身体の状態によつては、老人福祉法（昭三十八年）、身体障害者福祉法（昭二十四年）などの法律を使い、他の社会福祉施設への入所ができる。

子どもについては、手当として、十八歳までの子どもがいる母子家庭には、児童扶養手当法（昭四十六年）と児童手当法（昭四十六年）による手当の支給がある。

経済的なことについては、最低限度の生活を保障するための制度として、生活保護法（昭二十五年）により、生活、教育、住宅、医療、介護、出産、生業、葬祭の扶助がある。また緊急に必要な資金を貸し付ける（母子及び寡婦福祉法

第十条と第十九条の2）制度もある。

仕事については、育児や介護、そして家事と職業の両立を求める人のための公共職業安定所があり、就職に有利なように母子福祉センターでは技能習得（母子及び寡婦福祉法 第十九条）ができるようになっていて、また、そのような技能習得などのための貸付（母子及び寡婦福祉法 第十条と第十九条の2）制度がある。

4 自立支援のための福祉と 社会保障サービスの諸問題

3で述べたように、自立支援のためのサービスは充実しているように見られるが、果たしてその現実はどうだろうか。

多くの母子寮では現在満室状態の所が多く、絶対数は足りていない。また、措置費の問題から入寮を拒否される事態も生じている。

削減に向かっている児童扶養手当の状況もあり、生活保護の支給要件や母子及び寡婦福祉法での貸付制度要件には、離婚をしていることが条件である。（ただし、離婚調停中で一年以上たっていれば認められているが、技能習得や開

業のための貸付資金には、職業が限定される）

実家に戻った時、実家の収入と同一生計とみられるために、その収入が所得制限を越えた場合は、手当てが受けられない状況もある。

生活保護においても、その基準は厳しく、福祉サービスは、日本国憲法第二十五条（昭二十一年）の生存権のために行われる、最低限度の生活を保障するためのものであるが、それは本当に最低の保障ではない。

このようなことのために、女性たちが生活に困窮していることは必然的に起こりうる。年齢制限により職域が極端に狭められる中高年の女性は、特に貧困状態に陥りやすい。健康保険制度においては、夫の扶養の元にいる女性が夫に隠れて逃避している場合には、居所が発覚する危険性から、病気になるっても病院に行けないということも少なくない。（ただし、公的シエルターに入っている場合には、独自に健康保健証が発行され、シエルターを出た後も使えるようになっている）

年金制度では、第一号被保険者の夫婦は別だが、第二号被保険者を夫として持つ場合の妻は第三号被保険者であり、離婚によってその受給資格を失う。結果として、第二号被保険者となりうる雇用が成立しなければ、第一号被保険者

になるが、第一号被保険者の国民年金と、第二号被保険者の厚生年金の制度は、年金額の上で大幅な格差があるために、離婚による女性が高齢者になった時、極端に少ない年金額となり、貧困状態が生じやすい。健康保険や国民年金などと同様、日本の社会福祉制度は、世帯単位であるために、離婚に至った時、女性にとっては不利な状況が多い。

5 自立支援のための対応策

ではどのような対応策が、今後考えられるだろうか。

DVから一時的に逃げることは容易だが、一人の女性が自分の力で生きていくことの困難が、シエルター後の生活から何われ、自立支援には、社会福祉サービスが非常に重要である。しかし、その制度はDV防止法が成立した現在でも、未整備のままで、むしろ婦人保護事業はその予算がカットされている。

当事者たちの話を聞く限り、シエルターの必要性よりも、自立のための生活保障や支援体制の確保を求める声が多い。調査、啓発、危機介入などでDVサポート活動が果たしてきた役割は大きいが、今後求められるものは、生存のための社会福祉と社会保障政策の抜本的改革であり、長期に

わたるDVの支援体制にあるようだ。

6 おわりに

前述の事件では、専門性の高い婦人相談員が関っていたら、緊急サポートと、長期的展望に立ち、未然に防ぐことのできた事件だと思われる。リストラ策により婦人相談員の専門性が失われた北九州では、短期支援のみの重視で長期的展望に立つDVサポートができなくなっている。単なる一時支援という枠組みによる関係者の判断が、最悪な結果を導いたと分析できるだろう。

一人の女性の人生を、DVという問題のみで輪切りにして考えるのではなく、生まれてから死ぬまでの一人の女性の人権という視点から、DVを捉えなおす姿勢が求められる。その時、女性の人権が位置付けられるための「女性福祉」という分野の確立が、必要である。

【参考資料】

『平成十二年度 女性支援のあゆみ（婦人保護事業）』福岡県女性相談所（平成十三年）
『母子・父子福祉のしおり』北九州市保健福祉局生活福祉部児童家庭課（平成十三年）

「女のよろず(ヨロガチ)相談電話」 開設から一年たちました!

皇甫康子 ランボ・カンチャ

はじめに…

『在日』女性のための相談電話があつたらどんなに良いだろう?

そう考えたのは、十数年前。民族運動によつて、朝鮮人としての自分を肯定できるようになったものの、女性としての解放は一体どうなんだ?と悩みはじめた頃だった。先輩たちの姿は最早なく、仲間の女性たちは私を含め、子育て真っ最中だった。家事、育児に仕事。運動の第一線から退いたものの、忙しい毎日だったが、みんなに共通していたのは、祖国統一、日本社会での民族解放、女性解放の夢を実現したいという切なる思いだった。そして、「朝鮮人従軍慰安婦問題を考える会」(ミリネ)を

結成した。

祖母、母の世代を再評価

「慰安婦」問題に関わつて、発見したことがある。

元「慰安婦」のハルモニ(おばあさん)たちは私の祖母と同世代だ。彼女たちが自らを「汚れた女」と内面化させられた男性優位の考えは、男以上に働き、子どもを育てた祖母にも共通する。ハルモニたちのものすごい潔癖症は、「朝鮮人、臭い、汚い!」と虐められた母と同じだ。母は、その潔癖症ゆえに病に倒れ、五九歳で亡くなった。

嫌なことがあると、すぐに泣きわめく祖母、愚痴ばかりで決断できない母の姿にイライラしていた私。

ハルモニたちとの交流を通じて、自分の祖母や母の癒されることとのかつたトラウマと対面することとなった。

被害を受けながら、自力で生き延びてきた元「慰安婦」のハルモニたち。その存在自体が素晴らしいのと同様、一世や二世の女性たちが、差別的な日本社会で世代を継いで生きてきたことがすごいと思えるようになった。

また、自己解放のための活動をしていると、夫(パートナー)や子ども、親との関係も変化せざるを得なくなる。お互いの利

害が衝突すると、時には険悪な関係になったり、話し合っても修復できなかったりする。

そんな時、「何でも言い合える友達がいるから大丈夫」と言える女性がいたい、何人いるだろうか？ 信頼できる友人がいても、親しいからこそ言えない事もある。

離婚問題となると、同じ民族の仲間からはなかなか賛同を得られない。ましてや、親からの虐待、夫からの暴力となると、女性たちの多くが差別的な日本社会で生きるための必要悪と諦め、口を閉ざしてきた。誰にも言えない悩みを誰かにうちあけられたら？

「あなたは悪くない」と誰かに言ってもらえたら？ 自由と自立を手にするための手だてを相談できたら？

被害に遭っている時、安全な場所とサポートの提供を受けることができたなら？

同胞の女性たちが、何の気兼ねも気遣いもなく安心して相談できる。そんな窓口をつくりたかった。

「在日」の女性が安心して相談できる窓口とは？

最近では「DV防止法」「児童虐待法」の成立に伴い、全国各

地に公的な相談窓口が設置されている。長年、活動をしている民間の女性相談窓口やシェルターの存在も心強い。

しかし、「在日」の私たちが相談するとき、どの程度、的確な支援を受けられるのかとても不安だ。

例えば、虐待する親や暴力をふるう夫から逃げた時。外国人登録証の更新期日が迫っていた。更新すれば、居所が分かってしまうし、しなければ在留権が危うい。

離婚問題となると、韓国籍の場合は韓国家族法との関係も出てくる。

相談した所が迎良く、外国人への知識を持ったスタッフであれば何とか応対してもらえらるだろうが――。また、「在日」だと分かったと、声のトーンが変わったりする相談員もいるのではないだろうか？ 相談員も日本人。悪気はなくても理解の範疇を越えた相談には無意識に「困った」というオーラが出てしまうかも知れない。しかし、藁をもすがする気持ちで相談したほうに、そんな気持ち思いやる余裕はない。

「在日」女性のための相談窓口をつくりたいと思いはじめてから、〈性暴力を許さない女の会〉で活動を共にさせてもらい、トレーニングを積んだ。しかし、開設となると、なかなか踏ん切りがつかない。「やるからには、万全の準備」と気負いすぎた。

仲間たちとの活動で、元「慰安婦」の女性たちをはじめ、たく

さんの女性たちと出会った。

被差別部落の女性たち、沖縄の女性たち、インドのダリットの女性。いろんな立場の女性たちと、お互いの立場の違いや共通項などを話し合う機会に恵まれた。同胞以外の女性たちの間で生まれた信頼関係によって、いよいよ、相談電話開設の実現となった。

相談電話の立ち上げ

二〇〇一年四月、「女によろず（ヨロガチ）相談電話」を立ち上げた。

毎週、水曜日の夜七時から九時まで、「在日」の女性と被差別部落出身の女性が相談を受けている。宣伝不足で、まだまだ相談件数は少ないが、新聞掲載、同胞の団体や他のホットラインからの紹介で、五件の相談があった。

裁判の支援や行政への問い合わせが必要な相談へのサポート。話を聞くことで相談者の不安を少しでもなくす。まだ、それぐらしか実践できていない。私も、職場ではたった一人の在日朝鮮人だ。住んでいる地域も朝鮮人は少ない。職場でも地域でも「立派な朝鮮人」を心がけないと、生きていけない。でも、これがすごいストレスになる。日本人だったら許される失敗も、朝鮮人

には厳しいという現実。ひょっとしたら必要以上に自己規制してしまっているのかも？

自分だけが気づく民族差別や部落差別、女性差別に賛同を得られない環境で生活している女性たちは多い。そんな女性たちが気軽に電話してきてほしい。

社会変革を通じて、自分が自分らしく生きていける空間を広げると同時に、一人の女性が元気になれる、そんな活動を続けていきたい。

また、他の相談電話のスタッフの人達と連携をとり、何が民族差別、部落差別なのかということを理解してほしいと思っている。相談者を支援すると同時に、相談される側もエンパワメントできる。いろんな出会いを期待したい。

【女によろず（ヨロガチ）相談電話】

- ・ 毎週水曜日午後七時～九時 TEL 06-4801-4747
- ・ スタッフ：「在日」女性・被差別部落の女性

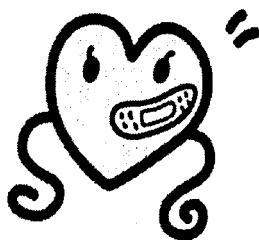


全国一斉DV電話相談を 実施して

DV被害者支援ネットワーク（虹）

片山・高東・山田

はじめに



VIOLENCE FREE

「二〇〇一年十月十三日、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が施行されます。ドメスティック・バイオレンス（DV）防止をうたった初

めての法律施行を機に、全国各地で一斉に電話相談を受けるというアクションを起こすことで社会の関心が高まり、今まで声をあげられな

かった女性たちが一步を踏み出すきっかけになれば、と考えています。また、この新法を社会に向けてアピールする意味も込めて、この準備会を立ち上げました」

DV被害者支援ネットワーク（虹）（以下（虹）とする）は、広島県で活動しているNPOグループです。二〇〇一年八月上旬（虹）は上記の文章で始まる「全国一斉DV一日電話相談」の呼びかけを、電子メールやFAXを使って発信しました。その対象は、暴力を受けた女性に対する支援を行なっている各地のグループや公的機関でした。準備期間はわずか二か月というキャンペーンの呼びかけに、どれだけのグループが参加してくださるのか。

私たちの不安は、全国各地から続々と届く参加申し込みの心強いエールによって打ち消され、最終的には五十五ものグループが（虹）の呼びかけに応え、賛同の意を表してくださいました。

この「全国一斉DV一日電話相談」を実施した第一の目的は、声をあげられずにいるDV被害者の女性に、「あなたのせいではない、あなたは一人ではない」というメッセージを届け、「十月十日、この日だけは全国どこへ電話をしても、相談ができますよ」と呼びかけること。

第二の目的は、私たちも含めてDV被害者支援をしてい

る人びとが全国で同時に行動を起すことで、それが大きなうねりとなって社会に対してDV被害者の存在と支援の必要性をアピールすること。

第三には、すでに行動を起している各地の人びとの「何とかしなければ」という思いを軸に支援者のネットワークを作り、私たちもまた「一人ではない」と確認することでした。

全国一斉DV電話相談を呼びかけて

「たった一日の電話相談が何になる」という声もあったのは確かだが、全国のどこにかけても、誰かが思いを聞いてくれる「一日」と、全国にはこんなにたくさんの方の支援グループがあるという「情報」を女性たちに提供できたことは、応援メッセージの役割を果たしたのではないだろうか。

私たちはただ聞くことしかできなかったかもしれない。でも、女性たちが話すことで「今の状況」から抜け出すためのヒントを見つけることもあるかもしれない。一方で「私には関係ない」と思っている人にこのキャンペーンを知らせることで「DVとは何か？」を考えるきっかけができたかもしれない。

社会運動は、当事者が声をあげることに始まり、支援者を巻き込んで動いていく。DVの全国展開キャンペーンが今まで一度もなかった事実を後で知り、疑問を持った。その答えは、この度のさまざまなグループと連絡を取り合う過程で見えてきた。

傷ついた女性たちを支援する現場は、人手不足と資金不足で目の前の女性たちをサポートすることで手一杯、社会に訴えてゆくエネルギーなど到底残っていない。加えて「被害者に落ち度がある」という神話が告発の声を封じ込めている。これは支援する側の活力をも低下させる一因にもなる。だからこそ、「つながっている」という感覚は大切である。

支援する私たちも、この一日電話相談がきっかけで、全国の女性たちからパワーをもらった。そして、共通の問題に取り組んでいる連帯感も感じる事ができた。DV防止法見直しまでの三年間、このキャンペーンは必要と思われる。そしてこの運動が大きな流れとなつて、社会システムを変えていく原動力になることを願う。

〈虹〉のメンバーは、会ったこともない全国の方がたの熱い想いに突き動かされ、力強く後押ししてもらった。各地域で頑張ってきた皆さんの協力なしには全国一斉電話相談

は成しとげられなかった。この成果はDV支援に携わる方がたの協力の賜物である。

最後に、「電話をかけてくれてありがとう、あなたは一人ではないよ」と、電話をかけてくれた女性たちに、感謝の言葉を伝えたい。

DV相談事業のこれから

「全国一斉DV電話相談」を呼びかけるにあたって参考にしたモデルが二つある。一つはウィメンズセンター大阪が呼びかけた「女のからだと性・全国一斉電話相談」（一九九八年）で、もう一つは二〇〇一年一月、韓国の女性部が発足と同時にスタートさせたDVホットライン「ワンストップダイヤル1366」である。

「ワンストップダイヤル1366」は、韓国全土どこからでも局番なしの「1366」で繋がり、二四時間体制の当番制で相談員が電話を受けている。しかもフリーダイヤルである。韓国には一四一か所のDV相談所、三〇か所のDV保護施設、九二か所の性暴力相談所と八か所の性暴力相談保護施設がある（駐広島大韓民国総領事館調べ、二〇〇一年十二月）。

「ワンストップダイヤル1366」は、上記の民間と行政の施設および相談機関が連携し、協力し合って実現した。

この度の全国一斉電話相談で行なったNTTのトラフィック調査の結果、着信がかなわず待機状態におかれた相談者数は、通話者の二倍〜十倍にものぼり、潜在的なDV被害者の多さを示唆する結果となった。日本のDV相談電話の回線拡充が急務であることは明らかである。加えて、どの都道府県の電話相談先においても同等の適切なサポートを提供することが可能なシステムが望まれる（できればフリーダイヤルで）。

韓国のようなホットラインは、ハード面では日本でも展開可能なシステムである。後はソフト面でのシステム作り、つまり、民間・行政の枠を超えた体制作りと相談を受ける側のスキルアップである。

この度、全国の連絡役を引き受けて気づいたことがある。それらを踏まえてDV電話相談事業のこれからについて考えてみる。

DV被害者支援にかかわっているグループ・機関は一枚岩ではない。乱暴だが機能別に支援機関を次の五つに分けてみる。

- ① 電話による情報提供、専門機関の紹介、話を聞くなど、

間接的に被害者を支援する（女性センター、NPOなどの電話相談）

② 地域に密着した支援を提供する（地方自治体職員によるケースワーク、人権擁護委員、民生委員など）

③ 避難した被害者と直接対面して支援する（シェルター、婦人相談所、医療機関、警察）

④ 離婚、親権に関する法的な支援（法律事務所、法律相談など）

⑤ 法や制度の改革（国、自治体の議員による立法、大学関係者による調査研究など）

①⑤に向けて、アクセスする間口が狭くなっており、それぞれ専門性のあることがわかる。全国一斉相談は①の段階の機能を持つことになるだろう。この五つの社会的資源はもともと各地に存在するものである。だが、DV問題は社会的にようやく認知され始めた現段階では、問題に対処できる可能性を持ちながら、これらの機関は本来の力を十分発揮できずにいる状態にあるように見える。

一方、被害者も個別的呢である。DV被害者は暴力環境におかれた中で自分を見失い、自分の問題がどこにあるのか状況を整理できないまま電話をかけてくることも多い。彼私たちの訴えは次の三点に集約される。

A. 今起こっていることがDVかどうかを知りたい、話を聞いて欲しい。

B. 行動を起こすかどうか迷っている。法律やシェルターなどの情報が欲しい。

C. 生命・身体に危機を感じる、緊急にケースワークをして欲しい。

これらが混ざってかかってくるのがDVの相談電話の現実でもある。①の立場で電話を受ける我々としては、話を聞くだけでいいのか、それともどこか他の機関に支援を依頼するのか、話の中から緊急性の有無を聞き取り、判断しなくてはならない。そのためにはDVについての知識、暴力被害者の心理的な状態についての知識、そして地域における被害者支援のための具体的な情報を知っておくことがまず必要となる。次に各地域の社会的資源を掘り起こし、できれば顔の見える、いつでも連携がとれるようなネットワークを作っておく必要がある。

以上のことは「全国一斉DV一日電話相談」の報告の中にも散見された意見であるが、民間と行政の相談機関が協力し合うことの意味はそこにある。では、具体的にどのような協力体制が可能だろうか。

NPOグループは迅速で具体的な支援ノウハウを蓄積し

ているが、慢性的な資金不足の中、活動を続けている。国や地方自治体に対して予算請求のできる行政機関は、NPOに被害者のサポートを依頼する一方で、NPO支援のためには有償ボランティアや委託事業の形で資金面のサポートをすることが可能だ。それぞれの機能を理解した上で、民間と行政がその役割をシェアしあう共同作業が欠かせないのではない。

すでに、ある自治体でこのような事業展開が始まっている。ただ、民間の労働を安く見積もり、「ボランティアだから」というお題目で、民間団体の存続が危ぶまれるほどの低コストで事業委託するのは注意して欲しい。これは女性のアンペイドワークを助長させる一因となる。専門的なサービスに対しては、相応の報酬で報いるべきである。

「逃げたい」と電話をかけてくるDV被害者は、県外への避難を望むことがある。そのため、地域でのネットワークに加えて全国各地の支援機関の情報が必要になってくる。「マニュアル的に」知られている情報ではなく、実際に必要としている人に役立つ情報の集積が必要である。DVに向き合っている人が直面する問題は個別的である。情報が欲しいときにどこへ行けばいいのか、女性の視点でサポートを受けられるところはどこか。

現時点では、全国レベルでそのような包括的な情報を提供する機関は確立されていない。法律扶助協会や弁護士を紹介されたにもかかわらず二次被害が後をたない現実はその象徴しているようにみえる。そして何より忘れてはならないのは、支援したい人にも情報を提供することである。「支援したいがどうすればいいのかわからない」という訴えをよく耳にする。「DV問題に向き合おう、取り組みよう」と思ったときに全国の情報を手に入れられる「使える情報センター」が必要な時期にきている。各地の相談機関がそれぞれの地域の情報を収集し、全国へ、そして、全国の情報もまた各地へ届くようなセンター構想と一緒に考えてみて頂きたいと思う。

(抜粋 おおつのりこ)

※この文章は、『二〇〇一年 全国一斉DV一日電話相談報告集 二〇〇二年三月発行』（編集…DV被害者支援ネットワーク〈虹〉片山・高東・山田、連絡先 TEL&FAX 〇八二四―二六―六八八四）から抜粋しました。同ネットワークでは、今年も全国一斉DV電話相談を実施しました。

「DV施策先進県へ」

千葉県の取り組み

千葉といえば堂本暁子県知事。国会議員時代にはDV防止法成立の中心となり、知事選公約にDV対策をあげ、当選ほどなくDVチームを作ったと聞いて関心はあった。しかし、俄然注目したのは平成十四年六月末の全国シェルターシンポジウム。千葉県警からDV対策班に出席している佐藤さんの「千葉県ではDV対策担当を庁内公募し…。千葉県警では…」の発言を聞き、これはぜひ行ってみたいと思った。そこで、千葉県庁「DV対策班」、野田市「公設民営シェルター」、民間シェルター「かしわふくろうの家」の三か所取材させていただいた。

1. DV対策班と「支援マニュアル」

千葉県庁では、堂本知事が当選してから五か月目の平成十三年八月一日、DV対策を総合的に推進する専門チームが発足した。専任がいない状態から、企画調整班DV担当として一気に三人増員となり、平成十四年度からは男女共同参画課DV対策班となった。(女網)の取材には、副主幹の浅野由美子さん、佐藤裕明さん、田中陽子さんに応じていただいた。

浅野さんの説明では、最初の仕事は、民間などからも現状と意見を聞いて、DV支援に関する蓄積を吸収しながら、「女性に対する暴力対策専門部会」第一回の開催と相談の受け皿づくりをすること。十月のDV防止法施行に間に合うように、被害者の人権擁護、きめ細かな相談支援と当事者の立場に立った自立サポートをモットーに、関係者の意識形成と体制づくりを急いだ。広く職務関係者を集めたセミナーを開催し、また専門研修には保健所などの関連機関も含めて専門家から講義を聴いた。

支援に関する意識と情報を共有するもののひとつとして、十月には「配偶者等からの暴力を受けている女



性を支援するために、DV関係機関対応マニュアルⅠ』が作られた。

担当したのは田中さん。もともと女性問題に関心を持っていた田中さんは、自分にもDV被害者を支援する体制の整備ができるならと思って庁内公募に応じたという。「現場を見なさい」という知事の意向で最初の一か月は、シェルターの利用者を含めて様々な人から話を聞き、本を読み、知識を吸収した。それをまとめたのが『支援マニュアルⅠ（＊）』である。

「マニュアルの目的」では支援と連携について述べ、「DVとは」「DV防止法ここだけは」においてはDVのポイントを説明し、「中核的機関の業務」「関係機関・関係者の心構え」で、各関連機関の役割と基本の流れ

を示す。市町村が独自に取り組む支援制度が書き込まれ、「医療スタッフのためのトレーニング」などの資料も掲載されているが、これは次の事業への布石とのこと。連携のために不可欠なDV支援機関リストには、官民を問わず、相談に応じるために必要な機関・グループが載っている。

その後、『支援マニュアルⅠ』は進化している。半年後の今年四月、『バージョン2』ができた。「関係機関」のリストには、女性医師による女性のための相談窓口、市町村別DV相談窓口などが網羅され、リストの情報量は一気に倍増した。田中さん曰く、「これが、十月から半年間の仕事の成果です」。

2. 千葉県のDV対策

千葉県は、これまでに行なった主なDV対策の内容として次の五点をあげている。

- 1 「家庭等における暴力対策ネットワーク会議」の運営
- 2 「女性に対する暴力対策専門部会」による女性に対する暴力に係る総合対策の検討

3 『DV関係機関対応マニュアル』の作成 情報 報の共有・連携

4 関係機関への研修・啓発

5 県民への広報啓発

これだけでは他県との違いがわからないが、まず、「やりたい職員で、動く体制を」の考えのもと、意欲のある職員を庁内公募して推進の中心となるDV対策班を立ち上げた。知事のネットワークを活用して、専門家に「女性に対する暴力対策専門部会」に入ってもらい、その提言を受けて、施策を立てる。加えて、被害当事者の声を直に聞くということだ。

また、人とソフトが大切と、女性サポートセンター（従来の婦人相談所）の配置人員の大幅増加を図り、他機関の職員とともに研修を行なって連携と支援内容の充実を図った。費用については補正予算を組んで対応することもあるという。その成果は、平成十四年四月から六月の千葉県の相談件数が五四〇件と、東京、大阪に次ぎ、平成十三年十月十三日から十四年八月末までの地方裁判所での保護命令発令件数も、大阪九件に次いで千葉が四七件と、数字が物語っている。

（下の表を参照。）

地方裁判所 管内	認容（保護 命令発令）	静岡	岐阜	長野	甲府	福井	金沢	富山	新潟	横浜	東京	千葉	さいたま	前橋	宇都宮	水戸	福島	山形	秋田	仙台	盛岡	青森	釧路	旭川	函館	札幌
	37	4	4	15	3	8	1	9	32																	

地方裁判所 管内	認容（保護 命令発令）	名古屋	大津	京都	大阪	神戸	奈良	和歌山	鳥取	松江	岡山	広島	山口	徳島	高松	松山	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	那覇	全国
	33	17	11	19	99	39	21	5	9	5	12	19	8	9	22	6	11	20	3	8	10	2	1	8	20	777

保護命令事件地方裁判所別認容件数（平成13年10月～平成14年8月末）

* 以上の数値は、核裁判所からの報告に基づくものであり、概数である。

* 平成13年10月 分は10月13日施行以降の件数である。* 認容件数は一部認容の事実を含む。

3. 枠組づくりと調査

平成十三年九月、第一回の県男女共同参画推進懇話会「女性に対する暴力対策専門部会」が開かれ、DVをはじめとする女性への暴力の総合的検討のための協議を始めた。十二月二十七日には、専門部会からの報告を受けて、「県男女共同参画推進懇話会」（座長 渥美雅子弁護士）が「配偶者暴力相談支援センターのあり方」に関する基本的な考え方について（提言）にまとめ、知事に提出した。

提言は「配偶者暴力相談支援センターは、DV被害者の人権や、自己決定権を尊重し、被害者の求める支援に適切に対応すること」などとするもので、ほかにも「支援プログラム・人材育成プログラムなどの開発」「市町村が打ち出す独自策を奨励する視点の必要性」「男性の被害者や、加害者更正に向けた取り組みも将来的課題」などの課題も指摘され、四月の配偶者暴力相談支援センターの開設をめざして、本格的に動き始めた。

これに先立ち、十三年七月には「家庭等における暴力対策ネットワーク会議」が開かれた。

裁判所など国の出先機関のトップ、弁護士会会長、医師会会長、市町村長などに集まってもらい、上からの意識変革と情報の共有・連携の強化をめざした。一方、実務者会議も開催し、トップ・実務者の重層的な体制をとることで効果をあげている。

4. 千葉県女性サポートセンター

千葉県の配偶者暴力相談支援センターは、現在、中核的機能をもつ「千葉県女性サポートセンター」と、地域配偶者暴力相談支援センターとしての「千葉県女性サポートセンター」の二か所となっている。なお、女性サポートセンターから遠い他の地域においても、県の機関を地域配偶者暴力相談支援センターとすることについて、引き続き検討しているという。

女性サポートセンターでは、二四時間対応の電話相談を受ける。被害女性の自己決定の尊重を基本とし、法律の定める範囲にこだわることなく支援に応え、生活再建のためのケースワークを行うとともに、医療・心理的ケアを行なっている。スタッフは所長以下十九名の職員（ケースワーカー十八名、心理判定員一名など

を含む)のほか、看護師、電話相談等の嘱託職員を三〇名配置し、弁護士による法律相談も行なっている。

一時保護については、センターとは別に既存の建物を譲りうけ、それを改装して二〇室の施設を設けた。そのおかげで、相談はDV被害者の安全と保護を第一とすることができ、入所者は生活保護の決定を受けて住居を設定し、退所に至るケースが多い。滞在は原則二週間だが、ケースにより考慮している。なお、利用者は、子どもを連れた三〇代が多い。その他の支援としては、保護命令の本人申立のサポートをしている。

配偶者暴力相談支援センターに関する広報活動は積極的に進んでおり、それもあってか、今年度に入ってから相談件数は増えている。

5. 千葉県警からも出向者

シェルターシンポジウムでお会いした佐藤さんの前職は、浦安署生活安全課長だという。知事と県警本部長の話の中で、警察官の出向を要請され、県警本部長から佐藤さんに声がかかった。県警本部のDV対策係長は浦安署のときの部下でもあり、県と県警の連携体

制は万全だという。

警察の方針として、「従来から、女性への暴力(性暴力)対応としては、さらなる二次被害を防ぐためにも、各課が連携して被害届が出たら迅速処理を心がけている。DVについては保護命令とともに傷害等の刑法犯で被害届を出すことができる」とのこと。

私たちは、「保護命令は自分の安全を守ることだからなんとかできるが、子どもの父親を罪人にするのかという周囲の圧力もあり、被害届にも告訴にも踏み切れない」という被害者の気持ちを聞く機会が多いので、佐藤さんに様々な質問を行なった。

答えは、「常日頃から、警察官にとって一番大切なことは、被害者に対し親身になって対応することであると指導している。被害届を出さなくても加害者への指導や被害者の安全対策もしているので、何かあったら、署の生活安全課に遠慮なく相談してほしい」「警察と具体的な情報交換を通じて信頼関係を築いていくことが必要」「安全対策のため防犯ブザー等を貸し出している」「警察学校初任科研修や各級幹部研修、署内の会議の際に署員に対し、DVへの理解と対応を徹底して指導している」などなど。苦情処理などでは、「苦情が来

たら、組織で迅速に対応する」「苦情申立制度もある。」とのことだ。警察代表に被害者代表が質問し、模範回答を聞いたようでもある。とにかく、やる気があればどの県でも千葉のようにできるのだという思いを強くした。

6. 感想

現在、千葉県では「DV被害者支援活動促進のための基金」設立の呼びかけ人を募集している。これには、民間団体に資金援助することで支援活動を活発にする、暴力のない社会を築くという県民の思いを資金援助という形にするという二つの目的があるが、本来税金で賄うべきDV対策費を善意で補完するのはどうかとの声も聞いた。DV対策は女性たちのシェルター運動によって法律となった。今後は女性たちのボランティアという名の無償労働によって担われるのではなく、行政が主体になって、民間との協働で行うものではないだろうか。

それでも、それでも、千葉はすばらしい。県は、被害当事者の話を聴いて対策を立て、専門部会に民間

グループを招いて、直接意見を聞いて協働のあり方を探るなど、次の動きを始めている。市町村も独自策を打ち出し、地域内の有機的な支援策が展開されようとしていた。そして、私たちが会った職員の方गतも、「DVのない社会の実現のため、自分たちの持てる力を存分に活かしたい」というエネルギーにあふれていた。

知事の選挙公約だから、また、知事の意欲があれば、DV対策がここまで進むというのはうれしい驚きだ。今後、「男女共同参画の促進に関する条例」が制定され、定義、基本理念、DV被害者の保護等、苦情処理および相談への対応が裏付けられる。県議会ではいろいろ抵抗があると聞いているが、DV対策をさらに拡充するためにも条例ができることを願う。

(まとめ 堀江節子)

*1 マニュアルは郵送料を切手で送れば無料でしたけ
ます。(問合せ先 千葉県男女共同参画課DV対策班
直通 043-223-2376)

野田市「公設民営シエルター」と

「のだフレンドシップ



青い鳥」

平成十四年七月十七日付の日本経済新聞に、野田市の「公設民営のシエルター」の記事が載った。

「公設民営」とはどのようなものか？ 直接話を聞きたいと、野田市に出かけた。

野田市は埼玉県との県境にあり、全国有数の醤油メーカーがある人口十二万人の都市である。八月二九日、〈女網〉のメンバー二人は、上野駅からJR常磐線柏駅で乗り換え、東武野田線「野田市」駅で下車した。どこからともなく醤油の匂いが漂っている。なるほど駅が醤油メーカーの工場の中にある感じで、案内板を見ると、メーカーの名前の入った体育館や病院などの施設があちこちにある。

野田市庁舎は森の中にある近代的な建物である。DV対策については、「保健福祉部人権施策推進課」の担当である。窓口に行くと、制服を着た女性が椅子からさっと立って笑顔で迎えてくださった。佐藤定子さんである。私たちのために準備した資料を両手に、上階の会議室に案内してくださった。

「ここは市を一望に見晴らせる部屋なんです。野田市は樹木が多いのですよ」佐藤さんのところ配りに、遠路の疲れも吹き飛んだ。

野田市ではDV対策には早くから取り組んでおり、平成十二年十月末〜十一月には市民への「男女共同参画市民意識調査」も実施。「DVの経験がある」と回答した人が、女性回答者五九八人のうち一〇九人（一八・二％）にのぼるなど、深刻なDV被害があることがわかった。

また、平成十三年七月に国の「女性に対する暴力に関する基本的方策について」の答申が出され、その後開かれた千葉県の女性政策推進懇話会には野田市長が市長会の代表として出席。そこでFTCシエルターの平川和子さんの話を聞いて、市長はぜひ野田市でもシエルターを作ろう！と痛感。平成十三年十一

月に人権施策推進課に施策の検討が指示されたという。市長さんの意識そのものが先進的と感じられた。

1. 人権施策推進課での始まり

検討を命じられた佐藤さんたちは、長年DV被害者の支援を続けている東京の（HELP）の大津恵子さんに研修を受けた縁で指導していただいたり、FTCシェルターを視察させてもらうなど実地研修や研究を積み重ねた。その結果、財政逼迫の折でもあり、民間の協力も得て弾力的に運用できる「公設民営方式」がよいだろうとなった。平成十四年二月に「野田市ドメスティック・バイオレンス総合対策大綱」を策定し、制度面でも、女性ケースワーカーを配置し、女性と子ども専門に対応できるようなサポート態勢を図った。

2. 「のだフレンドシップ青い鳥」設立

ところが、野田市には民間のDVサポート団体がなく、運営していくための人材の確保が課題となっ

た。悩むことはなく、ほどなく人材が見つかった。

数年来活発になっている「男女共同参画市民推進委員会」のなかに民生児童委員をしている適任の女性がいた。カウンセラーとして活動する中でDV被害の女性を自宅に泊めた経験を持ち、もう一人は保育士の資格を持っている。このお二人が中核となって、平成十四年五月NPO法人「のだフレンドシップ青い鳥」が立ち上がり、七月に野田市からシェルター運営を委託された。

佐藤さんの案内で事務所を訪ねた。専従の一人と五人の方がたが笑顔で迎えてくださった。

広い事務室の真ん中に大きなテーブルが置かれて気持ちのいい空間となっているが、パソコンなども含めて備品のほとんどは寄付とのこと。（女綱）のHPもすでに開いて、見てくださっていた。

3. 「のだフレンドシップ青い鳥」の活動

★一時保護活動の実際 定員は単身なら五人または二〜三家族。開設して間もなく他市からの利用者が入所された。退所し、自立に向かって歩み始めた

表情も明るく報告に來られたのが前日のこと。スタッフ全員明るい表情をしておられたのはそのせいだったのかと納得した。その方は、夜も一人で大丈夫と言われ、スタッフが夜間働くことはなかったが、それでも気持ちは二四時間勤務と同じこと。初めてでもあり、気疲れは相当のものだったという。なお、シエルターのセキユリティーシステムは警備会社で対応している。

★相談態勢 二四時間対応しており、夜間は転送電話となつている。専従の方お二人が交替で携帯電話を持たれるということで、これは負担が大きいだろうと感じた。野田市では、平成十三年五月から一次的窓口として「女性のための相談」を開設しており、そこからの引き継ぎのケースもある。

★心理面でのケア 精神科医によるカウンセリングを一人について六回まで全額助成する制度を設けているが、必要な人には「青い鳥」スタッフが同行する。★「緊急一時保護施設（シエルター）の運営ルールに関する基本的考え方」 十一項目にわたつて基本的な考え方が決められており、それに基づいて入所受付をするが、そのときの状況によって柔軟な対応

をすることになっている。

★委託料のこと 野田市からの委託料（平成十四年七月～平成十五年三月）は三〇〇万円である。事務所の経費のほか、スタッフには同行した際の交通費が支給される。実際の活動のすべてがボランティアといつてよい。ここが最大の問題点と感じた。息長くこうした活動を継続するためには、オーバーク、エネルギーが枯渇することが怖い。また、利用する当事者にとつてもサービスの低下につながる恐れがある。出発したばかりの公設民営のシエルター様ざまな問題を抱えているが、ぜひ成功させて全国モデルになつてほしいと願いつつ、「のだフレンズシップ青い鳥」の事務所を後にした。

（まとめ 登石知子）

参考資料：野田市『緊急一時保護施設（シエルター）の運営ルールに関する基本的考え方』（平成十四年二月十二日）、『野田市ドメスティック・バイオレンス総合対策大綱』（平成十四年二月）、『フレッシユプランのだ』、市報『のだ』（02/6/15 NO.878、02/7/15 NO.880、02/8/15 NO.882）

千葉県内初の 民間シエルター 「かしわ ふくろうの家」

代表 細谷久子



ひとりで悩まないで。

電話をしてください。

月、木曜日 12:00～17:00

(04) 7132-0711

1. 一〇〇万円たまったら、 シエルターを

「かしわ ふくろうの家」が電話相談を始めたのは、平成十二年九月。以前からシエルターの立ち上げは考えておりましたが、電話相談を始めてからますますその必要性を感じるようになりました。それは、何人かの方を一時保護や母子寮にお願ひしましたが、どこも、いつも満室。東京の母子寮にお願ひするのいろいろな手続きが必要で、入居するのに二日も三日もかかってしまう有様です。なかには、やっと入居場所を確保したのに、その間に夫の元に返って行った人もいます。で、自分たちで立ち上げるしかない。

私はシエルターを立ち上げるのに、百万円たまったらと思っていました。ところが、五十万円程度集まったところで、家賃を安く提供してくださる方がいらしたので、チャンスだと思い、ご好意に甘えしました。でも、それだけではシエルターはできません。被害女性を支援するスタッフが必要です。で、ボランティアの方を募集しました。「できるときに、でき

ることを、無理せず」ということでお願いしましたら、大勢の方が集まってくれました。今では、へかしわ ふくろうの家は、電話相談と生活支援のボランティアで成り立っています。

2. 公的支援が必要

シェルターの開設は平成十四年一月。千葉県内において民間で立ち上げたのは、私たちが最初です。なにもわからず、なにことも初めてで、一つひとつが勉強でした。

立ち上げるとすぐに、いろいろな問題が起きてきました。被害者の大半は急に出てくるので着のみ着のまま、所持金もありません。その日からの生活を考えなければなりません。例えば、親子のどちらかが病氣したら医療費は？ 保険証は夫に居場所が知れるので使えません。あるとき、知事に問いかけましたが、答えはまだありません。私が立て替えるのでしょうか？ 柏市に聞いてみたら、「入院した場合、その間に生活保護を申請すればよいでしょう」という答えが返ってきました。しかし、入院す

る人ばかりではありません。アメリカでは、州が立て替えてくれるそうです。日本も早くそうなるしてほしいです。

実は、入居者ばかりでなく私たちもお金に苦労しています。資金獲得のためにフリーマーケットに出たり、「かしわまつり」には水ヨーヨーを売ったり、がんばっています。ですから、シェルターの補助金として柏市から十四年度に「家賃分五十万円」をいただいたのは、大変ありがたかったです。このように、行政やいろいろな方にご支援いただかなくては立ち行きません。

3. ゆっくりすごしてほしい

シェルターへの入居経路は、「かしわ ふくろうの家」の電話相談、民生委員、ソーシャル・ワーカー、福祉事務所などからです。入居は代表とスタッフで決めますが、一週間程度で自立できそうな人に入居してもらうことにしており、自立に時間がかかりそうな方は「女性サポートセンター」を紹介します。福祉が必要なことも多く、本人にもそのほうが良い

と思うからです。そういうわけで、シェルターはいつも満室というわけではありませんが、入居者があればスタッフ全員、大変よく面倒を見ます。

最初はなにも話さなかった入居者も、安心してくるのでしよう。日増しに自分の受けた暴力のことなどを話すようになります。ある入居者は「夫がいつ暴力をふるうのか、おどおどして食事もゆつくりできなかつたが、久しぶりにゆつくりとおなかいっぱい食べました。お風呂にもゆつくり足を伸ばして入りました。こんなにゆつくりしたのは、何年ぶりだろう」と言っておりました。私たちはその言葉を聞いて涙が出ました。また、シェルターにはテレビはありません。なぜかという、暴力からやつと逃れてきたのです。親子でゆつくり向き合い、話をしたり、本を読んであげたり、勉強を見てあげたりして、時間を有効に使ってほしいからです。

4. 自立に向けて

自立への第一歩は、生活保護を申請・取得して、部屋を借りるところから始まります。スタッフは、

シェルター入居者と不動産屋へ同行、市役所へも国民保険の申請や生活保護の申請に出向き、子どもがいる人とは児童相談所へも行きます。離婚の話し合いでも、弁護士のところへ同行し、調停が始まれば裁判所へ行くこともあります。入所者はかりでなく、電話相談の方にも、同行する場合があります。

そうやってシェルターを出られた後も、電話をいただいたり、食事をしたり、たけのご掘りに行ったり。先日も「上野動物園」へ親子といっしょに行ってきました。会うたびに親子の顔が晴ればれとしてきて、「太ってきた」など聞くと、大変うれしいものです。

ふくろうは「不苦労」と書きます。ギリシャ神話では知恵の神様といわれています。自立する女性が、知恵を出し合い、苦勞のない幸せな生活をしてもらいたいと思って（ふくろうの家）と名付けました。そんな私たちの願いがかないますように、行政や皆様のご支援をよろしく。

映像メディアとDV問題

深津 麻弓

(富山テレビ放送)

七月、わがローカル局富山テレビのニュース番組でシリーズのDV報道を企画した。きっかけは地元で起こった夫婦間の傷害致死事件で、それがDVによるものだとして「発覚」したことだ。被害者である女性が行政機関に相談していたにもかかわらず最悪の事態に至ってしまった事実、事件を担当していた男性記者が「あらためて、この問題の深刻さを報道すべきでは」と企画を提案したのだった。私は社会部ではなかったが、かねてから関心を寄せていたので、メンバーに加わることを申し出た。

当初この企画は五回シリーズだったが、結果的に三回になった。回数之差は、私たち取材班のテレビ的理想と、現実の深刻さの溝だったように思う。真実を伝えるには、あまりにもデリケートなうえ、通常の事件とは異なり、現在進行中の問題であり、報道が被害者の危険を招くおそれもある、とわかったからだ。

取材先候補としてあがったのは、行政機関、民間支援グループ、有識者、そしてDV被害者の女性だった。取材協力依頼とリサーチをかねて、はじめに民間支援グループ女網の方がたと会ったとき、強く「当事者の映像を流すべきではない」というようなことを指摘された。

何でもすぐに映像に結び付けようとするのは私たちの悪い癖だが、私たちにとって当事者の声は必要なものだった。テレビが映像メディアである以上、どんなニュースであっても、本人不在では信憑性に欠けるからだ。それに正直なところ、「本当の声」がないと、視聴者にも（そしてデスクにも）訴えかけにくい。一人でも多くの人に届かなければ報道の意味が無いのだ。関係者の多くは眉をひそめた。「センセーショナルである必要はない。殺人やひどいケースのみが涙頂戴式に放映されると、生活の中で日々暴力的な言葉を受け続けている人が、自分はいしたことがないと我慢してしまうことになる」と。

もちろん、そんなつもりはない。とても悩んだ。どうしてテレビ報道は過激な印象を与えるのか、何のためにDVをシリーズ企画するのかと。結局、このままで見切り発車は危険と判断、放送期日を

延ばした。

取材班はリサーチを続け、民間グループと打ち合わせを繰り返して企画を練り直した。

私たちが伝えたいことは、次の三点である。

- ・ 暴力から抜け出せずに苦しんでいる人が多くいるという実態を知らせる。
- ・ 一人でも多くの当事者に気づいてもらい、相談するきっかけを作る。
- ・ DV法施行後の現状を探る。

そこで、当事者の声を最小限に減らして統計を活用し、被害者への対策とDV法の限界を盛り込むことにした。次に苦労したのは映像だった。伝えたいことを盛り込むには、全シリーズを通して正味十五分間。当事者のインタビューのかわりに、女網の協力を得てインターネット上に寄せられた声をイメージ映像にした。イメージ映像をつけるとどうもウソっぽくなるような気がしたが、仕方がない。番組は予定の時間を空けて待っているし、片寄った報道を避けるためには、多様なケースを示す複数の声が必要だった。

その他、弁護士、信用調査会社、行政の現場で直接当事者に関わる担当者取材した。その中で、誰もがDVの深刻さと対策の限界に直面し、戸惑い、地道に活動が続けていることを知った。それはとても心強くもあり、同時に、自分たちテレビに何ができるかを考え続ける機会にもなった。DV問題の本質や当事者へのメッセージを、どのように映像で伝えるか。そこはまだ模索段階だが、全く不可能ではないと確信を持つことができた。

ローカル局の場合、通常、ニュース企画は企画から放送まで短時間で仕上げる。だが、今回は時間をかけて関係者と相談しながら作り上げることで、視聴者に誤解を与えないという最低ラインを守ることは出来たと思う。このような報道を地道に続けることで、当事者以外のあらゆる人に問題意識を持ってもらうチャンスを広げるはずだと、私は信じていた。

「DV防止法」見直しに向け

全国女性シェルターネットが要望書

二〇〇二年六月二十九日・三十日、「全国シェルターシンポジウム大阪2002」が、開催されました。

これに先立って「DV防止法」が四月から全面施行となり、全国女性暴力駆け込みシェルター・ネットワークキング（正式名称）がこの法律成立に果たした役割が再確認されました。同時に、支援活動においてこの法律をどう活かすのか話し合い、さらに、三年後の見直しに向けて検討の第一歩を踏み出しました。

全国シェルターネットの日々の切実な体験に基づいて、DV予防の推進と、支援グループの確立及びネットワークキングを求めたこの要望書は、シンポジウム当日に採択されました。国および地方自治体への要望であると同時に今後の支援活動の指針ともなるものです。

「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」の実効性ある運用とネットワーク及び自立支援システムの確立を求める要望書

前文

二〇〇二年四月、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が全面施行されました。この法律によつて保護命令が発せられ、違反者には刑罰をもって処せられるようになりました。また、都道府県、司法、警察の責務がより明確となり、その動きが注目されています。

国の男女共同参画社会基本法、地方自治体による条例にも「女性への暴力の根絶」が政策の柱になりつつあります。しかし、日本における女性の人権への取り組みはまだ発展途上といわざるを得ません。とりわけ被害女性が自尊心を

持つて社会生活が送れるよう、ネットワークおよび自立支援システムの確立が急務です。

私たちは、暴力被害にあった女性と子どもに対する支援活動を通して、この問題への適切な対策の必要性を提案してきた民間団体の連合体です。

三年後の法律見直しに向けて、女性と子どもが安心して暮らせる社会を実現するために、本大会をもって国及び地方自治体に対し、下記の要請をいたします。

Ⅰ. DVの予防

《DVは社会問題であることから、国、各自治体を中心とした社会全体がその予防と理解に努めること》

(1) 啓発

- ・各自治体は広報やマスメディアを使って正しいDVの啓発活動を積極的に行うこと

- ・警察はDVの存在をはっきり示した上で事件報道発表を行うこと

(2) 教育

- ・乳幼児から高齢者まであらゆる教育・研修において人権教育を基本に据えたDV防止教育を実施すること

- ・教育現場における教職員による暴力を禁止すること

Ⅱ. 支援ネットワークの確立

《民間シェルターなどNGOの豊かな実績を尊重し、対等な関係を構築すること》

(1) 国レベルの連携

- ・関連省庁は連携し総合的なDV施策を実施すること。そのための大幅な予算措置を講ずること

(2) 行政と民間のネットワーク

- ・行政の責任でNGOを含めたDV対策連絡会議を持つなど、各自治体レベルで総合的なDV対策を講ずること

(3) 広域ネットワークの確立

- ・配偶者暴力相談支援センターは、良質の支援が迅速に受けられるよう、広域ネットワークシステムの中核を担いコーディネート機能を備えること

Ⅲ. 支援システムの確立

《いつでも誰でもどこからでも良質な支援が受けられ、被害者が自尊心を持って社会生活が送れるよう支援システム

の確立をはかること》

- ・国は総合的な支援システムを確立し、実施すること
- ・都道府県は配偶者暴力相談支援センター機能を果たす独立した施設を複数設置し、自立支援システムを含めた緊急一時保護所の拡充をすること
- ・自治体は関係機関にDV専門員を配置し、被害女性に必要な情報を安全に提供すること
- ・DV関連専門職員への実務的運用マニュアルの周知、および専門領域ごとの研修を徹底すること
- ・DV関連専門職員への教育研修の実施にあたっては、民間シエルターなどNGOに蓄積された知識や経験を評価し、積極的に活用すること
- ・被害女性が保護を求めた時点から、迅速かつ公正に司法支援に関わるサービスが始動すること
- ・警察は被害女性や子ども、家族、支援者の安全確保と情報提供の徹底に努めること

Ⅳ・関連諸施策の見直し

《被害女性が安全で健康に暮らせるよう、必要な社会基盤の整備を行うこと》

- ・離婚が成立していなくても関連諸施策が利用できるよう見直しを行うこと
- ・関連窓口担当職員のDV研修を徹底すること
- ・母子生活支援施設など社会福祉施設や公営住宅への広域における優先入所を迅速に行うこと
- ・母子生活支援施設、婦人保護施設など社会福祉施設の最低基準（施設整備・職員配置など）の改善を早急に行うこと
- ・就労の確保や生活保護制度の適用など経済的支援体制を確立すること
- ・保育所への優先入所の体制を整えること
- ・生活資金の貸付や児童扶養手当など社会福祉制度の改善をはかること
- ・被害女性や子どもの心的外傷からの回復のための心理的支援を含む医療体制を確立すること
- ・健康保険や年金など世帯単位のシステムを見直し、個人単位のシステムに変更すること
- ・離婚調停や裁判が、迅速かつ適切、安全に行われるよう司法システムを見直すこと
- ・法律扶助制度の見直しを行うこと
- ・養育費の支払い制度の見直しを行うこと

- ・ 個人情報（住民票、年金手帳、健康保険証、運転免許証、学籍など）秘匿システムを整備すること

- ・ 在留資格に関わらず外国人であることを理由に被害女性が不利益を被ることがないよう支援システムを確立すること

- ・ 精神保健福祉制度や関連機関でのDV被害女性支援システムを確立すること

- ・ 障害者や高齢者であることを理由に被害女性が不利益を被ることがないよう、サポートネットワークを確立すること

V. あらゆる暴力の根絶に向けての取り組み

《当事者の声を尊重した暴力根絶に向けての取り組みをすること》

- （１）三年後の「DV防止法」見直しに向けて

- ・ 三年後の見直しに向けて、評価、分析のための資料を蓄積し、記録様式を関係機関の間で統一すること

- ・ 法律の不備を改善し実効性を確保するための検討委員会を設置し、民間シェルターなどの参加を位置づけ、被害女性の声を反映させること

（２）暴力のないまちづくり

- ・ 各自治体で「男女平等」条例を積極的に制定し、その中にDV防止対策の条項を必ず盛り込み、DV根絶の施策を実施すること

VI. 民間団体への支援

《「DV防止法」第二六条にもとづく民間団体への財政措置を早急に実現させること》

- ・ 民間シェルターやDV関連NGOの維持費、人件費を含む運営費を支援すること

- ・ 相談活動からシェルター自立後のフォローアップまでの支援活動全体に対する必要経費を支援すること

- ・ シェルターを新たに立ち上げる際の諸経費について支援すること

- ・ シェルター利用者や支援者の安全をはかるため（警備員配置、セキュリティシステム、保険システムなど）の財政支援を行うこと

- ・ 支援者の心身の安全保障とセルフケアプログラムの確立およびそのための財政措置をとること

◇◇◇ お役立ち情報 ◇◇◇

(1)配偶者暴力相談支援センター

相談専用の場合がある場合には相談電話番号を、ない場合は代表番号を載せています。
施設によって相談受付時間等が異なりますので、各施設にお問い合わせください。

都道府県名	施設名称	相談電話
北海道 青森県	北海道立女性相談援助センター	011-666-9955
	青森県女性相談所	017-781-2000
		DVホットライン
		0120-87-3081
	青森県男女共同参画センター「アビオあおもり」	017-732-1022
	青森県東地方健康福祉こどもセンター福祉部	017-734-9952
	青森県中南地方健康福祉こどもセンター福祉部	0172-35-1622
	青森県三戸地方健康福祉こどもセンター福祉部	0178-27-4435
	青森県西北地方健康福祉こどもセンター福祉部	0173-35-2156
	青森県下北地方健康福祉こどもセンター福祉部	0175-22-2296
	青森県上北地方健康福祉こどもセンター福祉部	0176-62-2145
	岩手県福祉総合相談センター	019-629-9608～9610
		休日夜間 652-4152
宮城県 秋田県	宮城県婦人相談所	022-224-1498
	秋田県女性相談所	018-835-9052
	秋田県大館鹿角健康福祉センター	0186-52-3951
	秋田県鷹巣阿仁健康福祉センター	0186-62-1275
	秋田県能代山本健康福祉センター	0185-52-5105
	秋田県秋田中央健康福祉センター	018-855-5171
	秋田県本荘由利健康福祉センター	0184-22-5434
	秋田県大曲仙北健康福祉センター	0187-62-5355
	秋田県横手平鹿健康福祉センター	0182-32-3294
	秋田県湯沢雄勝健康福祉センター	0183-73-6100
	秋田県男女共同参画センター	018-836-7846
	山形県婦人相談所	023-642-2340
	福島県婦人相談所	024-522-1010
	福島県男女共生センター「女と男の未来館」	0243-23-8320
山形県 福島県	福島県県北保健福祉事務所	024-534-4155
	福島県県中保健福祉事務所	0248-75-7809
	福島県県南保健福祉事務所	0248-23-1538
	福島県会津保健福祉事務所	0242-29-5278
	福島県南会津保健福祉事務所	0241-63-0305
	福島県相双保健福祉事務所	0244-26-1134
	茨城県婦人相談所	029-221-4166
	栃木県婦人相談所	028-622-8644
	群馬県女性相談所	027-261-7838
	埼玉県婦人相談センター(DV相談室)	048-600-6060
	千葉県女性サポートセンター	043-302-1015
	千葉県女性センター	04-7140-8605
	東京都ウィメンズブラザ	03-5467-2455
	東京都女性相談センター	03-5261-3110
神奈川県	神奈川県立婦人相談所	045-313-0745
	神奈川県立かながわ女性センター	0466-27-9799
	新潟県女性福祉相談所	025-382-4152
新潟県		

都道府県名	施設名称	相談電話
富山県	富山県女性相談センター	076-421-6252
石川県	石川県女性相談支援センター	076-221-8740
		076-233-3741
福井県	福井県生活学習館「ユー・アイ ふくい」	0776-41-7111～7112
	福井県総合福祉相談所	0776-24-6261
山梨県	山梨県女性相談所	055-254-8635
長野県	長野県婦人相談所	026-235-5710
岐阜県	岐阜県女性相談センター	058-274-7377
静岡県	静岡県女性相談センター	054-286-9217
愛知県	愛知県女性相談センター	052-913-3300
三重県	三重県女性相談所	059-231-5600
滋賀県	滋賀県中央子ども家庭相談センター	077-564-7867
	滋賀県彦根子ども家庭相談センター	0749-24-3741
	滋賀県立男女共同参画センター	0748-37-8739
京都府	京都府婦人相談所	075-441-7590
大阪府	大阪府女性相談センター	06-6725-8511
	大阪府立女性総合センター「ドーンセンター」	06-6946-7890
	大阪府中央子ども家庭センター	072-828-0277
	大阪府池田子ども家庭センター	0727-51-3012
	大阪府吹田子ども家庭センター	06-6380-0049
	大阪府東大阪子ども家庭センター	06-6721-2077
	大阪府堺子ども家庭センター	072-281-5306
	大阪府富田林子ども家庭センター	0721-25-2065
	大阪府岸和田子ども家庭センター	0724-41-7794
兵庫県	兵庫県立女性相談センター	078-732-7700
奈良県	奈良県中央こども家庭相談センター	0742-22-4083
和歌山県	和歌山県女性相談所	073-445-0793
鳥取県	鳥取県婦人相談所	0857-27-8630
島根県	島根県女性相談センター	0854-84-5661
岡山県	岡山県女性相談所	086-243-0022
	岡山県男女共同参画推進センター「ウイズセンター」	086-235-3310
広島県	広島県立婦人相談所	082-255-8801
山口県	山口県男女共同参画相談センター	083-901-1122
徳島県	徳島県女性支援センター	088-652-5503
		088-623-8110
香川県	香川県子ども女性相談センター	087-835-3211
愛媛県	愛媛県婦人相談所	089-941-3490
	愛媛県女性総合センター	089-926-1644
高知県	高知県女性相談所	088-822-5520
福岡県	福岡県女性相談所	092-711-9874
佐賀県	佐賀県婦人相談所	0952-26-1212
	佐賀県立女性センター	0952-26-0018
長崎県	長崎県婦人相談所	095-846-0560
熊本県	熊本県婦人相談所	096-381-4411
大分県	大分県婦人相談所	097-544-3900
宮崎県	宮崎県婦人相談所	0985-22-3858
鹿児島県	鹿児島県婦人相談所	099-222-1467
沖縄県	沖縄県女性相談所	098-854-1172

(2) 精神保健福祉センター

都道府県名	施設名称	電話番号
北海道	北海道立精神保健福祉センター	011-864-7121
青森県	青森県立精神保健福祉センター	017-787-3951
岩手県	岩手県精神保健福祉センター	019-629-9617
宮城県	宮城県精神保健福祉センター	0229-23-0021
秋田県	秋田県精神保健福祉センター	018-892-3773
山形県	山形県精神保健福祉センター	023-624-1217
福島県	福島県精神保健福祉センター	024-535-3556
茨城県	茨城県精神保健福祉センター	029-243-2870
栃木県	栃木県精神保健福祉センター	028-673-8785
群馬県	群馬県こころの健康センター	027-263-1166
埼玉県	埼玉県立精神保健総合センター	048-723-1111
千葉県	千葉県精神保健福祉センター	043-263-3891
東京都	東京都立精神保健福祉センター	03-3842-0948
	東京都立中部総合精神保健福祉センター	03-3302-7711
	東京都立多摩総合精神保健福祉センター	042-376-1111
神奈川県	神奈川県精神保健福祉センター	045-821-8822
新潟県	新潟県精神保健福祉センター	025-231-6111
富山県	富山県心の健康センター	076-428-1511
石川県	石川県こころの健康センター	076-238-5761
福井県	福井県精神保健福祉センター	0776-53-6767
山梨県	山梨県精神保健福祉センター	055-254-8644
長野県	長野県精神保健福祉センター	026-227-1810
岐阜県	岐阜県精神保健福祉センター	058-273-1111
静岡県	静岡県精神保健福祉センター	054-286-9245
愛知県	愛知県精神保健福祉センター	052-962-5377
三重県	三重県精神保健福祉センター	059-255-2151
滋賀県	滋賀県立精神保健総合センター	077-567-5001
京都府	京都府立精神保健福祉総合センター	075-641-1810
大阪府	大阪府精神保健福祉センター	06-6691-2811
兵庫県	兵庫県精神保健福祉センター	078-511-6581
奈良県	奈良県精神保健福祉センター	0744-43-3131
和歌山県	和歌山県精神保健福祉センター	073-435-5194
鳥取県	鳥取県精神保健福祉センター	0857-21-3031
島根県	島根県精神保健福祉センター	0852-21-2885
岡山県	岡山県精神保健福祉センター	086-272-8835
広島県	広島県立総合精神保健福祉センター	082-884-1051
山口県	山口県精神保健福祉センター	0836-58-3480
徳島県	徳島県精神保健福祉センター	088-625-0610
香川県	香川県精神保健福祉センター	087-831-3151
愛媛県	愛媛県精神保健福祉センター	089-921-3880
高知県	高知県精神保健福祉センター	088-823-8609
福岡県	福岡県精神保健福祉センター	092-582-7500
佐賀県	佐賀県精神保健福祉センター	0952-73-5060
長崎県	長崎県精神保健福祉センター	0957-54-9124
熊本県	熊本県精神保健福祉センター	096-359-6401
大分県	大分県精神保健福祉センター	097-541-6290
宮崎県	宮崎県精神保健福祉センター	0985-27-5663
鹿児島県	鹿児島県精神保健福祉センター	099-255-0617
沖縄県	沖縄県立総合精神保健福祉センター	098-888-1443

(3) 婦人保護施設

売春防止法により設置されている婦人保護施設が、平成14年4月からは「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」により、暴力被害者の保護ができるようになりました。

婦人保護施設への入所は、就労及び生活に関する指導・援助を行うことが暴力被害女性の保護のため必要であると認められる場合に、婦人相談所長が決定します（一時保護ではなく、長期の利用が可能です）。

都道府県名：施設名	都道府県名：施設名
北海道：北海道立女性相談援助センター	三重県：あかつき寮
青森県：なし	滋賀県：滋賀県立女性福祉相談センター
岩手県：岩手県同胞援護会 桐の苑	京都府：京都府婦人相談所
宮城県：宮城野婦人寮	大阪府：大阪府立女性自立支援センター あゆみ寮
秋田県：秋田県陽光園	〃 よしみ寮
山形県：金谷寮	〃 のぞみ寮
福島県：福島県しゃくなげ寮	兵庫県：神戸婦人寮
茨城県：茨城県立若葉寮	姫路婦人寮
栃木県：栃木県白百合寮	奈良県：なし
群馬県：三山寮	和歌山県：なぐさホーム
埼玉県：埼玉県婦人相談センター	鳥取県：なし
千葉県：望みの門学園	島根県：なし
かにた婦人の村	岡山県：岡山県立総合社会福祉センター
東京都：救世軍婦人寮	広島県：呉慈愛寮
東京都新生寮	山口県：山口県大内寮
慈愛寮	徳島県：しらぎく寮
いずみ寮	香川県：香川県玉藻寮
いこいの家	愛媛県：愛媛県立さつき寮
神奈川県：さつき寮	高知県：高知女性ホーム
新潟県：新潟県あかしや寮	福岡県：福岡婦人寮
富山県：なし	嘉穂婦人寮
石川県：白百合寮	佐賀県：佐賀婦人寮
福井県：福井県若草寮	長崎県：長崎県立清和寮
山梨県：山梨県女性相談所	熊本県：なし
長野県：ときわぎ寮	大分県：大分県婦人寮暁鐘寮
岐阜県：岐阜県立千草寮	宮崎県：宮崎県立きりしま寮
静岡県：清流荘	鹿児島県：錦江寮
愛知県：愛知県立白菊荘	沖縄県：うるま婦人寮
愛知県立成願荘	合計 51か所
	(平成13年1月現在)

(4) 民間電話相談窓口

電話で相談ができる民間団体・グループです。シェルターの有無や、面接相談その他のサポートの詳細は、それぞれで異なります。カウンセリングは受け付け時間(有料)を掲載しました。

都道府県	名前	電話番号	相談時間	備考
北海道	女のスペース・おん	011-622-7240	月～金 10～17時	予約相談電話
	ウィメンズネット函館	0138-33-2110	月～金 10～16時	
	ウィメンズネット旭川	0166-24-1388	月 19～21時 火～金 13～16時	
	ネット・マサカーネ・いぶり	0143-23-4443 070-5287-5206	月～金 10～16時	
	駆け込みシェルター十勝	0155-26-3141	月～金 14～16時	祭日は休み
	ウィメンズきたみ	0157-24-7293 090-9522-7587	月～水 13～16時	
青森	ウィメンズ・ネット青森	017-734-4705	木 10～16時	
宮城	ハーティ仙台(仙台女性への暴力防止センター)	022-225-8801	火・木 13時半～16時半 第1・3火 18時半～21時	
千葉	FAHこすもす	0438-53-5105	10～17時	
	かしわ・ふくろうの家	04-7132-0711	月・木 12～15時	
	のだフレンドシップ青い鳥	04-7125-7106	随時	
埼玉	埼玉・おんなのシェルター	090-2676-4206 090-2421-0907 090-9014-0915	毎日	
栃木	ウィメンズハウスとちぎ	028-621-9993	月～金 10～15時	
東京	FTCシェルター	03-5608-6325	月～金 10～16時	
	カパティラン(日本聖公会東京教区)	03-3432-3055	月～金 11～16時	
	AWS女性シェルター	03-5338-3081	月～金 10～16時	祭日は休み
	女性の家 HELP	03-3368-8855	月～土 10～17時	タイ・タガログ・日本・英語

都道府県	名前	電話番号	相談時間	備考
神奈川	かながわ女のスペース みずら	045-451-0740	月～金 14～17時・19～21時、土 14～21時、日 17～21時	
	女性の家サーラー	045-901-3527	月～金 10～17時	タイ・スペイン・日本・英語・タガログ(火のみ)
	女の Hotline・湘南	0467-58-1846	火 13～17時	
長野	フェミニストカウンセリング松本	0263-32-4877	月水金 13時半～16時半 火・木 10～16時半	カウンセリング(有料) 受付時間
新潟	女のスペース・にいがた	025-231-3012	火木土 14～17時 月水金 19～21時	
愛知	ウィメンズカウンセリング名古屋YWCA	052-961-5110	月・金 10～17時 水 10～20時	カウンセリング(有料) 受付時間
	かけこみ女性センターあいち	052-853-4479	月 13～16時	
	フェミニストサポートセンター東海	052-979-0355	毎月10・20日 15～20時 30日 10～15時	女性の「ひとりだち」への電話相談
富山	グループ女網	076-491-1081	月 10～15時	
石川	女のスペースいしかわ	076-222-8868	第2・4月・土 10～12時	
大阪	スペース えんじょ	0726-36-0030	随時	シェルター利用のみ
	大阪心のサポートセンター	06-6944-8345	月～土 10～17時	面接相談受付時間
	女のかけこみ寺・生野学園	06-6731-4020	月～金 12～17時	
	暴力防止情報スペース・APIS	06-6992-8012	月・水・金 10～16時	
兵庫	フェミニストカウンセリング堺	072-224-0663	月～土 10～17時	カウンセリング(有料) 受付時間
	W・S ひょうご	078-251-9901	木 12～17時	
	ウィメンズ・ネットこうべ	078-731-0324	月・金 10～16時	

都道府県	名前	電話番号	相談時間	備考
京都	京都YWCA・APT	075-451-6522	月 13～16時 木 15～18時	月 タガログ・タイ・英語 木 タガログ・タイ・英語・中国
	ドメスティック・バイオレンス・サポーターズ・ネット(D. V. S. N)	090-5254-4387	随時	ホットライン
	ウィメンズカウンセリング京都	075-222-2133	月～土 10～17時	カウンセリング(有料) 受付時間
広島	ネットワーク「虹」	0824-22-6884	月・火・木 10～15時	
	ホッとる一む ふくやま	084-923-9638 084-926-7440	第2・4日 10～16時 第1・3火 11～14時	
	シェルターin広島ネット	070-5670-6145	随時	
山口	山口女性サポートネットワーク	0836-37-5611	月・火・水 13～16時	祭日は休み
鳥取	DV被害者支援ネットワーク鳥取	090-3880-5104	随時	
	みもざの会	090-8064-1754	随時	
徳島	ウィメンズカウンセリング徳島	088-633-5566	月～金 11～19時	
福岡	北九州シェルター	090-3986-5415	月～金 9～12時	
	アジア女性センター	092-513-7333	月～金 9～17時	
	ぐるーぶNo!セクシュアル・ハラスメント(No!SH)	092-725-7497	水 19～21時	女性への暴力ホットライン
	女性への暴力被害者サポートの会	0948-22-7944	火 19～21時半	
	女性と健康北九州ネットワーク	093-541-5813	月 18～21時	祭日は休み
佐賀	被害者支援ネットワーク佐賀VOISS	0952-41-2535	月～金 10～17時 (水のみ13～17時)	
宮崎	ハートスペースM	0985-29-2545	月・土 10～17時	
鹿児島	憩いの家 あがべ	099-261-8696	水 18～21時	

(5) ブックリスト

最近発売された書籍・雑誌(価格は税別)

『シエルター・女たちの危機』 かながわ・女のスペース みずら編 明石書店 (2002) 1800円

『ドメスティック・バイオレンス 愛が暴力に変わるとき』 森田ゆり 小学館 (2001) 1500円

『Domestic Violence Child Abuse』 DVと虐待 「家族の暴力」に援助者ができること 信田さよ子 医学書院 (2002) 1800円

季刊『アディクションと家族 第18巻3号特集 DV防止法をめぐって』 家族機能研究所 (2002) 1600円

『ドメスティック・バイオレンス』 戒能民江 不磨書房 (2002) 3200円

『ドメスティック・バイオレンス 夫婦ゲ

ンカが犯罪になるとき』 監修・戒能民江 主婦と生活社 (2002) 950円

『使いこなそう! ドメスティック・バイオレンス防止法』 福島瑞穂 明石書店 (2001) 1800円

『詳解DV防止法』 監修南野知恵子・小宮山洋子他 ぎょうせい (2001) 3048円

『口語で読むDV防止法活用ハンドブック』 監修長谷川京子 日本DV防止・情報センター編 朱鷺書房 (2002) 2400円

『Q&A ドメスティック・バイオレンス法 児童虐待防止法解説』 山田秀雄編著 三省堂 (2001) 1800円

『DV関係対策対応マニュアル』 千葉県男女共同参画課 (六一ページ参照)

『ドメスティック・バイオレンス 支援者基礎講座』 「主張するTシャツ」を集

める会 (2002) 1000円+送料

(〒一六〇〇六七 東京都新宿区富久町八二七 ニューライフ新宿東三〇五 ユキ内) FAX 03-5919-3447

『女性情報ライブラリー Vol.1 ドメスティック・バイオレンス』 バド・ウイメンズ・オフィス (2002) 1000円

『兵庫発 女の伝言板 パート2 女性のためのお助け情報二〇〇件』 ウイメンズネット・こうべ 1200円 問い合わせ先 078-731-0324

『女たちの便利帳4』 発行: ジョジョ企画発売: 教育史料出版会 (2002) 2800円

『サバイバーズハンドブック改訂版』 性暴力を許さない女の会編 新水社 (2002) 1400円

『治療相談先・自助グループ全ガイド「アディクション」こんなことで悩んでいませんか?』 ASK (2002) 3200円

ら室 ご書 あ読

『モラル・ハラスメント

人を傷つけずにはいられない』

マリー＝フランス・イルゴイエヌ

(1999年 紀伊国屋書店刊)

DVやいじめの被害者と加害者の関係に肉薄した本です。この本の中の、家庭での夫婦間のモラル・ハラスメントというのは、DVと考えていいです。

DVを知ろうとした人がまず踏くのは、肉体的暴力に感情移入するのがつらいということでしょう。それで、精神的な暴

力はどうしても「軽く」見えてしまします。

しかし、精神的な暴力のないDVは考えにくいし、精神的な暴力が長く被害者を苦しめている現状から、精神的暴力の実態を知っておくことは大事です。

精神科医である著者は犯罪被害者学を学んだのをきっかけにモラル・ハラスメントの研究にたずさわります。著者は加害者を「自己愛的な変質者」と定義し、精神の吸血鬼と呼んでいます。そして被害者は「素直な性格だからこそ」選ばれたといっています。

あなたの近くにいる温和そうな加害者の仮面にだまされないために、被害者を傷つけず、援助するためにこの本を推奨します。

ただし、被害者自身が読む時、この気づきにはとてもつらいものがあります。後半には被害者の救済について書いてあるので、ゆっくり読んでください。

(いなば あいこ)

(B6判332ページ 2200円＋税)

『ささいなことでカッ!となる
男たち』

トーマス・ハービン

(2001年 廣済堂出版刊)

DVの加害者と話す時、肝心なことは、加害者に騙されないことと、加害者の心を閉じさせないことです。騙されないためには、前記の本が役に立ちますが、加害者の心を閉じさせないためにはこの本が役に立つかもしれません。「ささいなことでもカッ!」となっていた著者は離婚の危機に際して自らの「怒り」癖に気づきます。そしてそれを克服した彼は、かつての自分のように「怒り」をコントロールできずに悩む男たちに与える手引書としてこの本を書きます。

怒りは悪ではないが、怒りの表現が不適切だと実りのない人生を歩くからと、「怒らない自分になるためのステップ」を紹介します。また、被害に遭っている女性たちにも「あなたに責任はない」

「彼を変えることはできない」といつています。

読み物として面白く書かれています。加害者にも被害者にも優しい本です。

(いなば あいこ)

(B6判223ページ 1600円+税)

『話を、聞いてください』

少年犯罪被害当事者手記集

少年犯罪被害当事者の会「著」

(2002年 サンマーク出版刊)

この本は、私の住む町、富山県上市町で起こった少年達による集団暴力事件の被害者、**黄山(わうざん)顕成君**(当時十五歳)の両親から勧められて手に取った。顕成君の事件は載っていないが、読み進むうちに「どの事件も非常に似通っている、被害者の立場が何故こうも軽んじられるのであろうか」と驚きを禁じ得なかった。

この本には、十三人の少年の事件が取り上げられており、終生癒されることのない悲しみを背負って生きる親たちの思

いが綴られている。顕成君の事件も、残念なことに同じような経過をたどり、両親の悲しみは深まるばかりである。

平成十三年六月二十七日夜、顕成君は、夜間、人気の少ない田園地帯の小学校校庭で、顔見知りの十三名の少年たちに取り囲まれ、七名の手によって、殴る、蹴る、塩ビパイプで打ちつけるなど二時間余にわたる暴行を受けた。少年たちは、集団で暴力を加えていながら「二人の喧嘩」という偽装工作を行ない、死に顔している顕成君を放置したまま立ち去った。翌々朝の新聞も二人の喧嘩と報道した。「暴行をする原因など何もなかった。ただ先輩にカッコいいところを見せたかっただけ、相手は誰でもよかった」とは加害少年の弁である。

人口二万三千人の田舎町では地縁血縁が強く、住民は加害少年らの家族とは少なからぬ繋がりがある。一方被害者はこの町に移り住んで十年余りの在日韓国人の一家である。町民の大方は加害者の側に立ち、事件は最初から歪曲された噂と

して広がった。

教育委員会、行政側には被害者への配慮はほとんどみられず、PTA、母親クラブなども、これほど重大な事件に対して一切触れようとはしなかった。あまりのことに顕成君の両親は、この事実を町民に知ってもらいたい、今後の子どもたちの教育問題として考えて欲しいと訴えたが、PTAも、各地区の代表も受け入れようとはしなかった。

両親は、悲しみにくれないながらも、いずれ矯正施設で教育を受けた後、地域に戻ってくる加害少年たちが冷たい扱いを受けないようしたいとも考えておられるのだが……。

加害少年の将来への配慮は大切なことではあるが、他人の痛みをわかるうともせず、被害者に冷たい世間の風潮を心から嘆く。被害当事者の声を聴き、わかってうとすることは、加害者教育の始まりではないだろうか。この本を、多くの方が手に読んでいただきたいと切に願う。

(高木 栄子)

(B6判254ページ 1400円+税)

「シャキット富山35」という名前を聞いたことがあるだろうか。これは「男女共同参画社会基本法ネットワークin富山」の略称である。「35」は富山県内の市町村数だ。一九九九年に男女共同参画社会基本法が制定された

5)の代表として、日々、県内外の女性たちをつなぎ、女性議員を増やそうと、女たちの動きを作り出している。まさに、富山の女たちの活動発信人であり、女性議員の力強い応援団だ。

山下さんが、初めて女性を議員にし

あごらめいと

政策決定に女性を！

山下清子さん



この選挙や、その後の議員活動を支える立場にあった山下さんは、とにかく動き出したが、すべてが初めての経験で自分たちがいかに何も知らなかったかに気づいた。そこで、女性史や女性学、女性政策などを学びながら、その後、選挙にかかわり続け、何人かの候補者とともに、落選、当選を経験してきた。その中で、組織の一員として動くのではなく、個人として意見を持つことの大切さを知り、また、女性が差別されている現状に改めて気づかされた。「知らないということ、何も知らないということは差別する側にいるのですよ」という、もろさわようこさんの言葉は忘れられない言葉となった。

のをきっかけに、富山県で男女共同参画社会の実現に向けて活動しようとして、山下清子さんたちが会を立ち上げた。山下さんは、今、女性議員を増やすためのバックアップスクール「とやま女の政治塾」(主催シャキット富山3

ようと選挙にかかわったのは一九九一年の統一地方選。地区の婦人会副会長だったので、否応なく選挙に巻き込まれ、「女性の政治参画」のため、手探り状態で会としての選挙運動を行い、高岡市初の女性議員誕生の一端を担った。

山下さんは、個人として、女性政策を推進することに関わり続けていこうと思っている。つまり、女性が差別されている現状に気づき、怒り、差別をなくすために発言し行動していくことを、粘り強く続けていこうと。

それには、なにより、女性たち一人ひとりが、育ちあい、自立し、仲間を増やして草の根の活動を続けることが大切だと考えている。

富山県女性総合センター・サンフォルテの建設に際しては、「女性センターを考える会」（以下「考える会」）が発足し（一九九五年）、センターを利用する個人や草の根のグループとして女性たちが担当課に意見を届けた。これは、保守的な富山県においては画期的な出来事だった。「考える会」の活動を通して、県内の女性たちと出会った山下さんは、その後もサンフォルテを中心に個人発信の活動を続けている。

一九九六年に立ち上げた「とやま女性政策研究会」では、『富山県の女性政策と女性の現状』という報告書を作成したところ、多くの反響があり、全国各地の女性たちとのネットワークが始まった。「フエミニスト議員連盟」や「北京JAC」に参加したり、三井マ

リ子さんたちと「ノルウェー男女平等政治スタディーツアー」に出かけたりと、県外の多くの人たちとも活動をもにすようになった。

一方、行政サイドの女性政策・男女共同参画政策は、県の条例や各自治体の行動計画等、徐々に進められている。これらについても山下さんは、高岡市・富山県そして政府へと、いろいろな市民グループを通じて、女性たちの声を届け続けている。

「あごら」との出会い、一九九八年に斎藤千代さんにお会いしてからである。斎藤さんたちの努力と苦勞を知り、少しでも協力したいと思い、「あごら」メイトになり、「248号」を富山で担当することになった。そこで、それまでの『あごら』を読んでみて強い感銘を受けたそうだ。

二〇〇二年七月から十一月まで五回にわたって開かれた「とやま女の政治塾」は、選挙に立候補する人やそれを

支える人を応援するためであると同時に、今まで政治にあまり関心の無かった人に、日々の暮らしに直結する政治に対して自分がどう考え、何ができるかを知ってもらうためである。保守的な考え方が支配的な富山では、この女性たちの活動は、なかなか理解されにくい。女性議員の数も少ない（女性県議は一人、女性議員ゼロの議会は十四自治体）。

そんな現状だからこそ、女性議員を増やすだけではなく、女性たち一人ひとりが、個人としての意見をしっかりと持ち、政治に関心を持つていくことが必要だと考えている。「住基ネットや市町村合併など、次々と、男たちを中心に決まっています。女たちも、黙っているわけにはいきません。富山でもがんばります。全国の皆さんも、いっしょにやっつけていきましょう」と山下さんは呼びかけている。

（おおつのりこ）

語りかけたいあなたへ 48

大里知子

鹿角市制三十周年

ちょうど沖繩が本土に返還された一九七二年に、私が住む花輪も近隣の町村との合併により、鹿角市となった。

今年は、鹿角市制三十周年ということで、いろいろな記念の催しものが行われている。NHKの「のど自慢」が六月に生放送され、民放の「お宝鑑定団」なども来るそうで、なかなか賑やかなものである。

「のど自慢」の出場者は、いくら鹿角市から生中継といっても、県内の市町村からの「我こそは」という、ノドに自信のある人たちが多く、地元鹿角市の人の出場者が少なかったようで、ちよつと残念な気がした。それでも、私の知っている人も二人ばかり出て、カネは惜しくもふたつだったけれど、十分たのしむことができた。

私自身、三十年前は何をしていたかというところ、一九七一年の秋に、初めての随筆集『アテナノナイテガミ』を出版し、それなりの反響があつて、各新聞や女性週刊誌の取材を受けなければならぬ立場で、それまで一人静かに暮らしてきた私にはたいへん張りのある忙しい日々を送つて

いた。

取材にみえた記者の方々は、みなさん感じが良くて、世間知らずの私などつい誘導尋問にひっかかって、話したくないことまで話したりという失敗もあった。

女性週刊誌は、読者の興味をそそるように書かなければ売れないので、書かれる本人には意に反することはかりだった。

新聞のほうが真実を書いてくれるから、よかった。

私が、一番嬉しく思ったのは一九七二年、いちばん寒さが厳しく雪の深い一月に、朝日新聞東京本社・社会部、山本健一氏が、取材にみえた時のことだった。

我が家では、朝日新聞を購読していたので、私にとって朝日新聞は子どもの頃から、馴染みぶかい新聞になっていた。

その朝日新聞に、自分の本のが載るというのは、感激そのものだった。

そして、東京へ出たら連絡をするという約束どおり、その年の五月、上京した際にお訪ねすると、朝日新聞社の旗のついた黒塗りの乗用車で、当時いちばん高かった新宿の京王プラザホテルの四七階の展望室から、東京の夜景を見せてくださった。それから三十年、年賀状を毎年欠かさずいただいている。

つい先日、新聞を見ていた姉（則子）が、『朝日の山本さんが編集委員になったのね』と自分で新聞が見られなくなった私に、見せてくれた。

三十年という歳月を経て、山本氏はどんな中年になられたのだろうか。
お会いしてみたいと、つくづく思ってしまった。

(Eメールアドレス fussen@abeam.ocn.ne.jp)

北朝鮮拉致事件に思う

東亜日報（東京特派員）

李 英伊

北朝鮮から五人の日本人が帰還してから、日本のジャーナリズムはその報道に過熱しているように見える。二十四年前、家族は「もしかしたら拉致されたのか」と思い、真偽をたずねることを政府に要求したが、一顧もされなかった。社会党（今の社民党）や共産党は、「北朝鮮がそんなことをするはずがない」と主張し続けた。

しかし拉致は現実存在していた。二十四年待ちに待った家族との再開。「絵になる」画像、「記事になる」事件。電波も紙媒体も飛びついた気持ちには、ジャーナリストの一人としてよくわかる。しかし、韓国人である私は、日本人とは少し違う目でこの事件を見ている。北朝鮮が工作船を繰り出して、罪もない日本人（その中には十三歳の少女までが含まれていた）を、頭に袋をかぶせて連れ出したのは許されることではないが、彼らにとつては、韓国戦争以来、今も続いている「戦時下」の「必要事項」だったのだ。かつての日本は「戦時下の必要事項」として、軍隊は

「従軍慰安婦」を、企業は「工員」を、堂々と朝鮮半島から拉致して、非人間的に扱った。しかもいまだに十分な謝罪をしていない。その罪の深さ、規模の大きさに比べれば、北朝鮮の日本人の拉致は微々たるものだと思える。

「決して拉致はしていない」と主張し続けてきた金正日首席が率直に事実を認め、五人を日本に送ったのは画期的なこと。怒るよりは、むしろその度量をたたえて、さらにたくさんの方を拉致致日本人の帰還を可能にするほうが上策ではないだろうか。

今回の五人は「本国帰還」ではなく、「一時的日本訪問」の条件で日本を訪れたのである。その五人を引き留めて帰さないことを「約束違反だ」と北朝鮮が怒るのは、無理もない。

しかも、新聞やテレビで見えるかぎり、報道は一日一日エスカレートしていく。「硬い表情」「温泉に入って洗脳からやっと少し解放された」など。これは、日本人が昔から何より忌み嫌っていた「恩を仇で帰す」報道ではないか。

日本政府も被拉致家族団も「強い姿勢で一步もゆずらない」大原則を建てたようだが、もしかして生きているかもしれない「死者」の生還も、これでは全く希望がなくなるのでは、と心配になる。

今日（十一月十二日）は、「死者の骨」とされた骨が、本人のものではないことがほぼ確定したと報道され、またまた「不正、不義の国・北朝鮮」のイメージを増幅している。

韓国でも九五年、九八年と大洪水が二度あり、墓地在破壊し、埋葬物も全部流れ、祖先の骨がわからなくなって大騒動になった。私たちにはその記憶が新しいので、骨がわからなくなったのは事実だろう、とすぐ納得できる。そしてこのことでまた北朝鮮のイメージが悪くなることを心

配するとともに、日本のメディアの報道が、せつかく和らぎかけた北朝鮮の人びとの心を硬化させるのではないかと、たいそう心配になる。

すぐ隣の国でありながら、韓日併合以来、韓半島の住民と日本列島の間には大きな亀裂ができた。亀裂の原因の一つには、非道なことをした日本人の側の疑心暗鬼が大きかったように思われる。関東大震災の朝鮮人虐殺は、その象徴であろう。

マスメディアは、本来、そのような虚妄を払拭するのが使命のはずである。このまま拉致報道がエスカレートすると、せつかく心を開きかけた北朝鮮も必ず硬化するだろう。その時、五人が北朝鮮に残してきた子どもの安全はどうなるか。日本のマスメディアはそれに責任を持てるのか。猛省をうながしたい。同時に、日本の市民も、事態が双方の望ましい方向で解決されるよう、声をあげてほしい。

第四回 「白井博子・地の塩賞」は松井やよりさんに

へあこら」の会員を中心に、女性運動を担ってきた名もない人びとが日本の賞勲制度に対する抗議の意味も含めてつくった「地の塩賞」。

第四回は、松井やよりさんに決まりました。松井さんが現在ご療養中のため、「感謝のつどい」の会場その他は未定です。決定次第、お知らせします。



芝信、最高裁で画期的勝利確定

東京地裁で日本で初めて男性と同じ昇格と差額賃金の支払いが認められ、東京高裁ではさらに上回る判決を得て、日本最初の画期的判決と話題になった芝信用金庫の女性差別裁判は、労働側が「最年少の女性(五二)の昇格が認められない」という点で、使用者側は「全面的不服」で、原告、被告とも控訴。その結果が注目されていた『あいら』266号「男女差別に待った!

〔芝信〕に高裁が画期的判決(参照)が、十月二十四日、最高裁で和解が成立、日本の女性労働裁判では初めての全面的勝利をかちとった。この日、原告団全員は胸に花をつけて最高裁第二法廷に出廷。梶谷 玄裁判長のもと、和解が成立した。

和解条項は、差額賃金と慰謝料を認めた二審・東京高裁判決と実質的にほぼ同じ内容で、「芝信は十二人の女性を課長職に昇格させる。現在までの差額賃金や慰謝料、弁護士費用など合計約二億二千万円を(解決金)とする」が柱。

原告としては「和解」は二番目の選択ではあるが、原告側が高

裁判決に歓喜しながらも、ただ一つ問題にしていた最年少の植松美江さんの昇格・昇進が認められたことは大きく、日本の女性労働史上の金字塔を打ち立てたことは間違いない。これ以上判決が長びくと、原告は次つぎに定年退職になるところ。和解は最良の選択だったと思われる。今回の勝利は、「裁判をしても負ける」と涙をのんできた全国の働く女性にとつて、これ以上ない贈りものとなった。いま控訴中の住友電工はじめ、各地の裁判にも、必ず良い結果となるだろう。

使用者側のあらゆる弾圧のもとで、十五年間の裁判に絶え続けた十二人の原告。肺がんの手術に耐えて、最高の訴訟指揮を続けた坂元福子弁護士には心からの感謝と祝辞を述べたい。なお、芝信金争議全面解決報告祝賀会は、来年一月十一日(土)午後二時から開かれる。会場は未定。

育休取得は女性九一・〇%、男性〇・三%

男性も育休を取得できる法制度下とはいえ、企業で働く男

性は、昇格や退職勧告等にもつながるため、実質的には取得が難しい。国家公務員の場合は、その心配はないが、人事院が発表した〇一年度の育児休業実施調査によると、育休取得者は女性が五、七、一四人（九一・〇％）に対し、男性はわずか五六人（〇・三％）にとどまった。平均取得期間も、女性七・八か月、男性三・七か月。女性の五二％が九か月以上取得している。

休業職員の業務処理のための代替措置が講じられているのは七九％。九六％が職務復帰しており、民間企業に比べると、非常に優遇されている。政府も少子化対策がらみで男子の育休取得を奨励しているのに、この状況は残念。

なお、男性育休取得者にアンケートを行なったところ、四二人（七五％）が回答。複数回答で最も多かった回答は、「子育ての大変さと喜びを実感した」（七九％）、次が「今後もできるかぎり育児を分担したい」（七二％）で、プラス評価が多かった。マイナス面は「経済的に厳しくなった」がトップで六一％。男性の育休取得を推進するためには「経済的支援の拡大が必要」が七一％となった。

配偶者特別控除廃止へ税調中間報告

首相の諮問機関、政府税制調査会（会長・石 広光）は、九月

三日、〇三年度税制改正に向けた審議の中間整理を公表、「赤字企業にも課税する外形標準課税の早期導入や、消費税の免税点大幅引き下げと並んで所得税の配偶者特別控除（最高三八万円）も「基本的に廃止する方向」と、明示した。

五女子大がアフガン女子教育を支援

津田塾大、日本女子大、東京女子大、お茶の水大、奈良女子大は、今年五月からタリバーン政権下で教育を受ける機会を制限されてきたアフガン女性の支援を続けてきたが、五大学の教員ら八人がカブールの女子教育の現場を視察。戦火でほとんどの校舎が燃え尽くされている現状に、一層の援助を強化する方針を立てた。来年一月にはアフガンの女性教員らを招き、教育制度に関する研修会を実施する。

チエチエンの女性ら、モスクワ劇場を占拠して訴え

対ロシア戦に国を挙げて力を注ぎ、九五年には一度はロシア軍を敗退させたチエチン。九七年以来ロシア軍の猛攻を受けて敗北。目撃した寺沢上人の話によると、それ以来、人口百万のチエチンは、国全体がロシアの収容所と化し、住民は連日拉致

されて、手を切られ、足を切られ、家族が取り戻そうとすると日本の相場場で言えば約数千万円の賄賂を強要される。払えないと殺して内臓を売られ、死体を取りだすためには、また数百万円のわいろの要求と、身の毛もよだつような状況に陥っていたという(『あゝら』270号 寺沢潤世「チエチエン・アフガン・米國——テロの真相を考える」)。

十月二三日のモスクワ劇場占拠は、「戦闘を中止して対話を」と求めた必死の打開策。占拠者の半数は女性で、腹に爆弾を巻いていたというが、二五日、毒ガスによってあえなく制圧され、五〇人全員が射殺された。(『あゝら』では、〈チエチエンの母子を助ける〉キャンペーンを続け、折々カンパも届けていたが、アビーに訪日した女性たちも、その中に含まれていたのだろうか。ロシアの弾圧は、これを機会にさらに激化、事態はいつそう深刻に。もともと、テロ(恐怖)と呼ばれなければならなかったのはロシアだったのではないだろうか。独立の声をあげただけでチエチエンの全国民を殺りくの対象としてきたロシア。せつばつまった劇場テロは、もちろん「してはならない」とだが、占領者たちは市民を一名も射殺しなかったと、外国のジャーナリストは伝えている。ロシアは、チエチエンは自国の領土と称しているが、それならばチエチエン人は自国民。「死んだように意識を失っていた自国民を、裁判にもかけず、頭を銃撃して即死させることが自国の法律で

も国際法でも許されるのだろうか。

松戸市議に竹野内真理さん立候補

(『あゝら』の会員・竹野内真理さんが、松戸市議選挙に急に立候補。松戸の市議選は、定員四六人に対し立候補六五人という大激戦。全くの無所属で、当選はほとんど望めない状況でしたが、女性・反原発・不戦運動をしている人びとの代表として何とか当選を！と、(『あゝら』のメンバーはじめ市民が必死の応援。残念ながら当選には届きませんでしたが、わずか一週間の運動で九三〇票を集め、供託金も選つてきました。

8・25の『あゝら』三〇年集会で、9・11の臨場感あふれる話をなさった竹野内さんは、六七年生まれ。三五歳。英語の国際通訳・翻訳者としてVOWNETなどでも活躍。昨年、ニューヨーク大学ジャーナリズム科の奨学金を得て進学した直後、9・11に直面。アメリカの報復戦争の意志に幻滅して帰国。「報復戦争反対と核施設のテロ警戒のため原発封鎖を求める要請を、ニューヨークタイムズ、ブッシュ大統領、ヒラリー上院議員、小泉首相に送ったり、仲間の主婦たちと「浜岡原発停止」の陳情書を国会議員に送るなどの活動が続けてきた方です。次の機会にまたぜひヨロシク！

集会から

〈あごら九州〉二五周年を祝う

去る十月十九日（土）、〈あごら九州〉では、博多駅近くの博多パークホテルで、二五周年記念講演とパーティーを開きました。六三人の参加者は、それぞれにその道のプロ



フェッショナル。加えてお隣の主婦も参加という幅広さ。〈あごら九州〉だからこそお祝いに駆けつけてくださったと我田引水。おそらくこの方々と一堂に会する機会はあるものではないと、あごらの底力を見た思いでした。〈あごら九州〉の顔は、この二五周年を歩き通した小島サカエさん、福田光子さん、石原豊子さんで、「選択縁の女」の求心力だったといえましょう。（写真）

講演会は、斎藤文男九大名誉教授から「なぜ有法制か〈平和と人権のゆくえ〉」と題して、一時間お話をお聞きしました。参加者から「平和と地方自治・男女共同参画が戦争への抑止力になると、うなづきながら聞いた」と感想が寄せられたのはいい手応えでした。

パーティーのあいさつで小島さんは、メンバーが〈あごら〉に依って「自主的な相互学習」「人との出会い」「行動」「ネットワークをひろげる」等々に努めてきたと、これまでの活動を振り返りながら紹介されました。

お料理がおいしかったのも満足度をアップし、参加者からの次つぎのお祝いのことばも意義深く、うれしく拝聴しました。会場に『あごら』のバックナンバーをずらりと並べて展示したのは壮観でした。

おみやげに用意したあごらの本は二冊。275号（九州

発)『ジエンター再考』と277号『有事立法は戦争協力法Ⅱ』をセットにし、『あこら』のバックナンバリストも創刊号から278号までを一覧表にしてお渡ししました。なお、前もってメッセージをいただいていた分は、プリントしてリボンをつけてお配りしました。

雑誌『あこら』の創刊三十年に遅れること五年。全国の拠点の中でも、(あこら九州)は、息長く活動を継続できたほうだろうと感謝したことでした。

(あこら九州) 森崎民子)

カレンさんが子どもたちと平和を語る

軍隊をすてた国として知られる中米・コスタリカの元大統領夫人、カレン・オルセン・デ・フィゲールスさんが来日。十一月三日、日本教育会館で、日本の子どもたちとの交流会「カレンさんと話そう」が開かれ、カレンさんは子どもたちとの対話を楽しんだ。

カレンさんを招いたのは弁護士や市民らでつくる「カレンさん招へい実行委員会」。「子ども選挙」など、子どもたちの社会参加が進んでいるコスタリカにならって、子どもたちとの対話をとおして、多くの人に平和とは、民主主義

とは何かを知ってもらおうと企画した。

カレンさんと子どもたちとの対話はずんだ。

その中で、子どもたちが「私たちはいろいろ勉強してコスタリカはすごい国だと思いました。私たち日本人も日本のやり方で平和を達成したいと思っています。平和はコスタリカのやり方だけでなくいろいろな方法で実現できると思います。カレンさんはどう思いますか」と問いかけると、カレンさんは笑顔でやさしくこう答えた。

「どこの国の人びとも自分の国をもっと美しく、最良であると考えます。それはとてもよいことだと思えます。皆さん一人ひとりが特別であるように、それぞれの人が何かすばらしいよいものを持っていることを理解しましょう。すべての真実を持つている完璧な人がどこかにいるというわけではなく、それぞれの人が真実の一部を持っているのです。私たちが自分の持っているその一部分を持って集まれば、もっと完全なものと美しい現実的な何かが得られるでしょう。なぜなら私たちが一人の時と、一緒にあった時では同じではないし、もっと連帯できるからです」

この後、カレンさんはひき続き講演し、「平和は生まれるものではなく、創造するもの。語るのではなく実践していくことが何よりも大切です」と訴えた。

(丁)

『あいら』は続刊します

思いきつて先月号発送の際、事務局責任者、斎藤千代から「おれとお願ひ」を申し上げました。『あいら』刊行の財政面を担ってきた斎藤が、「これ以上の負担はできない」ことを率直に申し上げ、皆様に存廃をおたずねしたのでした。

それから毎日、「やめないでー」のお励ましが続いています。「雑務を手伝う」「編集や校正を手伝う」「毎号を二冊とつて二倍の会費を払う」「年会費を五万円以上とする維持会員制を設けたら」「カンパするので次号に振替用紙を」等々、一通一通の温かいお言葉、毎日振り込まれるカンパ。毎日届く「新会員確保」のお知らせ。——「廃刊はできない」という結論に達しました。

「廃刊しないでー」の理由として「マス

メディアが聞かない今、敢然と、言わなければならないことを言い続ける『あいら』。もしやめれば、相手が喜ぶだけ」「国際的視野から女性問題をとらえ続けている貴重な雑誌」「単なるジェンダーでなく、差別の根源を問いつけている」「自分たちの言いたいことを発信できる」などなど。

考えてみれば、市民の側の状況がきわめて不利ないま、廃刊することの大きさは、決して小さくはないことに思い至りました。

一方、「誰かの犠牲による発行なら、やめるべき」「独婦連」のように、いさぎよく散るのも見事」「現在のレベルを維持できなくなるのなら、あえて廃刊を」といった声もありました。

また「写真やイラストをもっと増やせ」「字を大きく」「ジェンダーの記事を

もっと」など、編集部でかねがね気がつきながら金策に追われ実行できなかったことへの指摘も、たくさんありました。このようなことを一つひとつ実行していけば、もっと読みやすい、拡大しやすい『あいら』になるかもしれない。すべきことをしつとくさないで敵前逃亡はするまい、と、思い至った次第です。

三十年と十か月前、出来たばかりの創刊号を積んで郵便局に向かう途中、「この雑誌は、廃刊を目的として生まれた雑誌だ」と思ったことも思い出しました。女性差別をはじめ、あらゆる差別がなく、なる日を目指して生まれた雑誌でしたが、差別の状況はこの三十年間に目を見張るほど改善はされましたが、まだまだ深い差別の根はあり、沖縄・被差別部落・在日・障害」者等々、枚挙にいとまがありません。使命はまだ終わっていない。

次の第二世代、新しい三十年に向けて心を尽くしましょう。

思えば今までの三十年は、長い歳月でもありました。どれほどたくさんの方がお心、お力を、注ぎこんでくださったかわかりません。『あこら』は、みんなの雑誌です。

「上から下へ」ではなく「横から横への双方向の情報」「拠点、地方を大切にする持ち回り編集」など、『あこら』ならではのユニークな伝統を大切にしながらみんなで、いつそう「育ち、育てあって」いきたいと思います。休会していった（あこら可能性教室）も再開します。どんな小さなことでも結構ですから、支えてください。みんなで「元気な『あこら』」をもっと輝かせましょう。

この号は（富山）の力作です。（大阪）（東海）（鹿児島）と、次の力作が、ひしめいて待機中です。ご期待ください。

（運営委員一同）

福岡市教育委員会と福岡市校長会に「愛国心」評価の削除を求める声を集めてください！

福岡市内の小学校のほぼ半数の六九校が本年度から使っている六年生の通知表に、「国を愛する心情や日本人としての自覚」をABCの三段階で評価する項目を新たに盛り込んでいることが明らかになりました。「愛国心」が通知票の項目になり、評価されるのは、全国でも初めてのことで、十月八日に在日の市民団体「ウリ・サフェ」（われらの社会）が「同化や差別を助長する事になる」と福岡市教育委員会に削除を申し入れ、県弁護士会に人権救済を申し立てたところ、「ウリ・サフェ」のホームページに「日本から出て行け」「ケンカを売っているのか」などの千件を越すいやがらせメールが殺到。

福岡市教育委員会からの回答は、「通知表の評価項目は、学習指導要領の小学校

六年の社会科の目標の趣旨に沿って簡潔に記載したものであります」でした。この問題は日本人自身の問題であるのに、福岡市民の動きが遅く、ウリ・サフェはじめ在目の方たちを拉致問題で民族主義が高まっているなかで集中攻撃をあびさせてしまっていることを痛切に反省。十月二四日、「小学校の通知表に新設された『愛国心』『日本人の自覚』の評価項目の削除を求める市民の会」（FAX092-713-1880）を結成しました。

全国の皆様の声を福岡市教育委員会と福岡市校長会に集中してください。

福岡市教育委員会・教育長 生田征生

福岡市中央区天神一丁目八番一号

福岡市教育委員会指導部初等教育課

TEL 092（711）4619 F 4600

福岡市小学校校長会会長 中島紘昭

福岡市南区多賀2-8-1 大楠小学校

TEL 092（522）8211 F 8212

（神谷扶左子）

編集後記

◆DV特集Ⅱは〈あこら富山〉のメンバーが多く関わっている〈女網(なづな)〉とストッパDVとやまゝが担当しました。最初の編集会議は今年六月末、全国シエルター・シンポに参加するための大阪行J Rの中でした。支援活動の分野をベースに、富山という地方都市での支援活動の紹介、自分たちが知りたい情報、役立つ情報をと、内容のほとんどはここで作りました。千葉へ取材に行き、依頼した原稿も順調に集まり、掛け値なく「最前線の情報」を全国の皆様と共有することができになりました。執筆者の皆様へ感謝します。(女網)

◆全ての方が、幸せに充たされて、つつがなく暮らせる社会にしたいと思つて小さな事から実行しているのですが、すればするほど、自分の生活がかわただしく

殺伐として来るのは何故でしょう。私たちの力は弱く、することは際限なくありますが、仲間がいればきつとなんとかなるかな。(Y)

◆多くの方やグループのご協力のおかげで、お役立ち情報を作成することができました。感謝です。二年前のDV特集号(262号)発行以降、サポートグループ・機関が増えたことを、とても心強く思うとともに、シエルターがいらなくなる日を夢想しつつ、作業を終えました。(K)

◆DV防止法施行から一年、全国で多くの真摯な取り組みが進んでいることが伝えられる一冊になりそうで嬉しい。

DVが社会に与える影響を明らかにし、被害者のためのDV防止法を実現するためには、まだまだ解決しなければならぬ課題は多い。取材、編集と忙しい中で話し合えた収穫は大きい。(K)

◆原稿の一つひとつが、現場の活動をイキイキと伝えていてすばらしいです。歩

き始めたものであつても、暴力のない社会をめざす^よ勁さと優しさがあります。それは〈あこら〉マインドでもあるかな?と。編集メンバーはもちろん、編集に携

さわらなかった皆さんにも支えられ、この本が生まれました。ありがとうございます。(T)

◆〈女網〉の活動も、地域の状況やグループの体力やメンバーの個性を考へて、できることをきちんと実行することが大切だと編集作業のなかで再確認。シエルター開設をめざしてきているけれど、公的機関がその役割をきちんと果たせば、民間グループの役割は他にもいろいろあるのではと模索する昨今です。(ほ)

◆私が看護師一年生の時、二二歳の末期癌の患者さんはこう言つた。「俺はまだ死にたくない」——それが彼の最後の言葉。今がどんなに辛くても、生きることがあきらめないで。自分の力を信じ、自分を好きでいて欲しい。貴方は一人ではないのだから。(ゆう)

目次で振り返る『あいら』三〇年

(一九八五年一月～八六年十一月)

九十四号 (一九八五年二月)

〈東海〉十歳となった〈あいら東海〉 ￥350

〈巻頭言〉 十歳となった〈あいら東海〉 浅野美和子

〈あいら東海〉で出会った仲間たち

山下智恵子／森田淳子／岡部榮美香／斎藤菊代／

長縄幸子／中野節子／立木侑代／合田京子／伊藤汎美

山中洋子／長谷川友子／加藤登紀子／山田和枝

〈私の一言〉

女性運動は行政によって組織されてはならない

―「日本女性84なごや」不参加の立場から 水田珠枝

〈トビックス〉 “均等法”通過は五月?／四八団体が労基

法中間報告で申し入れ／家庭科共修“灰色答申”に／今

後の家庭科教育の在り方について ほか

〈あいらのあいら〉 93号／お年賀状から

〈事務局から〉 85年第一回運営会議は3月21日東京で ほか

〈あいら〉のアルバイター募集 ほか

〈女のつどい・女の講座〉 一月十六日～二月十七日

九十五号 (一九八五年二月)

〈山口〉 女に生まれて ￥350

離婚して感じたこと 森川恵理子

女の問題と私 田口美春

〈いま、これを問う〉

「指紋押捺拒否」が問うもの 山崎たけ

私は韓国人の障害者です! 河 留美子

〈私たちのとりくみ〉

山口県青少年保護育成条例改「正」をめぐって 森川万智子

条例改「正」反対集会で思ったこと 重兼久子

〈拠点だより〉 十年目の“節”を迎えた札幌 高橋芳恵

〈あいらのあいら〉 93号／94号／私の一言をめぐって

〈事務局から〉 運営委員会にご意見を／“ケニアの旅”

は〈あいら九州〉が事務局で

〈女のつどい・女の講座〉 二月二十三日～三月十六日

九十六号 (一九八五年三月)

〈京都〉 生命の流れを見つめて ￥350

〈生命の流れを問い直す〉

生命の流れを問い直す

命のつながり

共同生活の中から

祖母・母そして私

再々就職

親たちの「老い」に対して

〈新連載〉老人を介護して

〈拠点だより〉

〈あこら武蔵野〉山本かなえさん逝く

〈あこら京都〉七年の歩み

〈トビックス〉通してたまるか均等法・労基法改悪／6

月1・2日第二回国際フェミニスト日本会議／さようなら！かなえさん ほか

〈あこらのあこら〉 94号／95号／〈あこら〉と〈あこら

京都〉 ほか

〈事務局から〉

3・14「均等法・労基法改悪阻止」全国

大集会／あなたも私も参加しよう！世界のフェミニスト

との交流の場に／山本かなえさんへ追悼のことばを！

〈女のつどい・女の講座〉 三月十六日～四月十四日

九十七号（一九八五年四月）

〈柏〉女から男から ￥350

〈巻頭言〉 なぜだまっているんでしょう カローラ・パオ

〈女から男から〉

このイラ立ちの行く先はどこ……

「理解ある夫」とみられている夫」の弁

〈私が選んだ男〉 選んだ男はこんな男

〈男のホンネ〉「怪傑！ハウスハズバンド」哀話

〈わたしの一言〉

〈日本女性'84なごや〉をめぐって

“奇怪禁等法”と名づけたわけ

〈運営会議から〉 深刻な財政危機をどう乗り切るか…

〈拠点だより〉

男女平等と家庭教育 〈あこら札幌〉

有名小学校に入るには 〈あこら武蔵野〉 岡村多希子

〈あこら可能性教室から〉

英会話エカイワ？ 樽石知香子

ひと味ちがう英会話教室 森田英代

〈連載2〉老人を介護しながら 石川房子

〈トビックス〉 差別撤廃条約の批准、閣議決定 ほか

〈あこらのあこら〉 95号／96号 ほか

《事務局から》 大詰めの“均等法”、崩すまい女の連帯／

ナイロビ民間会議最終日は未確定のまま ほか

《女のつどい・女の講座》 四月一八日～五月十三日

九十八号（一九八五年五月）

《湘南》 男から女から ￥350

働くということ

《時代屋》の女

余裕を

組合が守ってきたもの

怪傑！ハウスハズバンド和音・不協和音

「主婦」の立場からの男女雇用平等法

「家族」

《男のホンネ》

小生思うに… ホンネとは生きること

《私が選んだ男》

「楽チンじゃー！」ばかりと言っておれない

《私とあこら》

《あこら》は私の学校

《あこら》との出会いまで、そして出会いから

《集会から》 愛知県婦人少年室主催「婦人の地位向上会議」

《北から南から》 あこら札幌／あこら大阪／あこら京都

《連載》 老人を介護して3

《資料》 外国人女性による資格外活動の現況

《トビックス》

禁等法“連休明けに成立か／鈴鹿市役

所裁判和解、上告取り下げ／女の“民教審”発足 ほか

《あこらのあこら》 《あこら鳥取》 近々誕生！／三十六

歳にして出産 ほか

《事務局から》 BOC職員募集！ ほか

《女のつどい・女の講座》

九十九号（一九八五年六月）

《旭川》『ドイツ・青ざめた母』そして私たち ￥350

《巻頭詩》 ドイツ・青ざめた母 ベルトルト・ブレヒト

《旭川》 『ドイツ・青ざめた母』そして私たち

京田初美／那須友子／林 委子／小坂啓子／田代慶子

小原典子／渡辺てるみ

《男から女から》

夫婦未完成平等曲 美森成生

怪傑！ハウスハズバンド和音・不協和音 久須美房子

《北から南から》

《あこら》と私、七年の歩み 塚崎美和子（あこら京都）／呼びかけました。集いました。私

たち四人（あこら鳥取）

〈ミニコミから〉 朝日新聞反中絶記事をめぐって（阻止連ニュースNo11）より

〈座談会〉 均等法でどう変わる

〈トビックス〉 とうとう成立“均等法”／児童扶養手当も“改悪”成立ほか

〈集会から〉 第二回国際フェミニスト会議

〈あこらのあこら〉 ナイロビに行きます（あこら旅の会）

〈事務局から〉 公益側委員と女性官僚に手紙を出そう！／

夏の合宿は鳥取で！ ほか

〈女のつどい・女の講座〉 六月十五日～七月二十二日

一〇〇号（一九八五年六月）

特集31号「均等・平等・保護」 ￥1600

〈巻頭言〉 均等法・派遣法、そして

〈AGORAZEIN〉

I・均等法成立、そしていま

天野和明・井ノ部美千代・金住典子・駒野陽子

斎藤千代・仁木ふみこ・林陽子・増田れい子

II・人間平等法を目指して

天野和明・今泉誠子・斎藤千代・柴山恵美子
仁木ふみ子・増田れい子

〈誌上再録〉 密室の攻防

―男女雇用機会均等法の舞台裏（制作NHK）を見終わって
均等法でどう変わる

〈報告〉 成立した労働者派遣法

―「人間リース」の合法化 林 陽子

〈手記〉 「私にとつての平等・保護」

コンピュータ業界のこと 三好久美子

私にとつての雇用平等法 牧田まゆみ

普通の人間ということ 武山久恵

四年生の秋 藤本朋子 ほか

〈論文〉 第三段階に入ったアメリカの女性学 杉本貴代栄
〈均等法攻防戦国会会議録〉

第百一回国会衆議院本会議／衆議院社労委／衆議院本会議／参議院本会議／第百二回国会参議院社労委／参議院本会議／衆議院本会議

〈資料〉

1. 「児童扶養手当法」の改正に対する申し入れ（修正案）（48団体）

2. 国連主催の一九八五年国連婦人の十年世界会議を迎

えるに際し婦人問題企画推進本部に対する要望(48団体)

3. 男女雇用機会均等法案の参議院社会労働委員会可決に際しての声明(48団体)

4. 今後の家庭科教育の在り方について(家庭科教育に
関する検討会議)

5. 雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保を促進するための労働省関係法律の整備等に関する
法律案に対する修正(第百二回国会で可決)

6. 雇用における男女の均等な機会及び待遇に関する決
議(第七十一回ILO総会)

一〇一号 一九八五年九月

〈新宿〉私たちが見たナイロビ会議 ¥350

〈緊急アピール〉 なぜプライバシーを侵害するの?

人権侵害と保安処分につながる売春行為実態調査

ナイロビ会議報告 8・19婦人問題企画推進会議情報委員
会から

今までで一番気持ちのよい会議 主席代表・森山眞司

大きかった「コンセンサス」の意味 政府代表・縫田暉子

できなかった決議案審議 政府代表・赤松良子

日本のNGO女性が情報を「輸出」 政府代表顧問・山崎倫子

座談会 私たちが見たナイロビNGOフォーラム

連載 老人を介護して4 石川房子

TOPICS 「時短」へ労基法改正を／四八団体、秋に
日本大会を／政府主催の会議は十月十四日／大槻さんの
在職中の勝利をめざして／来春判決? 鉄道もラストスパー
ト中／女たちが創る8・9ヒロシマのつどい／ことしもマ
ラソン演説会／五年に一度のプライバシー管理／十月一日、
国勢調査に疑問／婦民、新委員長に近藤悠子さん／女の雇
用労働者、ついに過半数に
ひろば あごらのあごら

資料「二〇〇〇年にむけての女性の地位向上のための将来戦
略」要旨 一九八五年七月二六日 ナイロビ世界婦人会議で
女のつどい・女の講座

一〇二号 一九八五年一〇月

〈新宿〉買春調査は必要と思うか ¥400

〈巻頭詩〉 「文字」 堀場清子

インタビュー

「要保護女性」の調査は必要」の立場を聞く

売春問題と取り組む会事務局長・日本キリスト教矯風会

高橋喜久江さん ききて 斎藤千代

TOPICS 労基法「改正」大詰めへ／労働省のヒアリング始まる／秘密を漏らせば死刑か無期／「売春行為者に

対する実態調査」都是事実上実施返上／買春市議への女たちの抗議に市議会は「関知せず」と回答／全国婦人会議に二三・六倍もの応募が殺到（東京都）／昭和六〇年版『婦人労働白書』にみる「婦人労働の実情」その1

集会から 中山千夏・松井やよりさんのナイロビ報告／男女雇用平等法を成立させる愛知の会六周年記念パーティ連載 老人を介護して 5 石川房子

はまごうを吹きわたる風の中で 9・14・15 鳥取会議

TVから ベビーは日曜日には生まれない（NHK

「おはようジャーナル」／良寛はなぜ子どもと遊んだのか NHK教育（五夜連続）／女の声が低くなる？ NHK「TVコラム」

ひるば あごらのあごら「百号」

女のつどい・女の講座

一〇三号 一九八五年十一月

〈山口〉 指紋押捺を考える ￥480

心の痛みがわかりますか

最終意見陳述

丁 美佐枝

崔 善愛

話を聞かせてください 丁順女さん 趙健治さん

たつた一人の反乱

山崎 たけ

知りたくなかったこと

森川万智子

TOPICS 青少年保護条令に苦しい「合憲」判決／ことしては女子大生の求人が多いというけれど／詩人モロイセさん死刑に／母子保健法改悪阻止大集会は十二月十四日／女子のパート労働者三二八万人に／男より七分長いテレビ視聴時間／ラジオ沖縄で「女性がつくる ラジオ十二時間スペシャル」

女の生き方に大影響 均等法諮問案出る

資料

女子労働基準規則案要綱

雇用の分野における男女お均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律施行規則案要綱

事業主が講ずるよう努めるべき措置についての指針案

TVから 「橋」をつくらせない町 TBS「報道特集」から／「ふるさと食品」の正体を見る NHK「くらしの経済」

ひるば あごらのあごら

女のつどい・女の講座

104

一〇四号 一九八五年十二月
特集32号 ナイロビが語りかけるもの ￥2000

あこら旅日記

三好久美子

私のNGOフォーラム85報告

森川万智子

NGOフォーラム点描

渡辺 和子

国連本会議傍聴記「初のコンセンサス」への道

松本侑壬子

ワークショップ報告

女性に対する暴力 NOW (全米女性組織)

第三世界の女性作家たち 渡辺和子

職場の中の女性差別 あこら

幼児に対する性的虐待防止 CAP (カリフォルニア幼

児虐待防止教育センター)

中絶と優生思想 あこら

フェミニストのための情報ネットワークを あこら

アジア女性の研究と行動のネットワーク AWRAN

日本における女性の労働条件 国際婦人年北区の会

女性差別撤廃についての討論

ヒューバート・ハンフリー・インスティテュート コロンビア大学

政治参加のために女性を教育する

ヒューバート・ハンフリー・インスティテュート

神奈川における女性問題 神奈川県・国際婦人年の十年

世界会議派遣実行委員会

アバルトヘイトの下での女性 SWAPO (スワボ) 女性委

母親に関連する子どもの開発 ケニア児童福祉会

差別と戦争 あこら

女とコミュニケーション イスラエルラジオ ケニア

NGO組織委員会 ソックランドラジオデンマーク

アフリカの労働組合における女性の役割

アフリカ労働組合連合

第三世界のフェミニスト出版と家父長制社会をゆるがす

作家活動 DAWN

男女平等をめざして 北九州女性代表団

沖縄の買(売)春 八〇年沖縄女の会

女性・開発・実現・連帯

アメリカン・フレンズ・サーピスセンター アイシス

・インターナショナル (USIS イタリア) ガブリエラ

(GABRIELA フィリピン) イクタ (ICDA ベルギー)

女性のためのパワフルな行動 アラスカグループ

平和 ウイメン・フォー・ピース

日本の女性解放運動 国際婦人年をきっかけとして行動

を起こす女たちの会

女性の法律と発展 OFF

キャンパスで手織りを実演 さをり

〈フォーラム再考〉

女たちは何を話し合おうとしたのか

福田 光子

アンケート ワークシヨップ申請者に聞く

ナイロビ会議と日本人の参加

座談会

ジャーナリストが見たナイロビ会議 そして、これから

天野和明／有馬眞喜子／池谷まゆみ／河合真帆／高増

泰子／富重圭子／羽太宜博／布施優子／松本侑壬子／

岸田製綏／八木宏子／斎藤千代

フォーラム 85 (FORUM 85)

抄訳・甲木京子

私のナイロビ報告

ナイロビへの道程

高橋ますみ

ナイロビへ

田村 勉子

ナイロビ大学門前の交流

古野佐喜子

コンペよりナイロビへ

金谷千慧子

ナイロビと私

桑原ちえ子

いけないでしょうか？こんな参加の仕方は…

梶谷 典子

すばらしかった女たち

ナンシー・テュニス

今、小さな窓を開いて

ケニアで出会った女たち

NHKの取材をめぐる

平和を願う心は国境を越えて

会議の中のマスメディア

ケニアの作家グキ・ワ・ジオンゴと

“走馬看花”だった私のナイロビ会議

フォーラム、85に参加して考えたこと

きかしたい「行動」の味つけ

ナイロビ・シヨック

ナイロビに行つて、よかった

草の根の原点に立ちつづけよう

お帰りなさい！

孫を預かつて

ナイロビ情報ア・ラ・カルト

インタビュー・ナイロビ会議参加者に聞く

この十年、そしてこれから

確実に大きく前身した女たち

“ただのおかみさん”が公費ツアーに参加して

公費ツアー主催者側の言い分も聞いて……

日本の女よ、エゴイストにならないで

伊藤 文代

羽後 静子

池田 保子

近藤 暁美

池谷まゆみ

常盤 和子

大川 由美

利根川樹美子

奥川 睦

半田たつ子

大脇 雅子

小島サカエ

高田 登

中村 克子

久保田眞苗

深尾 凱子

鈴木 章子

金森トシエ

松田やより

インタビュー・ケニアの人と大地

岸田信高さん 岸田製袋さん

座談会 ナイロビってなんだったの？

「行った人」池田保子／石原豊子／甲木京子／川本多恵

田村尅子／福田光子／三好久美子／森川万智子

「行かなかった人」榎原亜矢／岸本桂子／桑田美保／小

島サカエ／鈴木三枝／鳥谷敦子／中野由美子／藤本朋子

私にとつてのメキシコ、コペン、ナイロビ…… 斎藤千代

資料1 「二〇〇〇年に向けての女性の地位向上のための

将来戦略」要旨 一九八五年七月二六日 ナイロビ世界婦

人会議において採択

資料2 平等・発展・平和 二〇〇〇年にむけての行動

一九七五年十一月二二日国連婦人の十年日本大会決議

資料3 二〇〇〇年に向けての平和と全面参加についての宣言

資料4 フォーラム展示資料目録

一〇五号 一九八六年二月

《札幌》 《あこら札幌》の十年 ￥400

女が変わるとき社会が変わる

小沢 遼子

座談会 自らを装う

参加記 女は足もとから変わる

谷 百合子

あこら札幌十年 これから

《あこら北海道》ウラ話 呼びかけ人

連載 老人を介護して5

《均等法元年》ヘスタート！

省令・指針・ついに公布

男女雇用機会均等法及び改訂労働基準法に基づく省令及

び指針一覧／均等法・労基法改訂／省令・指針「案」

と今回の決定の相違点

TVから 食卓を変えた男たち NHK「おはよう列島朝

いちばん」(三日連続放映)

続刊の方向でさらに検討を 緊急運営会議報告

ひろば あこらのあこら

“特集”と“月刊” 資料の掲載をめくって

付録 「均等法」「労基法改訂」省令・指針 一九八六年

一月二七日 労働省

一〇六号 一九八六年三月

《東海BOC》歩き出した主婦たち ￥400

巻頭言 歩き出した主婦たち

奥村和子

“欧風家庭料理”二号店開業

立木侑代

わたしは 世帯主

石岡幸子

久須美房子

山口 里子

石川 房子

主婦という肩書きで働いています
度胸一つでやってます

合理化の中で働く意義を考える

再出発して六年たつて

主婦から公民館主事へ

家庭料理のピッチャーになつて

家事代行業をはじめて

専業主婦十五年、そして自立

パートで働いて

連載 老人を介護して6

TOPICS

国家秘密法を廃棄する女たちの会／「年金」をワイにする（？）主婦300万人！／いま「年金」を取り始めた
ほうがトクな人も……／なぜか目立つ専業主婦優遇策／
円高で時短促進？／朝日新聞に、女の宿直室？／通称旧
姓が認められないNHK

ひろば あこらのあこら／〈広島「あこら」を読む会〉を
始めます ほか

米川佐和子

岩田 和子

岩崎 信子

二宮 純子

金子 富子

森川久美子

諏訪部美和子

横田美佐子

渡久地政子

石川 房子

一〇七号 一九八六年四月

〈九州〉高木葉子さんを惜しむ ￥400

巻頭言 高木葉子さんを惜しむ

家庭科の男女共学問題を考える

妻、葉子を偲んで

今いるところで花ひらけ ジューン・シートさん

連載 老人を介護して

もつたいないか上等か、はたまた並か電話番号

（あこら九州）森崎民子

あこら読書室

『女たちの時代』野口郁子著 葦書房／『山梨県民運動と
女たち 母の肖像』大森かほる著 論創社／『女性ディレクタ
ーの現場』講談社

ことは 元氣の出る『あこら』をつくります

86年度第二回運営会議・第一回全国編集会議のご報告
ひろば あこらのあこら／アジアの女たちが告発するもの／
元凶は日本の経済侵略／アジアの女性解放を求めて

TOPICS さあ2000年へ／世界はNEW TREN
D／出産休暇は伸びたけれど、多胎給付は5月15日以降

一〇八号 一九八六年五月

〈新宿〉「自立のおしゃべり」に風穴をあける ￥400

巻頭言 第二世代の〈あこら〉に向けて 細谷洋子

あこら可能性教室(ある日の「自立の心理学」から)

「自立」のおしゃべりに風穴をあける

インタビュ

傷ついたからこそ ひとの傷を支える 立中修子さん

連載 老人を介護して? 石川房子

あこら読書室

『愛は光なり力なり』中村又一著 三晃書房／『女性に

よる民間教育審議会の教育改革提言』女性による民間教育

審議会編集／『いかそう! 国立市婦人問題行動計画

(案)』生かそう! 国立市婦人問題行動計画(案)・市民

連合編集／『愛したたかい生きた 高木葉子さん追悼文

集』福岡・女性と職業研究会編

自らを装うNo.1 化粧

久須美房子

TOPICS 大槻さん全面勝利で和解／「均等法」の効

果／鉄連裁判もいよいよ大詰めに／児童扶養手当の切り捨

てに怒りの訴え／〈母子保健法の改悪に反対する道民連絡

会〉発足／〈民衆学会〉設立呼びかけ／〈行動する会〉

第二世代に(?)／〈男女雇用平等法を成立させる愛知の

会〉が発展的解消／女性団体の「顔」新旧交替／〈女性

民教審〉事務局移転

女の講座・女のことい

資料 各地の機会均等調停委員会・委員名簿(一九八六

四月一日現在)

一〇九号 一九八六年六月

〈山口〉 指紋押なつを考える ￥400

巻頭言 指紋押なつの問題と〈あこら山口〉の私たち

田口美香

朝鮮人としてありのままにやっていこう 李幸宏さんの話

在日朝鮮人として日本人として 李幸宏さんの話を受けて

CASE1 金明植さんがあぶない

女は男の従属物か

矢野百合子

CASE2 福岡高裁での意見陳述

崔 善愛

なぜ指紋押なつが必要なの?

〈指紋押捺制度を撤廃さ

せる会・北九州〉発行『在日韓国人・朝鮮人への指紋制

度なぜなぜ問答集』より

会ったヨ!話したよ! 〈九州〉と〈山口〉のあこらたち……

〈山口〉から見た〈九州〉のひと

田口美香

〈九州〉から見た〈山口〉のひと

甲木京子

人と出会う

三好久英子

飲みに行きたい仲間だなア

森川恵理子

あこら読書室

わたしの仕事

『金明植さんを知っていますか』三鷹外国人登録法を考
える会発行／『風潮』井上靖著 新潮文庫

十七年目に「明るくなったね」と言われて
TOPICS さらに減った女性議員／男女産み分け開発
の真意？／レンタル自習室、三宮にオープン／阪急京都
線に女のスペース

TOPICS 児童手当法改「正」支給期間大幅短縮／衆
参同日選挙に二人のあこら会員が立候補／“二分の一の
神話でなく”“三十六分の一”の実話

TVから
朝・昼・午後のワイドショー／聞いてますヨ 赤ちゃん
は NHK 「母子の絆」

一一〇号 一九八六年七月

〈札幌〉みんないっしょに生きたいね ￥400

母子保健法改「正」を考える

『日本の天地砕けたり』田中正造と谷中村の人々 志村 章子

インタビュ

診察室から 幌南病院産婦人科医長 菊川 寛
ふるいわけなんてこめんだよ！ 優生保護法と母子健康法

優生保護法の改悪を阻止し法の撤廃をめざす会
東由佳子 石川美也子

「日本の天地砕けたり」田中正造と谷中村の人々 志村 章子
〈あこら新宿〉絶句・虚脱・絶望……でも元気だそうヨ！
「あこら新宿」の七年 ￥400
巻頭言 〈東海BOC〉の実行 斎藤 千代

座談会 みんないっしょに生きたいね

私にとっての〈東海BOC〉

あとがきにかえて

久須美房子

私の見てきた〈東海BOC〉

資料 母子健康法とは……／母子保健法改「正」のポイ

〈東海BOC〉とネットワーク

山下智恵子
羽後 静子

〈東海BOC〉の世界

たった一日の体験から

〈東海BOC〉新入生の記

〈BOC〉と私

〈BOC〉を知って

老人とともに歩いて

いい女になりたい

あとがき

〈東海BOC〉これでいいの？

TVから

輝いて生ききった女のひと NTVドキュメント86「生

きる―鈴木茂子の輝き」／韓国に老いた妻たち TBS系

報道特集／平等と自立を淡々と実践 テレビ朝日系「車い

すのおてんば娘」

TOPICS 「均等法」で大幅に伸びた女子新大卒の求

人／スタートした「人材派遣法」／「派遣法一〇番」

もスタート／女性史研究に朝日学術奨励金／戦後総決算

「社会科」も…… 体外受精の受胎率向上／ピル解禁の方

向に／男風呂が女風呂に化ける傾向

自らを装うNo2 センスって何だ？

ひろば あこらのあこら

池戸 清子

篠原ナミ子

倉上 雅子

倉田 良江

太田 佑希

根文洋子

深田セツコ

高橋ますみ

女の講座・女のつどい

一一二号 一九八六年十月

〈旭川〉幌延問題と私たち ￥400

うずくもの

「幌延問題」とは

私の幌延日記から

幌延問題と女たち

幌延問題を通して

女たちのネットワークを

6月28日／幌延行

肝つ玉オバサンの悔恨

核と緑は共存しない

自らを装うNo3

〈新連載〉働き続けた四〇年

TOPICS 母子保健法への布石始まる ほか

女の講座・女のつどい

一一三号 一九八六年十一月

〈佐世保〉佐世保の街と私たち ￥400

巻頭言 ネクタイの色と肌の色

木下尚子

米戦艦ニユージャージー寄港の街から
路傍の花と核と個と

（あこら佐世保）と私

（あこら）に入つてよかつたと思うこと

このころ思うこと

連載 働き続けた四十年（講演録）

見たぞ！ 恐怖の観閲式

山口のり子

TOPICS 夫婦別居の配転、不当労働行為で無効、全

面勝訴に／宿直も全く男性なみに／パートの中心は四十代

の主婦／男女産み分けは「遺伝病回避に限る」／寸劇の出

張・出前いたします／朴寿南さんが映画『もうひとつのヒ

ロシマ』を完成／「零歳児保育がないのは市の怠慢」訴訟

敗訴

ひろば あこらのあこら

あこらを図書館に！

お近くの図書館、母校の図書館、女性センターなどに声をかけてください。

「朝日」の記事のコピーなどが必要な方にはお送りします。

TEL 03-3354-3941

FAX 03-3354-9014

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を読みとく新聞です。

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

03-3402-3244

03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

見本紙
ご請求下さい！

大阪支局
〒530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404
& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ／毎月5・15・25日発行
購読料：年間9,000円・半年4,500円（送料込み）

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。

femin

〈あごろ〉は、人と人が出会っひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌『あごろ』を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごろ』の誌代込みで月額七百円。一年前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千円。ハガキ・FAX・メール・電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉のご登録も、どうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCリバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！。ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

どちらも〒160・0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル
☎ 03・3354・3941(代) FAX 03・3354・9014
Eメール XLV 05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp

あごろ 279号 特集DVII DV支援の現場から ●発行2002年11月10日

●編集 あごろ富山・グループ女網

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,085円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部



9784893061263



1920036010851

ISBN4-89306-126-7

C0036 ¥1085E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,085円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 〆03354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

特集DVI 沈黙から行動へ

『あごら』262号

資料 支援の現場から

DVという棘 齊藤千代
DVに対する総理府の取組みを検証する 戒能民江
DVの定義と被害者支援の現状 西山恭子
DV被害を語る——ある被害者の体験 原嶋栗子
婦人相談所とDV被害者女性の保護 鈴木真
自立への支援／女性と生活保護 川村幸子
インターネットにおけるDV被害者への支援 佐藤真行
DV加害者Ⅱ男性のケアについて 豊田正義
民間シェルターを立ち上げて 野川晴美
シェルターのなかの支配 秋風涼子
各地の取り組み(三重／富山)
全国シェルター一覽
女性に対する暴力に関する基本的方策Ⅱ男女共同参画審議会答申
「男女共同参画社会基本法」に基づいた自治体のDV関連条例
諸外国のDV関連法
「夫(恋人)からの暴力」調査Ⅱ夫(恋人)からの暴力調査研究会
女性に対する暴力調査 東京都生活文化局女性少年部 ほか

サイレントマイノリティのBOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

03-3354-3941 FAX03-3354-9014

郵便振替 00130-3-39331

E-mail boc@mb.infoweb.ne.jp